
閉ざされた虚構の不協和音

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉ざされた虚構の不協和音

【Zコード】

Z9774E

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

繁栄を極めた電腦都市は「情報危機」によつて壊滅的な打撃を受けた。それから10年、残骸の中で過去の罪を清算するため、閉ざされた虚構を整理する組織があつた。空想科学祭2008出展作品です 2010年10月2日 誤字脱字推敲しました

00 : 讀まなくて済むこのブログ（前編）

IJの作品は「空想科学祭」のために書かれたものです。

他の作品も読みたい！ という方は

<http://sffest2008.sorabato.net/>

くじハル。

「文明」という名を授けられた人間の所業は、時に飛躍的な発展を見せる事がある。

恰も環境の変化によつて進化を余儀なくされた生物達のように、ほんの小さな切つ掛けでそれまでの緩慢な変化とは比べ物にならない速度で発展していく。

例えば18世紀、ヨーラシア大陸の極^西に端を発する産業革命では、工場制機械工業の導入による産業効率の急激な上昇、蒸気機関の発明による動力の確保など、多重な変化による急激な革新が見られる。

そして21世紀末、人間の織り成す『文明』は、生物学分野、物理学分野、化学分野などにおいて同時に躍進を引き起こし、いまやサイエンスの世界は無秩序な状態にあつた。遺伝子の解読、意識の情報化、情報空間の肥大化……挙げればキリがない数々の飛躍の中でも特筆すべきは、人間が鍊金術を手に入れようとしている事だろう。

16世紀には不可能とされていた元素の変換は、量子物理学の一分野である素粒子物理学の研究が極まつた事で具現化に近付いている。量子力学と相対性理論とを融合した、「量子重力理論」の完成である。

さらにそれから100年、人間はすべての物質の根源である素粒子の挙動を操り、欲するがまま元素を手にする事が出来る能力を手に入れようとしている。

神が創りだしたイキモノは、とうとう神の領域に足を踏み入れようとしていた。

西暦2201年

「あーごめん、俺、耳悪いんだよねー。もっかい言つてくれる?」
闇に閉ざされた路地裏に、少年の声が響く。変声期を終えて間もない、どこか幼さを残した声だ。

チャキリ、と金属音がして、青ざめた男性の額に銃口が押し当てられた。彼が命の危険に曝されているのは一目瞭然。壁に張り付き、降参を示して両手を額の横に添えたままがたと震えていた。

そして、旧型の回転式拳銃を握る手の持ち主は、声に見合つ年の少年　いや、少年と呼ぶか青年と呼ぶか微妙な年頃だ。

彼は物騒な笑みを張り付けて、目を細めた。

「……頭吹つ飛ばされたくなかったらさ」

「ひいいつ！」

壁に貼り付けられた男性は、少々品の悪い悲鳴をあげた。

崩れかけた有機煉瓦の壆レンガが男性の体重に耐えられず幾らか零れおちた。両手を広げれば通れなくなってしまう程度の幅しかない袋小路で、男性の逃げ場はない。襤襖ぼろ切れのようになってしまったシャツを辛うじて身に纏つたみすぼらしい出で立ちと、薄汚れてこけた頬、やせ細った手足は男性の栄養状態が良くない事を示していた。対する銃の少年は、細身とはいえ引き締まった体をしているのが分かる。トリガーに指をかけ構えた姿も様になつており、十代も半ばと思われるのに、こうじつたやりとりを日常化しているのはすぐに見て取れた。

街の片隅に濶む闇のよつた髪と同色の瞳が収まつた目を細め、ト

リガーにかけた指をゆっくりと動かす。

耳に十字架のピアスが煌めき、微かに揺れる。

が、その時、少年の肩に別の人間の手が置かれた。

「やり過ぎですよ、セイ。いい加減やめなさい」

銃を構える少年の背後から現れたのは、同じ年頃の少年。涼しげな切れ長の目に真紅の瞳が嵌め込まれている。黒髪にはところどころ赤のメッシュが入っており、一部だけ細くのばした後ろ髪を蒼い糸で束ねていた。ノースリーブジャケットの袖からは鍛えられた上腕が伸びている。

どうやら銃の少年を諫めようとしているようだ。

「怪我をさせると面倒です」

が、刹那、大気を震わす銃声が鼓膜を貫く。

その轟音に、止めようとしていた方の少年は、真紅の瞳が收まつた切れ長の目をさりげに細めた。

「仕方ねえな」

銃口を飛び出した銃弾は、男の大腿をかすめ、地面に突き刺さっている。

少年の握る銃からは細く煙が上がっていた。威嚇射撃。しぶしぶ銃を腰のホルスターに収めた黒髪の少年は、もう一人に軽く声をかけた。

「後は頼むぜ、コウ」

「……またですか？」

「コウ、と呼ばれた赤目の少年は手慣れた仕草で男を縛り上げる。丈夫なワイヤーは男の全身に喰い込み、赤い線を幾重にも作り出した。

「……の……人殺しつ……」

縛られた男は辛うじて言葉を絞り出したのだが、真紅の瞳を持つ少年は感情を全く映さない冷徹な表情で男を見下す。

「まだ言つのですか？ セイに頭、吹つ飛ばされますよ？」

淡々とした口調に怒りも悲しみも、罵倒の色もない。

ただ、静かに忠告しただけ。

赤目の口ウは静かに諭す。

「人類は永遠の生命を得ようとして過ちを犯しました。ボク達『ソルティーノ』はその罪を清算しているだけです」

「だからと言つて取り残された者達を消滅させるのはただの殺し（エゴ）だ！」

「『不協和音』を放置すれば今の世界にもバグが広がります。そうなれば再びあの過ちが繰り返されることとなる。それだけは避けなくてはいけないのでよ。それを、情報危機^{サイバーショック}で職だけを失ったキミにどうこう言われる筋合いはありません」

そう言い終わると口ウは、まるでそう決められていたかのように機械的な仕草で男の鳩尾に拳を叩き込んだ。

その間にも真紅の瞳に感情の色は見られない。

風も無い穏んだ空氣の中で、ただ佇んでいた。

01 : 何も始まらない説明文

人類が待ちに待つたであろう23世紀の到来は、あまりにも呆気ないものだった。

空から恐怖の大王が降つてくる事もなく、かといって人間が宇宙に飛び出したかと言わればそうでもない。宇宙ステーションなどという単語はもはや知っている人間の方が少ないだろう。人間は数百年を目指し続けてきた宇宙への進出に見切りをつけた。

だが、代わりに広がった世界もあった。

すべてが「ゼロ」と「イチ」で表わされる一進法の世界である。情報空間はもはや無限大とも呼べる広さにまで膨張し、第4の次元とまで呼ばれていた。

すべての処理を終えたコウは、緩く後ろでまとめた赤メッシュの入った黒髪を風に流しながら、ゆっくりと街を歩き出した。

かなり前から主流となっている有機素材の壁を持つ建物が、左右から迫るようにならって立並ぶ。足元の地面を覆うのは、太陽光を吸収し、それを65%という驚くべき効率で総合エネルギーに変換するシステムへと直結しているパネル。ほぼすべての公道がこのパネルで覆われてから既に長い。発明された当初は世紀の発明と言われたのだが、今やそれも当たり前のモノとして受け入れられてしまった。

いつの時代も、人類は文明の恩恵を忘れてしまうものだ。

街の中央には巨大な建物が太陽の光を遮つて聳え立つ。黒光りするそれは、人気のないこの街の荒廃を象徴するかのように佇んでいた。

以前この街は、世界でも有数の電腦都市として情報社会を謳歌し

ていた。

しかし現在、道を歩いても住人に会う事はほとんどない。いたとしても、先ほどのように職を失った浮浪者だけ。10年前は、歩行者などいなほどに地上路も空中路も車が走っていたのだが、その影もなく、それどころか生物の気配自体が酷く薄いのが現状だ。

「コウは、しばらく歩いた後ににある建物の前で立ち止まつた。高い建物が多い中では埋もれてしまつような、窓のないシンプルな佇まいだ。

「4分遅刻……許容範囲内ですね」

左手首に付けたアナログ時計をチェックし、コウは扉の隣に設置されたタッチパネルを操作した。

小さな電子音がして、扉が横にスライドする。

その瞬間、相棒であるセイの声が響き渡つた。

「おっせーよ、コウ。シン兄の機嫌悪くなつたらビースンだよ」「すみません。でも、ボクにすべて押しつけて帰つたのはキミでしょう?」

「細けえこと気にすんなよ。ハゲるぞ?」

そう言つて肩をすくめたのは、先ほど男に銃を突き付けていた黒髪の少年。コウにとつては仕事上の相棒であり、唯一の友人とも呼べる相手である。

路地裏で男に向けていた物騒な笑みはどこへやら、少年らしいはじけるような笑顔を浮かべ、コウを迎えた。

灯りが乏しい通路を幾らか歩いた後、二人は扉の前で立ち止まつた。

黒髪のセイが簡単に操作すると、扉が開いてむき出しになつてゐる機器の数々が二人の少年を出迎えた。コードも基盤も全く保護されていない一見無残な姿にも見える機械の集合体。起動を示すダイ

オードの光が時折思い出したように煌めいている。

この光の気配の薄い小さな場所は、一人の少年が所属する組織の
メイン
主要施設だった。

薄暗いこの部屋の中央には彼らのバスがいる。まだ若い、青年とも呼べるような年ごろの彼は5年前に然る要人から個人的な要請を受け、この組織を設立したのだ。

その年若いバスは、いくつも並んでいるモニターから目を離す事もなく、入ってきた一人を出迎えた。

「遅かつたな、コウ……4分45秒の遅刻だ。セイが待ち草臥れていたぞ？」

力タカタとキーボードを叩く音がする。この時代において、キーボードを使うのは非常に珍しい。

「遅れた事は謝ります。ですが、出迎える時くらいこちらを向いたらどうですか？」

「ああ、悪い悪い。いろいろと面倒な報告があつてな」

赤目のコウに言われ、バスは椅子に座つたままぐるりと振り向いた。

相手に柔な印象を与える青い瞳と、一人の少年と同じ黒い髪。ゆるく開いた口元には火のついたタバコがくわえられている。シン＝オルディナンテ 10年前の情報危機後に設立された事後処理機関「ソルディーノ」の創始者にして最高責任者である。

とても重要組織の責任者とは思えないが、腕は確かだ。こう見て、能力式の初期教育課程をわずか6年間で卒業し、さらに肩書きを5つ以上所有するという数少ない人間である。

とはい、赤目のコウ自身も同じよつに初期教育課程を6年間で終え、弱冠16歳にして2つの肩書きを所有するエリートなのだが。

シンは青い目を細めながら肩を竦めた。

「悪いついでに、一つ行つててくれるか？」

「……俺達、来たとこなんだけど？」

黒髪のセイが不機嫌に返す。

「緊急事態だ。迷子担当はお前たち一人しかいないんだ、ちゃんと働いてもらわないと困る」

「つたく……」

セイは不機嫌を隠すことなく舌打ちすると、隣で表情もなく立っていたコウの肩にポン、と手を置いた。

「さ、行こうぜ、迷子係」

赤目のコウもため息をつき、シンの部屋を後にした。

この街が情報危機^{サイバーショック}以前に非常に発展した理由の一つが、「ユニゾン・システム」の生みの親である組織がここに存在したという事実だ。

ユニゾン・システムというのは、情報空間内で現実世界と変わらない活動を可能にした装置の事である。

街の中央に大きな拠点を構えた大組織「アルトパルランテ」によつて、ユニゾン・システムが開発されたのは今から一桁の年月をさかのぼる。

それはまず、全身を駆け巡る神経系を情報空間内に再現する事から始まつた。

生体に張り巡らされた神経系を情報空間内に再現し、感覚情報を全身から受け取り全身に向けて意志を発令する神経伝達電子信号を生体から読み取つて、電子信号を疑似神経に再現する。そして、逆に疑似神経が受け取つた信号をオリジナルの生体に復元する。そうする事で情報空間内の自らの体を自由に操り、思考し、さらには様々な体験を可能にしたのだ。

情報空間内に再現する疑似神経系は、もともと備えられている雛型から個人差を修正し、さらには神経系の成長をモデリングした自動更新機能を備えているという複雑な動きにも耐えうる上に生体への影響も少ない、非常に優れたものだった。

こうして人間は情報装置内で生体と変わらぬ活動をすることが可能になつたのだ。

黒髪のセイと赤目のコウは、一人揃つて滑らかな球状をした「ユニゾン・システム」内に入り込んだ。

10年前の情報危機以来、サイバーショック 製造が中止になつたはずのユニゾン・システムは、二人にとつては銃と同じ、慣れた商売道具でしかなかつた。

ユニゾン・システム内は光がない。いつたん扉を閉じればシステム内は通常呼吸可能な充填液で満たされ、神経の電気信号を読み取るセンサーが周囲一面に発動する。

「コウは真つ暗なシステム内で目を閉じた。

「ユニゾン・システム起動、シンクロ率0・3%……1・7%……4・8%……」

どこからか知れない、シンの声が耳に届く。

ユニゾン・システムの開発により、ゼロとイチで支配される情報の世界はほぼ無限大とまで思えるほどに膨張した。

真っ先に飛びついたのは公共機関と教育機関だった。

物理的な移動なしに学校へ通い授業を受ける事が出来る。また、仕事場へ行かずとも作業が出来る。それは、すでにインターネットによる情報化が少なからず進んでいた社会で、新たなツールとして瞬く間に取り入れられた。

間もなく、一般企業もオフィスを閉鎖し、情報空間内に会社を移転し始めた。

他にも、情報体の受けた信号を現実世界の生体に伝える「フイー

ドバツク」という機構を利用した医療分野、特に精神科の治療が進められた。身体的な病気や怪我と違い、現実では決して触れる事の出来ない「精神」は、情報空間内では疑似神経系の情報体として存在する。そこに直接働きかけることで、精神的な病の治療を行つたのだ。

その後、システムを応用した娛樂も誕生するに至り、第4の次元とまで呼ばれたその世界は、大量の『人間』を包有し始めた。

現実世界に見切りをつけた者、有り余る財力を持ち最後の快樂を求める者。

この時点では、情報空間は飽和へと近づいていた。

大量の人間が溢れ返る空間内、無理な活動を行つたり、情報空間内での事故にあつたりと、フィードバツクが強過ぎて身体に変調をもたらす人間も少なくなかつた。情報空間内における行方不明者、死者は今となつても数え切れない。

また、ユニゾン・システムで情報空間内に存在していた場合、現実世界の体が死亡したとしても、情報空間に取り残された生体情報は消える事無く残つている。

現実世界の生体を失くした情報体が、情報空間に残つてゐる事は多々あつた。

こうして膨れ上がつてく情報空間に、ある時こんな噂が流れた。

情報空間の神経系を残し、生体を抹消すれば情報空間で無限大の時間生きていいくことが出来る

ある意味で、不老不死理論の完成だつた。

「シンク口率70%オーバー、そろそろ繋ぐぞ、二人とも」
何処からともなく響いて来るシンの声と共に、自分の体の感覚が薄くなつていく。

「ウはこの瞬間がたまらなく嫌だつた 無論、感情を表に現す

のが不得手な彼はそんな事を口に出したりはしないが。

廃棄された情報空間、通称「虚構^{タチヨック}」と現実を繋ぐ一瞬。その一瞬だけ、自分がこの世界のどこにも存在しないかのよつた感覚に陥つてしまつ。

「シンク口率が90%を越えたら迷子^{トコリ}の位置情報を元に適当に転送するから後は適当にやれ」

「そりやねえぜ、シン兄！」

セイの叫びも虚しく、感覚が虚構^{タチヨック}とリンクする。

10年前の情報危機で置き去りにされた世界に飲み込まれていく。

10年以上も前の話、不老不死理論が都市伝説的に広まり、それを真に受けた人間が大量に発生した情報空間には、本体を失った情報体が溢れ返つた。

現実世界から逃げ出した者、年をとった権力者、はたまた子供の好奇心。

俗に言つ「迷子^{トコリ}」の誕生である。ユニーク^{トコリ}する生体を持たない情報体は年を取らず、情報空間にただ在り続けた。

10年余り前、回線を伝つて情報空間内を自由に行き来するようになった情報体のみの亡靈は、徐々に世界規模で問題視されるようになつた。

そして、溢れ返つた迷子たちを回収する役目を負う機関がいくつも設立された。シンの所有する事後処理機関「ソルティーノ」もその一つである。迷子の回収だけでなく、他にも情報空間の地図化や廃棄されたサーバーの情報的・物理的破壊なども請け負う、情報空間の掃除屋的存在である。

その中で、コウとセイは迷子回収の役目を負つていた。

切り離され、閉ざされた虚構^{タチヨツ}の空間で迷子になつた「靈達に救いの手を差し伸べていた。

02 : よつやく何か始まるかもしれない邂逅

転送が終了し、視界が晴れる。

情報空間内は常に暗黒で覆われている。その中で、あちこちが欠けてしまった黒の立方体として認識できる壊れかけたソフトや、すでに何なのか判別も出来ない情報の欠片が浮遊していた。

上下の間隔が薄い情報空間内で、信じられるのは自分の五感だけだ。

と、言つても情報空間に空気が存在しないので、疑似神経系を周囲のソフトとの混合から守るための防御^{ブロック}で感知できる触覚、装着したスコープから入る視覚情報、ヘッドセットによる聴覚情報の3つが感覚神経系に接続されている。無論それも概念を意識化して疑似神経に送り込んでいるだけで本当に見聞きしているわけではないし、声帯を震わせているわけでもないのだが。

さらにセイは腰に旧式の拳銃 あくまで本人は護身用と言い張つている を提げている。

もちろん、情報空間内において火薬で銃弾を打ち出すなどという事はない。

発射されるのは圧縮^{コンダ}プログラムを内包した疑似銃弾、あるいは予備の自己破壊^{ファイブ}プログラムを内包したモノ、そして接触した部位を破壊する情報破壊^{セーニング}プログラムの三種類。

「聞こえるかー、「コウ」「
「聞こえますよ」

耳元からセイの呑気な声が響いてきた。

ヘッドセットの感度は良好。セイの調子もよそうだ。

すべて疑似感覚だとは分かっていても、まるで隣にセイがいて喋つているような感覚を受ける。

ゼロとイチだけの情報体でしかないというのに、まるで生きているモノのであるかのような感覚に支配され、虚構^{タチエット}と現実を繋ぐ一瞬

と同じ不安が全身を駆け抜けた。

「全く、シン兄は相変わらず乱暴すぎるぜ。迷子の容姿すら分かんねーじやん」

「ここの辺りにいるのは確かなのでしょう? おそらくすぐに見つかりますよ」

「コウが棘腕輪スパイクバンブルに仕込んだワイヤーの調子を確認しながらセイの方を見ると これもあくまで概念的な事で、実際に情報体が動いたわけではないのだが 彼も銃を軽く手入れし終えたところだつた。迷子係と言うには少々好戦的な一人組、それが「ソルディーノ」に属する赤目のコウと黒髪のセイ。何気にこの業界では名の知れたコンビである。

「それじゃ検索、頼むぜコウ」

「またキミはそつやつてボクに押しつける」

初期教育課程を指折りの速度で終えたコウに負けず劣らず、セイはあらゆる分野の雑識に深い。

にもかかわらず、コンビを組んでからというもの、常に働くのはコウの方だ。戦闘となれば率先して動くというのに、それ以外は全く手を貸そとしない。

信頼を受けていると聞こえはいいが、セイの場合はただ単純に自分が楽をしたいだけだろう、とコウは認識している。

仕方なくスコープの解析をオンにして周囲を認識すると、暗黒の背景にぼんやりと浮かび上がる朱のラインが何本も視界を横切つた。さらに、壊れたソフトが林立する遙か彼方に、未だ稼働を続けるソフトの起動光が見え隠れしている。

セキュリティが生きており、さらにソフトが起動している。

「位置は特定できませんが、こここのセキュリティはまだ生きているようです。しかも、広さが尋常じゃない」

「コウの言葉で、セイは眉を寄せた。

「でも、この街でソルディーノ以外の生きてるサーバーなんて数えるほどしかないだろ?」

「……ええ」

「コウは自分の嫌な予感が当たらない事を祈りつつ、周囲の迷子探索を開始した。

その横で欠伸をしたセイが肩をすくめる。

「通常空間なら大声で呼べば済むつーのに」

虚構内ではそもそもいかない。音を伝えるといつ事は、相手の神経系に電気信号を送る、つまりは多少なりとも相手の情報を書き換える行為に当たる。

情報化する際に防御^{ハロック}がかけられる神経系情報体に対して許可なくアクセスし音を伝える事は不可能だ。少なくとも自分が相手を認識し、相手が自分を認識した上で許可を得、音声情報を受け渡す必要がある。

だから、この辺りとは言つても何処にいるのかも分からぬ相手を声で呼ぶ事は理屈上できないはずだった。

ところが。

「『ソルディーノ』の迷子係かしら？」

突如、二人の耳に凜とした女性の声が響いた。

今の時点で、この場にいるお互いと組織の主要施設以外にアクセス許可是出していない。知らない声が響くはずはないのだ。

はつとして振り向いたコウの目に飛び込んできたのは、声に似合う、自分より少し年上の女性だった。

丈の合わない薄汚れた白衣を纏っているが、小汚い感じはない。ふわりと揺れる淡い金髪が頬にかかり、くつきりとした顔立ちを彩つていた。薄いレンズの向こうに翡翠の瞳がはめ込まれた、意志の強そうな目。

その瞬間、セイが躍り出る。

「……お前、何者？」

セイは拳銃を構え、銃口を女性に突き付けた 繰り返しになるが、この行動も実際に銃口を突き付けているわけではなく、いつでも圧縮プログラムを射出できる体制に入つただけだ。ただ、概念的に

視覚情報としてそう映るだけ。

アクセス許可なしに声が聞こえる、それはすなわちハッキングされた事に他ならない。

もしハッキングを受け、破壊された生体情報がフイードバックによって現実の肉体にそれが伝われば最悪の事態だ。

「やはりそうね、黒髪がセイで、赤目がコウ。噂通り、好戦的な迷子係だわ」

「まさか、同業者ですか？」

だとすれば、ハッキング行為はマナー違反だ。確実にこの業界で地位を失う事になる。何より、ここはシンが統率するソルディーノの担当区域のはず。領権侵害の疑いも浮上する。

「違うわ、あたしは迷子よ。あなたたちが迎えに来てくれるのを待つていたの」

「迷子^{トリル}が問答無用で迷子係をハッキングするわけ？ んで、自分が迷子^{トリル}だと宣言するつづの？」

「……勝手に話しかけた事は謝るわ。だつて、早く気づいて欲しかったんだもの。でも、あなたたちに危害を加える気は全くないのよ」
その女性は両手をあげて降参のポーズをした。

しかし、セイは銃口を逸らさない。

このままでは埒があかないのとりあえず目の前の女性を解析してみると、防御は残しているようだが、彼女にユニゾンの形跡はない。完全に生体から切り離されているようだ。

「セイ、これは本物の迷子です」

「気に入らねえな。自我の強すぎる迷子^{トリル}ってのは……じゃあ、元の体の記憶も完璧なわけだ」

「当たり前でしょう。それより、コウ、女性に向かって『これ』って言い草はないわよね？」

銃口が自分に向いているといつのこと、それを感じさせない強い物言い。

本当に、不思議な迷子^{トリル}だ。

普通の迷子ならば、生体から切り離されたショックでいくらか情報体にもダメージが加わり、よくても記憶喪失、悪ければ人格崩壊が始まっている場合もあるというのに。

この迷子は自らの記憶どころか、コウたち「ソルティーノ」の事まで知っている。その上、ハッキングする能力すら有している。このまま放置するのは危険。

「セイ、『彼女』を連れて一刻も早く戻りましょう」

「はあ？ ここでこいつを圧縮すれ（つぶせ）ば同じ話じゃね？」

「そういう過激な発言はやめてください。そのせいでボク達が野蛮だという噂が広まっているんですよ」

「……ちつ

舌打ちしたのはわざとだらう。

それでも銃口を彼女から外す事はしなかつた。

コウは本部と回線をつなぎ、迷子回収の報告を行い、回収要請を出した。強制的に「ソルティーノ」のサーバーに送還されるのは時間の問題だらう。

「大人しくしてろよ、これ以上少しでも俺達にハッキングかけてみろ、その頭、ぶつ飛ばすからな」

すると彼女は、セイの言葉に怯むどころか強気な笑みを見せた。

向けられた銃口を指差し、当たり前のように言い放つ。

「それは圧縮^{コータ}プログラム？ それとも、自己破壊^{フィーネ}プログラムの方なのかしら？」

「？！」

その言葉にはさすがに感情表現に乏しいと普段から言われているコウも一瞬目を細める。

セイの銃弾は、シンにしか作れない非常に特殊なものだ。ある種のウイルスをベースにして作成したもので、情報体を圧縮させて持ち運ぶためのプログラムを内包した圧縮^{コータ}プログラムと、情報体を「ゼロ」と「イチ」に分解してしまった自己破壊^{フィーネ}プログラム、そして普通の銃弾と同じ、接触した部位を破壊するだけの情報破壊^{セーニョ}プログラ

ム。セイは全部で3種類の弾を使い分けているのだ。

無論それは、組織内でも知らない人間の多い、謎に包まれた武器のはず。

それすら知つてゐるとなると、この女性はただ者ではない。

「キミは何者ですか？」

目の前の迷子アーチルを危険因子として認定。

攻撃可能なモードに切り替え、解析オン、迎撃準備完了。

殺傷能力のあるワイヤーが棘腕輪スパイク・ブングルから飛び出した。

彼のワイヤーもセイの持つ拳銃ファイアーベンチの銃弾と同じ、3種類収納されている。傷つけられれば即座に自己破壊プログラムが作動し消滅に至るもの、縛り上げる事で相手を圧縮状態にする圧縮コータ、そして単純に相手の情報を切断という形で傷つけるだけの情報破壊ヤーニヨ。

「あら、女性に名前を尋ねる時は自分から名乗るものよ？」
妙に落ち着いているませた口調がさらにセイの神経を逆なでしたらしい。

つい先ほど現実世界の街で喧嘩を売つてきた男にキレたばかりだ
といつのに、セイの整つた顔立ちにうつすらと笑みが張り付いた。

「お前にそんな選択肢、あると思うわけ？」

一瞬で間合いを詰め、銃口を直接陶器のよつた肌色をした額にゴ
リ、と押し当てる。

彼女はそれでも怯まなかつた。

「そんなに聞きたかつたら名乗つてやろうか？ 僕は『ソルディー
ノ』の構成員、セイ＝オルディナンテ。通り名は、知つてるな？」
銃口よりさらに闇の瞳を近づけて、セイは囁くように脅した。

「勿論よ」

眼鏡の奥の緑翠は、まるで退く事を知らないかのようだ。

「『漆黒の永久灰燼』……狙われたら、終わり（ジ・エンド）。時
代錯誤な旧式の回転式拳銃の使い手で肩書き所有者」

「正解」

言葉と同時に撃鉄ハンマーに指をかけたセイ。

少しでも抵抗すれば即刻撃つ気なのだろう。それも、圧縮プログラムではなく、発動の速い自己破壊プログラムの方を。

「じゃあ、コウの事も知ってるか？」

ところが、相手が口を開く前にヘッドセシットから危険を知らせる信号が鳴り響く。

「あ、セキュリティに引っかかったんじゃね？」

呑気なセイの声と裏腹に、コウの脳内を瞬時に何通りかの対処策が駆け巡る。

そして、判断は一瞬だった。

「逃げましよう、セイ！」

「逃げるつて……どこへだよ？！」

「！」はサーバーの端部と思われます。ワーム型の排除機構が襲つてくるでしょうから、それに捕まらないようとにかく移動してください！ おやらくソルティーノからの強制送還まであとほんの少しだす

「めんどくせえ」

そう言つたセイは、それでも銃を突き付けていた女性から銃口を外した。

少なからず彼女の肩から力が抜けたところを見ると、やはり先ほどの強い口調も虚勢だつたに違いない。

「その迷子は頼みます」

「コウは武器を周囲に取り巻いて、ぐるりとセイに背を向ける。

「あつ、コウ、お前、自分だけ戦うつもりだなんだろ？！ 抜け駆けはやるさねーぜ」

セイの言葉で肩越しに振り向いたコウは、珍しくいくらか微笑んでいるようにも見えた。

「ボクもたまには運動しないと鈍つてしまつんですよ

02 : へやく向か始めたかもしれない邂逅（後書き）

通つ名は「一いつ名メーカー（http://ph22.net/name2/）」よりお借りしました。

田の前にはすでに拳ほどの大きさの黒球体が無数に蠢いている。視界を埋めた駆除蟲を一瞥してから、セイはしぶしぶといった風体でコウから距離を置いた。

そして彼女に銃口の代わりに指を突き付けると、鼻を鳴らしながら宣言する。

「今だけ迷子と認めてやる」^{トヨル}

「だからあたしは迷子^{トヨル}だと言つてるでしょう?」^{トヨル}

「口答えすんじゃねえよ、くそババア」

その様子に、早く行けと言わんばかりの極寒の視線で射抜くコウ。敵から目を離したコウに駆除蟲が襲いかかる。

「危ないっ!」

女性の叫びが響く。

ところが、それを見ていたセイは、無論当事者であるコウも、全く慌てていなかつた。

そして次の瞬間、一斉にコウの周囲から駆除蟲が消失した。

「……！」

驚いた顔をした彼女に、セイはバカにしたような口調で問つ。

「お前、コウが誰か知らないわけじゃねえだろ?」

襲いかかってくる漆黒の球体が、コウに触れる直前で次々と消失していく。

「さつきの答え、何?」

知ってるんだろ、と言わんばかりの言葉に、彼女はセイと田を合わせず、コウに視線を集めたままぽつりと呟いた。

「コウ」タカハラ、通り名は『紅緋の消失領域』^{ボータブル・イヴァイル}……近寄れば消滅するという謎の領域を自身の周囲に持つが、能力の詳細は不明、初期教育課程をわずか6年で卒業し、弱冠16歳にして理学分野と工

学分野、2つの肩書きを持つ天才児

能力不明。それは、現実世界であれ情報空間であれ、コウの武器のワイヤーが敵に認識されにくく事に起因する。

特に情報空間内では、気がついた時すでにプログラムが発動しているのだ。何をされたのか気づく事はない。

「……能力不明、ね。ある意味、せーかい。じゃ、最後の質問だけど……」

セイの瞳が物騒な光を灯す。

「お前は、何者だ」

それは、問い合わせなかつた。

答えなければ死に直結する、絶対的な支配。

彼女はそれでも瞳の光を失わず、真つ直ぐにセイを睨みつけた。

「あたしはミリアナ・アルト＝ヴェルジネ。『アルトパルランテ』の専属研究員よ。今は、『元』になるけど

「……っ？！」

アルトパルランテ　それは、ユニゾン・システムの開発組織であり、今現在も全世界に対しても大きな影響力を持つほとんど唯一の企業と言つてもいい。

組織、企業、施設……どの言葉もアルトパルランテという集団を一言で表すには不十分だ。しいて言うなれば、可能な限りあげられる単語をすべて統合したモノ、とするのが一番近い。

その専属研究員となると、下手に手を出せば、いかにソルディーノと言えど圧力がかかる、最悪の場合は機能停止させられる可能性が高い。

もちろん、簡単に信用できる言葉ではないが、アルトパルランテの研究員を騙つた場合のリスクを考えると嘘をつくメリットはないし、いざれにせよ本当だった場合の事を考えるとぞんざいには扱えない。

少し離れたところで次々と駆除蟲に自己破壊を強要するコウは、ほとんど動いていない。指先の微妙な操作で武器を操るために、傍から見れば何もせずに周囲の敵を消し去っているとも思えるのだ。

セイヨウコロティ・ワーネィーネ

それは「消失領域」^{ポータブル・イヴァイル} 不可侵領域に入ってきたモノを何の慈悲もなく消し去つてしまつ、悪魔の空間。

音もなく、表情もなく、まるで、昔から語り継がれてきたファンタジー世界の魔王のようだ、コウは闇の中で浮かび上がつていた。

「……マジ、腹立つな。何が、『体が鈍る』だよ。あれのどこが運動かつづーの」

肩を竦めたセイは、すぐ隣にいた女性をひょい、と片手で肩に担ぎあげた。

「じつちのがよつぽどい運動じやねーか」

白衣がいくらか捲れて、ショートパンツから伸びる形のいい脚が大腿付近まで露わになる。

彼女は慌ててそれを隠した。

「ちょっと、何するのよー！」

「逃げるに決まってるだろ、コウに叱られる前になー、あいつ、怒ると怖えーんだ」

そう言つと、セイはそのまま闇雲に駆け出した。

もちろん、ソルティーノからの強制帰還が働くまでの時間稼ぎである。

「何するのよ、放しなさい！」

「セキュリティ・ワーム駆除蟲に喰われたかつたらそつしな。俺は知らねえぜ？」アレに喰われるとエグいんだよなあ。トコル迷子は生体がないからどうなるのか分かんねえけど、ファーデバックがあるときついぜ？ 嘰われた部分から修復されて、さらにもたそれを喰われるつづー最悪の循環。

地獄だ、地獄

けらけらと笑つセイに、信じられない、といった視線が向けられる。

「それで笑えるなんて、趣味悪いわね

「そーかあ？」

呑気な返事をしたセイの眼前に、数体の駆除蟲が迫る。

が、セイは慌てず騒がず、左手で腰の拳銃を抜いた。

「消える」

セキユリティ・ワーム

次の瞬間、駆除蟲は音もなく端から順に一気に破裂した。

瞬間的なゼロとイチへの分解。

自己破壊プログラムが作動したのだ。

「やっぱ音がないと撃つた気しねえなあ」

反対側の腕では人一人抱えて、しかもかなりの速度で駆けながらの狙撃。

残念ながら、その腕を認めざるを得ないだろう。

「……左利きなのね」

「ん？ ああ、銃だけだ」

「そう」

彼女の言葉にはそこはかとない悲しみが包有されている。セイはそれに気付いて一瞬眉を寄せたが、すぐ目の前の黒球に視線を戻した。

セキユリティが働くのは何も珍しい事ではない。「虚構^{タチエツト}」と呼ばれるこの空間は、10年前まで稼働していた情報空間なのだ。今もその名残が残る場所も多い。停止せぬまま破棄されたソフトやセキュリティは今もこの空間で生きているのだから。

しかしながら、先ほどのコウの言葉からすると、また、広さやソフトの稼働率から見ても虚構^{タチエツト}内では珍しい、未だ使用中のサーバーと見て間違いないだろう。

この街においてそんなサーバーの数は限られている。

「おい、くそババア」

「さつき名乗ったわ。あたしはミリアナよ」

「聞いたかねえが、まさか、ここの『アルトパルランテ』のサーバー内か？」

足も手も止めず、セイが尋ねると、「ミリアナ」と名乗った女性は当たり前のように返した。

「そうよ。何を今更」

「最悪だ。」

思わず顔を引きつらせるセイ。

今でも世界規模の影響力を持つ大組織アルトパルランテ、通称アルト
ルト タチエット 確かに、その主要施設はこの街の中央に存在する。
虚構 タチエット が立ち並び、事後処理のために廃棄された街の中で、なぜか
この組織だけは未だこの街を捨てないでいた。

「シン兄のばつかやろ……！ 何でそんな所に放り込むんだつー

の」
セキュリティが厳しいのはその為だったのだ。今は警告の域にす
ぎないが、ぐずぐずしていれば本気で排除されかねない。

セキュリティソフトのシエア、ナンバーワンを何十年間も守り続
けているアルトパルランテの万全のセキュリティによつて。

「コウ！ お前も逃げる！」

ヘッドセットのマイクに向かつて叫ぶが、返答はない。

舌打ちしたセイは、すぐに今自分達が来た方向へと引き返した。

「ちょっと、どうするのよ？！」

「加勢する！ あいつ絶対手伝ってくれなんて言わねえーもん」

「じゃあせめて、あたしを下ろしなさいよ！」

「アホか！ ンな事したらコウがキレるだろーが」

その迷子は頼みます、とコウが宣言した以上、このミリアナとい
う謎の女性を放置した時に責任を問われるのはセイだ。
それだけは避けねばならない。

ようやくコウの後姿を確認し、駆け寄つた。

「コウ、聞いてくれよ！ こいつ、ここがアルトのサーバー内だつ
て言いやがつて……」

「そんな事、初めから承知しています」

「……コウってさ、たまに俺に対する返答、冷てーよな

「ボクの無愛想は何もキミにだけに限定した事ではありませんよ。
それより、そろそろお出ましのようですよ？」

コウが示した先には、先ほどまでの駆除蟲 セキュリティ・ワーム とは比べ物にならない、
黒々とした漆黒の壁が立ちはだかっていた。何の凹凸もなく、ただ

四角く巨大なだけの物体がこちらに寄せてくるとこりの時は、それだけで威圧感がある。

スコープを通しても何も見えないのは、あの壁がすべてを呑みこみ、消去する性質を持つていてるから。

危機を告げるアラームを無視、抱きあげていた女性を下ろす。

「こりやあ大物だ」

「分断します。止めてください」

「コウツてさ、たまに俺に向かつて無茶言うよな」

「それもキミに限定した事ではありませんよ。それに、キミなら出来るでしょう?」

「あらら、もしかして信頼と受け取つていいわけ?」

セイの軽口は沈黙に流され、早くやれといつ「コウ」の無言の圧力に負け、セイは地を蹴つた。

このほぼ正方形の物体を停めるのは至難の業だ。

自己破壊プログラムを打ち込んでも、敵の消失能力と相殺し、何発撃ち込んでも意味がない。

と、言う事は必然的に使うモノは決定する。

「要するに、足を止めればいいんだよな」

漆黒の正方形下部に狙いを定める。

情報空間では、疑似重力が働く。そして、感覚的な「床」というものも存在する。

セキユリティはその床から情報を受け取り、獲物を　この場合はセイたちを　狙う。

「死ねつ！」

物騒かつ安易な言葉と共に数発の銃弾が飛び出していった。

その銃弾は、正方形の足元を貫通し、いくつもの風穴を開ける。

このセキユリティの情報破壊が可能だという事を確認したセイは、次々に情報破壊プログラムを打ち出していった。

「ここが情報空間で助かつたぜ」

本来ならとつぶに弾切れ。

しかし、この場所ならリロードせずとも打ち続けられる。正確な狙撃で破壊していくセキュリティ。

「これで、終いだ」

最後の銃弾が打ち抜いた時、セキュリティの壁は完全に床から離れていた。否、床に接触していた部分をセイが完全に破壊してしまったのだ。

床からの情報を遮断され、動きを停止したセキュリティ。そこへ、銀色の線が走る。

音のない空間。振動のない世界。

それでも、目の前のセキュリティは真っ二つに切れた。

「おー、さすがコウ！」

ぱちぱち、と形だけの拍手をしたセイは、すぐに銃を構えなおし、セイ二郎情報破壊プログラムを打ち出した。

喧嘩にならないよう、一人半分ずつ 要するに、そういう事。

銃弾で次々に風穴を開けられ、無残な姿をさらすセキュリティと、細切れにされて宙に舞うセキュリティ。

「……迷子係とは思えない戦闘力ね」

背後で女性がぼつりと呟いた言葉が一人の耳に入る事はなかつた。セキュリティが完全に分解される直前、全員がソルティーノへと強制帰還させられたからだ。

何者かに全身を引っ張られるような感覚が襲う。

そして、急停止し、小さな穴に無理やり詰め込まれる感覚。

セイは今でも、情報空間から現実世界に戻つたこの瞬間の浮遊感に慣れる事が出来ない。それは、合わないパズルピースを無理やり押し込むようなフィードバックが嫌悪感をもたらす為かもしれない。

「御苦労。今日はもういいから、帰つて休め」

そつけないシンの声が何処から響く。

ユニゾン・システムから出た二人は、どちらからともなく顔を見合せた。

「不完全燃焼」

「ですね」

「あんな戦闘の最中に無理やり引っ張りだされたのでは、闘気が收まりきらない。」

「しかもあいつ何者だよ。ミリアナ？ とか言ったか、アルトの研究員を名乗りやがったぜ？」

「アルトパルランテの研究員？ それが何故アルトのサーバー内で迷子になっているんですか？」

「俺が知るか」

「どうにも今日は腑に落ちないことだらけだ。」

「危険だと分かっていて「アルト」のサーバーに転送したシン。迷子を名乗る正体不明の女性。」

「あー、苛々する。コウ、久しぶりに遊びに出ようぜー。」

「……キミにしては名案です」

「今日は帰れ、とシンに言われた身、^{メイン}主要施設に行つたところで追い返されてしまうだろ。」

「それなら、とつと帰つてストレス発散するのが手だ。二人は並んでソルティーノを後にした。

剥き出しの機器が周囲を覆う箱部屋で、「ソルティーノ」の責任者シン＝オルティナンテは一人モニターに向かっていた。

画面には一人の女性が映し出されている。

シンは相変わらず緩く開いた口元に煙草をくわえ、目を細めた。

「……ずいぶん可愛いらしい姿になつたもんだなあ、ミリアナ」

「貴方はずいぶん年をとつたわよ、シン」

ミリアナの言葉にシンは眉をひそめる。

「お前、バックアップだろ？ 生体の複製は禁じられているはずだが？」

「何を今更……世界政府の決めた規則に何の意味があつて？」

「そうだな。お前達『アルト』はいつもそうだ」

淡い敵意を込めた言葉に、ミリアナは微笑する。

シンも口元に笑みを浮かべ、加えていた煙草を床に落とした。

そして、薄汚れたスニーカーで火を潰しながら、モニターの前のデスクに肘をついた。

「で？ その何年も前のバックアップまで使って、とっくにアルトから足を洗つた俺に、いつたい何の用？」

「意地悪ね。何年たつても変わらないわ、貴方」

「それはどうも」

肩を竦めたシンに、モニターの女性はため息をつく。

「それでも、この時あたしには貴方しか思い浮かばなかつたのよ」

彼女は、翡翠の瞳で真つ直ぐにシンの青い瞳を見つめた。

「助けて、シン。きっともう貴方にしか止められない」

そこでシンはようやく口角を下げる、真面目な顔を作る。

「やつと分かつたの、あたしたちが創ろうとしていたモノがどれだけ危険なのか。貴方は、とっくに分かつていてアルトを見限つたていうのに」

「……遅いな、遅すぎる」

「そうよ、もう遅いかもしれない」

ミリアナの言葉に、シンは息を呑む。

「間もなく、オラトリオ聖譚曲が完成するわ

オラトリオ聖譚曲 それは、神に捧げる歌。

「プロトタイプから既に7年、少なくとも5日前には完成への秒読みが始まっていたわ」

「だが、あれにはまだエネルギーに関する問題が……」

「エネルギー値の事なら2年前に解決したわ。レーザーの応用でね、分かってしまえば案外簡単な理論で解けるのよ。もう偶然を待たなくていい（・・・・・・・・）」

シンはそれを聞いて、額に手を当て、空を仰いだ。

「土壇場であたしは阻止しようとしたの……それが、ここ半年くらいの事よ。どうせや、最終的には組織に消されてしまったよつだけれどね」

「ミリアナ、お前、何時のバックアップ?」

「5年前よ。貴方がアルトを出て、ソルディーノを設立した時に保存しておいたものだから」

「生体じゃない、記憶の方だ」

「最後に保存したのは2011年5月18日、極東エリアで午前2時25分58秒となつているわ」

それを聞いたシンは舌打ちした。

柔軟な目を細め、眉間にしわを寄せて額に手を当てた。

昔から変わらない考え方のポーズだ。

「10日前、だな……あのミリアナが保存を忘れるわけがない、保存する余裕がなかつたと見るべきだろう」

別のモニターのスイッチを入れ、キーボードを操作する。

「あれからもう10日も経つていいつていうの……？！」

悲鳴のようなミリアナの声を背中に聞きながら、シンはタン、と

最後のキーを叩いた。

「アルトの研究者リストからお前の名前が消えてる。解雇でもされたか？」

「……いいえ」

シンが軽くアルトのサーバーにハッキングをかけた事には突っ込み、ミリアナは唇を引き結んだ。

「あたしが、5年前のバックアップがここにいるって事は、おそらく、現在のあたしの生体は死亡したわ」

「……？」

さすがに目を大きく見開いたシン。

モニター内のミリアナも沈鬱な顔で黙りこんだ。

ダイオードが思い出したように煌めく。冷却のためのファンもむき出しで、溜まつた埃を散らすように回転する。薄暗いのは部屋の明かりがモニターから洩れるだけだからだろう。

そこに、微かな笑いが響く。

「……シン？」

「ははつ……神に創られた人間^{イキモノ}が神の所業を真似ようとは、実に滑稽だなあ」

神の所業に対する揶揄の裏に隠された人間そのものの否定、そして心の底からの侮蔑が含まれた台詞は、シンの純粹な怒りを何より如実に示していた。

そのまま喉の奥から乾いた笑いを洩らしながら、蒼い瞳でミリアナを貫く。

「細かい事は後回しだ。お前の持つ情報、全部出せ」

この場にセイやコウがいたら、一瞬で飛び退つただろう。

何もかもを屈服させる極寒のオーラを纏い、シンはゆっくりと立ち上がった。

「まだ、早い。人間がその力を使えば、情報危機とは比べ物にならない、未曾有の大災害になる」

かつて、爆薬^{ダイナマイト}を発明したアルフレッド・ノーベルは、図らずも大量殺人を間接的に誘発した。放射能除去が不可能だった時代、多大

なエネルギーを供給する原子力発電は一步間違えば周辺に汚染物質をまき散らす諸刃の剣だった。

聖譚曲も同じ歴史をたどる事になるのは目に見えている。

「俺に英雄は似合わねえよ」

そう言いつつもシンは新しい煙草に火をつけ、煙を吐いた。

「でも、貴方以外に誰がいて？」

「俺にだつて手札くらいあるぜ？」 10年前に情報危機サイバーショックで拾つた奴が

「ああ、あの子……ね」

「会つただらう、迷子係にしてあるからな」

「ええ、会つたわ。あの子を英雄に仕立て上げる気？ とても強くなつていたけれど、あれは貴方の差し金かしら？」

「あれは本人の意志だ。後は、隣に『あいつ』がいたせいかな。コンビにしておけば勝手に一人とも成長していくもんだ」

「『あいつ』って……『ゼロ』の事よね？」

ゼロ

かつてシンがアルトに属していた頃、ミリアナたちと共に偶然創り上げてしまつた生命体。

ゼロとイチからの創造。

「……プロトタイプである子を『創つて』からもう6年になるのね」ミリアナは感慨深げに我が子を胸中に浮かべる。

同時に、戦いの最中の楽しそうな顔を思い出し、ため息をつく。「でも、『迷子係』ですって？ どれだけ好戦的なのよ。あれじゃ、どう見ても『不協和音係』よ？」

「ああ、街でもよくそう言つて絡まれるらしいなあ。人殺し、つてな。あいつらはそれが気に喰わなくてちょくちょく問題を起こしやがる。全く、面倒なガキどもだ」

「そういう風に育てたのは貴方でしょ？」

「ま、そうとも言えるな」

情報危機サイバーショックで何もかもを失つた少年と、ヒトの手で創られた少年を

引き合わせたのは単なる興味だ。

どちらも一筋縄ではいかない性格のため、いつそのこと、ヒロン

ビを組ませてみたら思いのほかつましくいったというわけだ。

「うちには不協和音系も置いてる。まあ、戦闘能力的には迷子係より落ちるが、十分だ。不協和音の処理なんざ、残存セキュリティの破壊に比べれば簡単すぎるくらいだからな」

「だからって、末端部とはいえアルトの稼働セキュリティのど真ん中に放り込むのはどうかと思うわよ」

「平気だつたら？ 奴らなり」

「ええ、まあ、そうだけど……」

何度もヒヤリとさせられたことに変わりはない。

「それに救難信号出したのはお前だろ、ミリアナ。アルトに見つかってねえだらうな」

「当たり前でしょ。あたしを誰だと思っているの？」

自信満々のミリアナを見て、シンは唇の端をあげる。

タバコの先に長く伸びた灰が床にぽとりと落ちた。

「じゃあ、始めようか、翠玉の奈落多面体？」

「その名で呼ばないで頂戴」

「厳しいねえ」

肩を竦めたシンは、すぐに真顔に戻つてモニターと向き合つた。

「最終目標は『聖譚曲』の破壊だ」

ソルティーノを後にしたセイとコウは、その足で街を出た。

ここはもはや名前すらも破棄され、忘れられた街。

10年前に情報危機が起こるまでは世界有数の電腦都市として、

そしてユニゾン・システム開発元の「アルトパルランテ」本拠地と

して、繁栄を極めていた。

が、今は見る影もない。

情報危機^{サイバーショック}によつて破棄された情報空間^{情報危機}に取り残された迷子^{トリル}と不協和音^{ディッソ}を処理するだけのごみ箱と化した。ソルディーノなどの事後処理用の特殊機関と今も中央に構えるアルトパルランテ本部を除けば、人の住む場所はない。

しかも、世界中から日々運びこまれるサーバー^{タチエット}によつてこの街の虚構^{タチエット}は凄まじい速度で拡張を続けている。

無論、^{サイバーショック}このような街は世界に幾つか存在する。

情報危機^{サイバーショック}でほとんどの国家は崩壊した。残つていた情報化の少なからず遅れていた南半球の国々が中心となり、世界政府を設立、大陸をいくつかのエリアに分けて事態の收拾を開始したのだ。

そのうち、この場所は極東エリア。過去、日本という情報大国を有したユーラシアの東端地域である。

あれから10年たつた今も、生活は安定しない。

ただし、復興に当たり、政府が最も力を入れたのは「教育機構」だつた。

以前から多くの国家で使われていた完全能力段階式を採用、世界基準を設定して教育機関を真っ先に設立した。

おかげでコウたち情報危機^{サイバーショック}世代も途切れる事無く教育課程を修了し、幼い頃から職に就く事が出来たのだ。

最も、コウやセイのように様々な能力に長けたものばかりではないこの世の中で、無職の者を増やす結果となつてしまつた。世界経済の中心であつた情報産業は荒廃、代わりに一次産業が発達したものの途上、結果、未だ不安定な生活を強いられる事が多いのは事実だ。

破棄された街の隣には、やはり澱みが存在する。

廃墟には一種類あり、人のいない廃墟と、人の集まる廃墟とがある。

ソルディーノが存在するのは前者で、隣の街は後者だつた。心のどこかに闇を抱えた者達が集う場所、それがこの街。見かけはソルディーノがある街と変わらないが、そこに集う人間の数が全く違う。すれ違う人々をかわしながら、コウはセイに釘を刺す。

「セイ、今朝のように喧嘩していたら置いていきますよ」

「あれはあつちから突っかかってきたんだ」

セイとコウのコンビはかなり有名だ、特にこの付近においては。歩いているだけで周囲の人間の視線を集めているのが分かる。

敵意、恐怖、興味、嫌悪……向けられる感情は様々だが、好意的なモノは少ない。

その敵意を受け流すことにはとうに慣れた。絡まれた時の対処も万全だ。何しる、この街担当の警備課とは顔見知りになつてしまふほどなのだから。

しかし、隣を歩くセイは、どうもそうはいかないらしい。

敵意にいちいち反応し、売られたケンカは必ずと言つていいほど買う、苛立つて暴れる、キレて取り押さえられた事も一度や一度ではない。

「なあ、コウ、いつその事『不協和音』^{ディッシュ}係になるつてのはどうだ?」

「ボクは何でも構いませんよ。マップ係でもサーバー破壊でも」

「……お前さ、いつたい何がしたいわけ?」

「別に、何も」

未来を考える時、いつもコウの中は空虚だった。願望や意志など、特に必要とは思わない。時に、生きている事さえ億劫になる。

それは、彼が飛びぬけた能力を有し、少し学習すればどれほど難しい作業もやすやすとこなしてしまつことにも起因しているのだが。

いつたい何がしたいのか?

それは、コウにとつて何より難しい質問だった。

いつしか感情を忘れてしまったのか、もしかすると最初から感情

が幾らか欠如しているのかもしない コウはそう思つ。
過去には「機械のような心」という比喩が存在したらしいが、ぴつたりとそれに当てはまる。

暗黒の思考ループに取り込まれる直前、セイの呑気な声が思考を分断した。

「それとさあ、」コウ

「先ほどから見下ろしている連中ならおそらく先日の男と同一組織です。金銭関連は面倒だから無視していくださー」

「じゃあ

「後を付けてきてる女性も駄目ですよ？ あれはおそらくプロです。下手に手を出せばこっちがやられます。向こうから仕掛けてくるまで待ちましょう……まあ、個人的な様子見だとは思いますが」

「んだよ、つまんねー

ただ、こんな風に唇を尖らせたセイを見てため息をつくよつこなつただけ、成長したかもしないと思うコウだった。

「ウに愛想を尽かされないよう、なるべく敵意の視線をかわしながら人ごみを行くセイだったが、それにも限界がある。

甲高い女性の声が、黒髪の迷子係を呼びとめた。

「セイくん、そんなに急いでどこ行くのかな？」

「ああ、一番聞きたくなかった声だ そう思いつつも声の方向を見てしまう自分が悲しい。

声の主は、同じソルディーノに属する不協和音係。ディッシュ

「……ダリア」

思わず顔が引きつったセイ。

視線の先には、肩にかかるソバージュの金髪にペイントを施したかのように派手な化粧。瞳の色は灰白色だが、それはカラー・コンタクトだと聞いたことがある。体にぴったりとした真っ赤なボディースーツからすらりと長い脚が伸びていた。時代錯誤なその格好さえ、彼女にはぴったりと似合っている。

「うつわあ～、嫌そう～」

けらけらと笑う妙齢の女性の隣には、物静かな少女が佇んでいる。真っ赤なダリアと印象は正反対、黒を基調としたワンピースに身を包んだ少女は、ちらりと一瞬セイを見ただけでもう一度視線を戻した。

白のレースが彩る、ふわりと裾の広がった膝上のスカート、白黒の縞のオーバーニー、つるりとした黒皮で作られた先の丸い靴。まるで人形のような出で立ちだ。今は夜、それも雨など降っていないというのにこれまで黒を基調に白いレースで取り巻いた傘をさしていた。夜闇の色をした髪を青いリボンで一つに括り、白磁の肌に似合つ紫水晶の瞳が美しい。

印象の全く違うこの二人が並ぶと非常に滑稽だ。しかも、こんな破棄された街の中ではその色合いがさらに目立つ。

まるで下手くそな画像合成をしたかのような違和感が拭えなかつた。

一つため息をついて無視しようとした時、ダリアの甲高い声が耳をついた。

「あんたたちも追い出されたの～？」

「……？」

あんたたちも。

つまり、ダリアたちもソルティーノの本部を追い出された、という事か？

セイはふっと足を停めた。

「ボスがね、急に人払いなんかしちゃつて部屋に籠っちゃつたのよ。しかも！ こいつそり聞いてたら、どうやら女と通信してるみたいなのよ！」

妖艶な唇に人差し指を当て、戸口を開じたダリアはにこりと笑つた。

「何か知らなあい？」

「シン兄が女と通信？ それ、何かの間違いじゃねーの？」

セイの記憶にある限り、自分がシンに拾われてから彼の周りに仕事上以外の女性の気配はない。

「しかも何、ダリア、お前まだシン兄の事狙つてんの？」

「まだ、って言い方はないと思わない？ それに、私はどちらか」というと貴方の方が好みよ、セイ

最悪。

セイは思わず飛び退つた。

と、そこでようやくコウの後姿が人ごみに消えよつとしているのに気づいた。

「あっ！ ハウ！ 待てよ！ お前、最近俺に冷たいぞ？！」

ボクがキミに冷たいのは最近に始まつたことではありませんよ、という返答を期待したのに、今度は振り向きすらしない。

完全に置いていく気だ。しかもこうこうう点においてコウは絶対に

容赦しない。

「ちょっと、『ウー』」

セイは慌てて追いかけようとしたが、後ろ手に掘まれて立ち止まつた。

「待ちなさいよ、セイ～」
真つ赤なマニキュア。

不快。

セイの眉がキュッと寄る。キレる、寸前。
「ジニアがね、貴方に話したい事があるって言つたよ～。珍しいから聞いてあげたらあ？」

その言葉で頭が冷えた。

同じ不協和音係でもダリアはともかく、黒の人形ジニアは滅多に口を開く事がない。彼女が話したいとはよっぽどの事だ。

そんな事をしているうち、とっくに『ウー』の後姿は見失ってしまった。

「……仕方ねえな」

今夜はどうも運が悪いらしい。

シンに適当な指示でアルトのメインサーバーに転送させられるわ、変な迷子アーリルにハッキングされるわ、拳句にソルディーノを追い出された。

その上、口ウとまではぐれてしまつてしまつてはもう諦めるしかないだろ

う。

不協和音係のダリアとジニアに連れられ、街の一角にある小さなバーの扉を潜つたのだった。

何処にいても目立つ派手な印象のダリアもそのだが、黒のワ

ンピースに身を包んだジニアはこの街に似合わない。彼女は人の集まるこの廃墟、薄汚れた喧騒の街の中に溶け込む事は出来ないのだ。ところが、セイが連れ込まれたバーはこの街に合わず非常に落ち着いた雰囲気で、今となつては非常に珍しい、煤けた木材が組まれた内装がジニアの存在を包み込んでいた。

数えるほどしかないカウンター席の他には立ち呑みのテーブルが2つあるだけの狭い店内は、入った瞬間にどこか埃っぽい古びた匂いがした。照明はこれまたかなりの年代物と思われる油式のランプ。何百年も前の時代の遺物だ、本来ならこんな場所に現役でいるはずもなく、凄まじい値段の付く骨董品のはずだ。

いらっしゃい、という迎えの言葉もなくカウンターの中で俯いている店主は初老の男で、ぴんと伸ばした背筋にどことなく油断できない空気を絡ませていた。彼もまたこの酒場の時代に合わせたのか、黒のベストに片眼鏡、胸ポケットからは銀時計の鎖が零れていた。

「お邪魔します、マスター」

ダリアが声をかけ、カウンター席に陣取る。

その後ろに傘を閉じたジニアが続き、よじ登るよつにしてカウンターの椅子に腰かけた。

仕方なくセイもジニアの隣の席に着く。

「マスター、『ルバート』お願ひ。2人分よ

注文にも返答のないマスターに特に何を言う事もなく、ダリアは隣のジニアを促した。

「何を話したかったの、ジニア。あんたがセイに話なんて、明日は第二次情報危機でも起こるんじやないかしら？」

ダリアの言葉に、ジニアはびっくりと肩を震わせた。心なしか顔が青ざめた気がする。コウと同じくほとんど表情も感情も表わさないジニアには非常に珍しい事だ。

それを見たダリアは、しまつた、という顔になり、慌てて胸の前で両手を振った。

「じょーだんよ、じょーだん。ああもう、早く話しなさいよ~」

「……………聞いて、欲しい」

ジニアは聞き取れるかどうか、といつか細い声で辛うじて呟いた。そして、ワンピースのポケットから情報チップを取り出し、セイに手渡した。どうやら、音声情報のようだ。

セイは漆黒の瞳でそれをまじまじと見た後、再生装置にチップを挿入する。

情報の再生が始まり、ジニアの声に負けず劣らず小さな声がそこから漏れてきた。

助けて、シン。きっともう貴方にしか止められない

先ほど回収したあの女性の切羽詰った声で、始まりは告げられた。

途切れ途切れの録音を聞くうち、セイの表情が強張つていいく。ジニアはちらりとその姿を確認しながらも、何も言わず、再生を続けた。

1分、2分……静かな店内に、スピーカーから洩れる静かな会話が響く。

セイの額に玉の汗が浮かんだ。

最終目標は『聖譚曲』^{オラトリオ}の破壊だ

その言葉を最後に、録音は途切れた。

隣に座つたジニアはそれを確認してから再生を止める。

セイは 動けないでいた。

頭の中はかつてないほどに混乱している。「あの子」「創つた」「6年前」「コンビ」「迷子係」。様々な単語が頭の中で渦を巻いている。

そしてその言葉の羅列は、一つの可能性を示していた。

「……………これで全部……………」

ジニアの声ではっとした。

「さつきシンの部屋で録音したって言つたよな」

「……………やつ」

とりあえず、ポイントは一つだ。

一つ田は「聖譚曲」^{オラトリオ}、いつたい何かは分からぬが、もうすぐ完成する兵器が何からしい。迷子のミコアナはビックやうそれを破壊

しようと試みたが逆に組織に消されてしまつたようだ。

彼女自身、すでに組織に消されており、あの情報体は迷子ではなく生体のバックアップデータと言つわけだ。

そして、一つ田は「あの子」^{トドケ}、どうやら6年前に「創られた」らしい。あの話しぶりからするに、迷子係のコンビ、つまりセイとコウに当たるようだ。

「『創られた』か……」

いつたいどのようなプロセスを経たのかは分からぬが、話しぶりからするに、どうも生物的生殖ではない方法で創られた可能性が高い。真つ先に思いつくのはクローンだが、アルトパルランテの研究員と情報危機の事後処理機関ソルディーノのトップの会話という事を考えると、もつと別の可能性を考えた方がいい。

「……………さつと、貴方とコウの問題になると思つて」

柄になく動搖していた。

何しろ、セイの中には「6年以前のコウの記憶がない」。

創られた生命体。

その言葉に含まれた意味は？

アルビノ以外ではあり得ないはずの赤い瞳を持ち、冷酷に敵を分断する「紅緋の消失領域」^{ホタル・バイブル}は、人の手によって生み出されたイキモノだとでも言うのだろうか。

「……コウ」

ぱつり、と呴くと、その声はバーの古臭い空氣に紛れて蕩けいつた。

わだかま
セイの胸中に蟻^{アリ}を残したまま。

薄暗い街を歩いていたコウは、ふと敵意の視線を感じて立ち止まつた。

ダリアに捕まつたセイは既に放置してきたはずだ。そちらに大方向かうと踏んでいたのだが、失敗したようだと思つても振り向く事などないのだが。

無視してさらに歩を進めると、今度は殺氣混じりの視線が刺さる。「面倒ですね。セイに一掃してもらつた方が、面倒がなくてよかつたんでしょうか」

珍しく、くすりと笑つたコウは戦闘態勢に入り、喧騒から離れて人通りの少ない道に入った。

予想通り、幾つもの気配が追つてくる。

「ボクはセイのように優しくありませんよ？」

光のない夜闇の中で、コウの遣つ武器は見えない凶器と化す。先陣をきつて飛びかかってきた男は、四肢を極細のワイヤーで裂かれて、声もなく地面に倒れ伏した。どしゃ、と固体と液体の混合物が地面に叩きつけられた鈍い音が響く。

「どうやら、『気に喰わない』というレベルではなさそうですね」肌に刺さる殺氣は、気に喰わないから少々痛めつけてやろう、という感情でなく、明確に自分の命を狙つて向けられた刃の形状をしていた。

「コウは、ビルに取り囲まれた空き地の中央で立ち止まる。

この地面はパネルに覆われておらず、むき出しの土の感触が足元から伝わってきた。その感触を確かめるようにとんとん、と軽くその場でステップを踏み、コウは自身の周囲にワイヤーを張り巡らせる。

敵意は着実に近付いて来る。

数は10を超すだろう、街に屯^{たむ}う浮浪者、とこには鋭すぎる敵

意の束を抱え、足音もなく忍び寄つてくる。

確実に、明確な意思で以てコウを襲う何らかの組織だ。

「いつたい誰でしょうね……心当たりはありませんが」

あるとすればたつた一つだったが、面倒なのでできれば考えたくない相手だった。サーバーの片隅を荒して迷子を回収した程度の事で敵に回したい相手ではない。

ひとりと張り付くような夜の静寂^{じじま}が完全に静止した。

ここに自分がいるのに、いよいよ感覚。

全身の感覚が鋭敏になり、ヒトの気配すら皮膚で察する事ができる

そうだ。

「たまには運動も必要ですからね」

セイに言わせれば、どこが運動か分からぬ、という一方的な殺戮が始まろうとしていた。

「マスター、そろそろいいかしらあ？」

ダリアがそう言つて立ち上がつた。

カウンターに視線を落とし、思索に耽つていたセイは、はっと漆黒の瞳をあげる。

隣のジニアは、録音をさつと手にすると、閉じた傘を杖にして椅子から降りた。彼女はそのまま店の出口へと向かう。

「待つ……」

思わず呼び止めたセイだったが、特に何を言いたかったわけでもない事に気付き、ジニアの紫の瞳にうつろたえてしまった。

「…………何？」

答えられずにいると、ジニアはふいと踵を返して店を出ていった。正体の分からぬ蟠りがセイの中に残された。胸の辺りがもやもやとする。何かが晴れない。

が、ダリアはそれに関係なくセイの腕に自分の腕を絡めた。

「さ、行くわよ～、セイくん」

「行く？ どこに？」

そう問うと、ダリアは妖艶に微笑んだ。

「虚構よ」

タチエット

「はあ？ 虚構？ あんなとこ、仕事以外で好き好んで行かねーよ

「そう言わないでえ」

しかも虚構へ『行く』という事は、既に生産・使用が禁止されているはずのユニゾン・システムがないと不可能だ。

それ以前に、虚構への一般人の立ち入りは全面的に禁止されている。

最も、ダリアもセイも一般人ではないので問題はないが。

「大丈夫よ～、この店のサーバー群から出なければ」

「それこそ意味ねえよ。何のためにあんな処に……」

「遊ぶ、のよお？」

このままダリアを振り払つ事は簡単だつた。

だが、この時、セイは揺らいでいた。

断片的に届いた「創られた」生命体の情報。もし、セイが自身を信じるならばそれは自らの相方、コウにぴつたりと当てはまる。

シンはそれを知っていた。では、コウ自身は……？

無論、だからといって自分になんの影響があるわけではないのだが、どこか引っ掛かってしまう事は否めない。

気がつけば、店の奥、古い扉をくぐり抜けていた。

何百年も前の遺跡とも思える内装だった酒場と違い、一変して周

囲はのつべりとした有機素材の壁が連なっていた。灯りが少ないので判別できないが、どうやらベージュ系の明るい色で統一しているようだ。

腕をからませたダリアと一人、ぎりぎり通れるような幅の通路をずっと歩いて行くと、ふいに開けた場所に出た。

球状の天井、円形の壁。

そして、部屋には十数個のコーナー・システムが隙間なく敷き詰められている。

「何だこれ」

サイバーショック

「ふふ、これは情報危機の直前にこの辺りで流行っていた遊びよ。すつごく、キモチイイんだから」

躊躇したセイにはお構いなく、ダリアは一番手前のシステム内に彼を押しこんだ。

そして、隣のシステムに搭乗する。

「あー……やめときやよかつた」

今更後悔しても遅い。

充填液がみるみるうちにセイの全身を覆い、馴れた感覚に支配される。こうなればもう目を閉じて従うのみだ。

ただ違うのはソルティーノ所属オペレーターの声がしないだけ。
タチエック虚構と現実を繋ぐ一瞬、セイは馴れた浮遊感に襲われた。

普段のシステムとは少し違う、奇妙な浮遊感が全身を包み込んでいた。

麻酔でもかけられたかのように脳髄が麻痺している。目を開けるのが億劫なほどに温かく、心地よい空気が纏わりついていた。

なんだろう、この空間は。

いつもセイたちが任務を果たす時は、疑似重力が働いている。そ

れは、タチエット虚構内でも現実世界と同じ活動をするためだ。

ところが、どうやらこのサーバーには疑似重力が働いていないらしい。

それが原因なのか、心臓が不自然に血液を送り出している。手を動かすのも緩慢とした動作にしかならない。

「……」

声を漏らそうとしたが、出なかつた。いや、喉の震えを感じたら聴覚の方が麻痺しているのだろう。

ゆつくりと瞼を押し上げると、目に入つてきたのは　満天の星空だつた。

普段見てゐる空と変わりない。雲が全くないのは非常に不自然ではあつたが、称賛に値する煌めきが視界を埋めていた。

全身の力を抜いてただ浮遊し、星空を見上げる。

ダリアはただこの為に自分を連れてきたのだろうか？

首を傾げようとした時、ふつと腕に何かが触れた。

そして、星空を金のソバージュタチエットが横切る。

「ねえ、セイ。タチエット虚構内で防御を取り払つたら、どうなると思つ？」

先程は自分の声も届かなかつたのに、今はなぜ、ダリアの声が聞こえる？

そう思つた瞬間、全身に冷水を浴びせられたような感覚が貫いた。続いて電流が駆け抜け、思わずびくり、と体を痙攣させる。

気づけば自分の体からは衣服が取り去られており、その素肌に同じく衣類を身に付けていないダリアが掌を滑らせていた。

防御、とは自分と他人とを隔てる壁のようなものだ。現実世界では必要ないそれは、情報空間において必要不可欠なツールだつた。

それがなくなれば、虚構内にある自己情報体が崩壊してもおかしくない。

今の感覚は、まさにそれだつた。

確かに今の今まで自分を守つていた防御壁が取り払われてしまつた感覚。

「なつ……！」

今度は声が出た。

ただし、震わせた喉、動かした唇、その音を聞いた耳に至るまでのすべての部分を熱い何か（・・）が走り抜けた。

何だ、今の感覚は？！

吟味する間もなく、ダリアに触れられた部分が熱を帯びる。

「他人との境界がなくなるの」

熱い。

見れば、ダリアの手が自分の胸元に減り込んでいる。

それだけではない。

触れたところすべてで境界が曖昧になり、情報が混ざり合って行く。

「や、め……」

全身が灼熱に包まれている。

それなのに、どこか高揚する衝動を止められない。

嫌悪を押しのけるほど何かが背筋を貫き、全身を支配している。

「セックスでも埋められない隙間を埋めるの。なんて、素敵」

「……あつ！」

抗えない大きな力に流され、情報の奔流を受け入れる。

意識が混ざる。

これは自分の感覚か、それとも相手^{ダリア}が感じ取っているものか。

「あなたが……知りたいの」

悲しみ、喜び、恨み、絶望、喪失感、怒り、失望、憤怒、恐怖、快楽、焦燥感、緩慢、奮起、欠落感……これは自分の記憶か、それともダリアの懐古なのか。

音が遠ざかって、皮膚は熱さしか伝えず、それどころか内腑をかき回されていくような感覚すらある。

が、それさえも麻薬のようにセイの理性を取り払つていった。

「コウは最後の一人をワイヤーできつく締めあげた。

隠密行動用の闇色をしたボディースーツが裂け、そこから赤い液体が滲み出る。

「バケモノが……！」

縛り上げられた男は、抵抗する力を奪われ、全身に裂傷を追いながらも暗視スコープ越しに「コウの深紅の瞳を睨みつけた。

「質問しているのはボクの方です。貴方はただ答えればいい」

「コウが右手の人指し指を軽く動かしただけで、男の顔は苦痛に歪む。新たに腹部に裂傷が刻まれ、真紅の筋が現れた。

自分の命を狙ってきた相手だ。正当防衛で相手の命を奪つたとてコウには何の感慨も湧かない。

何しろ、この街において「殺し」はそう稀な事でもない。情報危機を経て戸籍が失われた今、路地裏にいくつか死体が転がつていたところで気に留めるのは匂いを気にする近隣住民くらいだ。殺しは禁止^{タブ}、しかしそれを裁く機関は、極東地域において絶対的に弱かつた。

狙われた場合、殺らなければ殺られる。それが嫌ならば、誰からも恨まれないよう、殺されないよう身を小さくして生きていくしかない。

残念ながらそれが不可能なコウは、殺されないだけの力を手に入れた。

「どこの誰が、どついう理由でこの数の刺客を差し向けたのですか？」

無表情に、淡々と問うコウ。

その頬には返り血と思しき血痕が付着していた。おぞましく闇に

浮かび上がる真紅の瞳には情の欠片も見当たらない。

周囲に累々と積み重なった動かぬ刺客たちが十数体。

その中央、さながら魔王のように君臨するコウは息一つ乱していなかつた。

「どうやら便利屋に近い暗殺業のようですが……依頼主を教えてくださいませんか。そうすればそちらまで直接伺うかもしれませんから」

そう聞いたものの、大体目星はついている。

おそらく雇い主は廃棄された街の中央に佇む大組織の中の誰かだろ。理由は、サーバーの端を荒した以外に全く見当もつかなかつたが、自身を傷つけぬためにプロに要請するとような姑息な手を取る相手となると、それ以外には全く思いつかない。

何しろ、自分達を殺したところで何のメリットもないからだ。

ついでに言うと、殺されるほどの恨みを買つた覚えもないのだが。身に覚えのない文句でちよくちよく絡まるのは事実だが、それは情報危機サイバーショックで様々失つた人々が怒りの矛先をソルディーノのような事後処理機関に向けているだけの話だ。殺されるような敵意を受けた事はない。

「おそらく依頼はアルトパルランテの方でしそうけれど、ボクが知りたいのは理由なんですよ。何か、知りませんか？」

もう一度尋ねると、男は片笑みを見せた。

「……流石だな、『消失領域』ポータブル・イヴイル。その推察力に敬意を表して、一つだけ教えよう」

怪しい笑みで、男は静かに言った。

「依頼内容はソルディーノの迷子係を消す事だ。コウ＝タカハラなぜなら、それは『創りモノ』だから」

「……創りモノ？」

「コウが眉を寄せたが、次の瞬間に男は口から真っ赤な血を吐いた。目の前にいたコウのジャケットにもいくらか飛び散つてコウの瞳と同じ色をした真紅の花を咲かせる。

完全に活動を停止した目の前の刺客からワイヤーを解いて回収し、コウは息をついた。

「……自害、とは」

たったこれだけの事で自ら命を絶つ事はない。よほど大きな情報を隠しており、捕まつた場合の自害までが依頼だったのか、それともこの男の趣味なのか、プロ意識の美学とかいうやつなのか……まったく理解できない。

ただ、ひどく嫌な予感がした。

「『創りモノ』……」

男が最後に残した言葉を繰り返し、コウは屍に埋もれた空き地の真ん中で空を見上げた。

明るい街の空に星は観察しづらい。ソルディーノが存在するあの廃れた街ならばここよりずっと多くの星が見えるというのに。

「アルトパルランテ……ですか

「アルトパルランテ……ですか」といふ言葉は、ソルディーノの名前を意味する。ソルディーノは、世界政府の事後処理機関であるアルトパルランテの専属研究員である。

情報危機の後も全世界に対して、つまりは世界政府に対して多大な影響力を持つ組織。

なぜそんな組織が事後処理機関の一つでしかないソルディーノの迷子係に刺客を差し向ける？

今日の迷子回収で確かにサーバーのセキュリティを幾らか破壊したが、すぐに修復できるはずだ。何より、シンから謝罪をだせばそれ以上追及できなのはずだつた。

世界政府直属の事後処理機関ソルディーノはそれなりの権力を持つてているのだから。

あの時、何かアルトを敵に回すような重大な発見をしただろ？

「もしかして、あの迷子ですか……？」

ミリアナ＝アルト＝ヴェルジネ、と名乗った不可思議な迷子。そう言えば、アルトパルランテの専属研究員を名乗つていた。

それが本当だとすると、もしや彼女がアルトパルランテに関する重大な秘密を握っていたのかもしない。

「見ず知らずの迷子のせいで命を脅かされるのは腑に落ちませんね」

「ウはぐりと踵を返した。
ソルティーノの本部へと戻るために。

創りもの、創りモノ、創リモノ、ツクリモノ……ずっとその言葉が頭の中を渦巻いている。

その意味するところも分からぬのに、普段は風いでいる心の表面がかき乱されるかのようだつた。

いつも感情などほとんど存在しないコウにとつて、このような事態は初めてだ。

だが、それは新鮮でもあつた。

そんな風に動搖の余韻を愉しみながら、ソルディーノとアルトパルランテが共存する街への帰路を往く。先ほどの道をただ引き返すだけなのだが、今度は来た時とは違う視線が降り注ぐ。

敵意ではなく怪訝さが主だつたそれは、返り血によるものだらうと推察できた。

頬に着いた血だけを軽く拭い、ワイヤーから伝線した血が固まつていた指を軽くこすり合わせて剥がす。服に付着した血痕は仕方ないが、ソルディーノへ帰れば着替えもある。

それよりも、早急に戻つて事実を確かめねばならない。

今はセイとコウをただの「迷子係」として戦闘力を侮り、あの程度の刺客しか送られてこないが、相手がアルトパルランテだとするとこの先何が待ち構えているか知れない。

退屈と相殺できるか……？

戦闘中の高揚感を思い出し、心拍数が上昇する。

「ボクは狂つているんでしょうか」

自嘲気味に咳き、血に染まつた手を見下ろす。

いつだつたるう、これほどまでに「力」を持つようになったのは。この武器をコウに与えたのはシンだ。技術に依るところが大きいが、少ない力で最大限の攻撃が出来る。持ち歩くにも苦労はなく、敵に目視されにくい。セイの持つ銃のように速さと正確さを求める

れる武器と違い、武器全体の把握と指先の技術がすべてだった。

殺しが好きなわけではない。

ただ、命をかけた戦闘を行う時、不確実なコウの中に確実なモノが芽生える気がした。

「『命を賭けた瞬間』が一番落ち着くなど、セイには絶対に言えませんね」

「ウは思考の最後に自嘲氣味に微笑い、周囲に目を向けた。もともと喧騒の街とはいえ、雰囲気がどこかいつもよりも騒々しい。

「何故でしょう、今日は騒がしい夜ですね」

先ほど築き上げてきた死体の山がすでに発見されてしまったのだろうか。それとも

「コウっ！ 見つけたっ！」

その時、声と共に突然頭上から黒髪の少年が降ってきた。

「……セイ」

軽い音を立てて建物の一階部分から着地したセイは、コウに向かって満面の笑みを見せた。

その笑顔に、先ほどまで考えていた事が見透かされる気がして柄にもなく動搖する。

ツクリモノ。

その言葉が蘇る。

「逃げてくれ！ 追われてんだ！」

「相変わらず唐突ですね」

この喧騒の原因がまさか相方だつたとは。

「知りません、と言いたいところですが、この街でボク達は有名になり過ぎましたから、キミが追われるという事はボクも追われるのでしょうか？」

「ま、そーいう事だ」

セイがぽん、と背を叩いたのを切っ掛けに一人は逃走を開始した。追いかけてくるのは、いつも世話をなつてゐるこの街の警備員達

だ。手に手にレーザー銃や警棒が見えるのは仕方がないとはいえるが、逃げている理由を出来るだけ簡潔に説明して下さい

「あー……えーと……」

困ったように眉間に皺を寄せたセイは、それでもゆっくりと原因を口にした。

「あの後ダリアに捕まっちゃ、よく分かんないしつこい酒場に連れ込まれて、あ、コウ、『ルバート』って分かるか？」

「ええ、聞いた事があります。情報危機^{サイバーショック}の直前にこの付近を中心に流行した遊びの一種です。情報空間内で疑似神経系を包む防御壁を解除し、ただの情報体となつて互いを『混ぜる』という、危険かつ下賤な遊戯ですよ。フィードバックを弱めてはいるものの、下手をすれば廃人になりかねないので、安易に快樂が得られるということで、当時の日本政府によって禁止されるまでかなりの人気を博したとか」

「……」

「『ルバート』に参加したのですか？」

「……ダリアに、無理矢理押し込められて」

「そうですか」

わざとため息をついて見せると、案の定セイはいきり立つた。

「違うんだ！ 知らなかつたんだ！ 禁止されてるとか、危険だとか！ ダリアがあんな事になるなんて……！」

そこまで言って、セイはぐっと口を噤んだ。

「ダリアが、どうなつたんです？」

「……本体が、壊れた」

「精神崩壊ですか？」

「ああ。あと、たぶん内臓系もけつこう……空間に残つた方は不協和音になつて……酒場のマスターが病院と警備に連絡したら、何故か俺が追われる事になつちまつて。俺は何もしてねえって……」

この台詞だけで、セイの困惑が伝わってくる。

「ルバート」は危険な遊びだ。幾人もの精神崩壊者と死者を出したそれは、政府の厳重な取り締まりの元、禁止された。

「ダリアの不協和音はどうしました？」

「……その場で処理した。どうしようもなかったからな」

「分かりました。とりあえずソルディーノに戻つてシンに報告します」

「しよう」

不協和音係が不協和音として迷子係に処理される。

まるで、陳腐かつひねりのない言葉遊びのようだ。

不協和音は情報空間におけるバグだ。生体を模した情報は想像を絶する量となる。そして、膨大な情報体というものは、存在するだけでどこかにバグを生じるものなのだ。

周囲に悪影響をもたらすバグを包有した巨大な生体情報 それが、不協和音と呼ばれるモノ。

迷子と不協和音は紙一重だ。情報のどこかに悪意のあるバグを生じているかどうか、という非常に曖昧な定義で区別される。また、意思はあるか、修復可能か、生体は存在しているかなども重要なファクターだ。

だが、それは果たして生き物か、否か。

意志を持つ情報体は消されるべきか、それとも保護されるべきか。元は人間であった「不協和音」の処分は、人殺し（・・・）か否か。

その議論は今も続いていると言つていい。

しかし、不協和音は周囲を侵食する。バグは感染し、感染したソフトを不協和音に変える。回線を使って移動し、サーバーを次々に破壊していく。

そのため、暫定的に基準を設定して迷子を保護、不協和音は処分しているのが現状だつた。

事後処理機関ソルディーノの役割は、日々街に運び込まれるサーバーから迷子をより分け、不協和音を抹消する事。

今も虚構内には多くの迷子が取り残されており、さらに多くの不協和音が存在する。

「実は先ほど、ボクもアルトパルランテの方々に襲われたところです。どうやら、それは今日保護した迷子トコルが関係していると思われます」

「うつわ、マジで？ あ、ほんとだ。服に血がついてる……殺した？」

「ええ、向こうにこちらの命を狙つっていましたから。いずれにせよ、アルトと警備、どちらももうボクらの手には負えません。とりあえず警備を撤いて、すぐにソルディーノへ戻りましょう」

「ああ、もう本当に今日はついてねえー！」

「残念ながら同感です」

セイの叫びとコウの咳きは、暗闇の街の喧噪に紛れて消えていった。

隣街からは数キロあるが、二人は追手を撇くための寄り道をしながらも30分ほどで駆け抜けた。

ソルディーノ本部に飛び込み、息を整える。

「くつそ……最悪！」

「……同感です」

それでもまっすぐにシンの部屋へと向かった。

セイがせいぜいと荒い息のままシンの部屋の扉を開け放つと、シンは相変わらず背を向けたまま、かたかたとキーボードの音を響かせていた。モニターでは凄まじい速度で数字と英字が駆け抜けている。

「よお、今度は早かつたな、くそガキども！」

「はあ？」

セイは眉を寄せる。

「待つてた、つて事だよ、迷子係！」

「どうこいつ意味ですか？あと、出迎える時は」ひかりを向いてくれた
セイ「

「相変わらずだな、コウ」

シンはそう言いながら振り向いた。

が、その瞬間、シンの持つ気配が一変した　ぞくつとするよつ
な怒りのオーラが全身を包み込んでいる。

いつものらしくらりと人を煙に巻くシンらしくない。
相変わらず緩い口元にはタバコが煙を揺らめかせてこいつの
に、全く雰囲気が違う。

すべての物を屈服させる絶対的な圧力だ。

「どうかのバカが先走ったせいで、大変な事になつてんだ。手伝え、
お前ら」

ああ、これはシンの本氣だ。

「コウは唐突に理解した。おそらく、何かのつづきならない出来事
が生じている。それは、シンが本氣を出さないと收拾できないほど
に事態が広がっている。

「コウは一度たりともこのやる氣のないボスを過小評価した事はない。

この人の持つ能力は計り知れない。

これまでコウが出会つた誰よりも強く、理知に溢れ、広大なカリ
スマ性を有している。普段はそれを気付かれないよう、どこかに隠
し持つているとしても。

いつものらしくらりとした態度からは想像もできないような空
氣に、セイが首を傾げる。

「あれ？　シン兄……だよな？」

しかし、普段と雰囲気ががらりと変わつたその姿に、おさらく
本来のシンの姿だ。

ソルディーノ創始者、シン＝オルディナンテ。弱冠26歳にして
5つの肩書きを持つ狂科学者。マジド・サイエンティスト

彼は煙草をくわえたまま煙を吐き、セイに向かつて呆れたように

言い放つた。

「何を寝ぼけたこと言つてやがる。しつかりしる、セイ」

「いや、まあ、その……いいや」

不思議そうに首を傾げながらも、セイは納得したようだ。
シンは加えていた煙草を床に落とし、スニーカーで火を踏み消しながら一枚のブルーレイディスクを投げて寄越した。

「シン兄、この時代にブルーレイって……」

100年以上前の遺物。端末を探す方が大変だ。

「あとでそれ、二人で見とけ。見終わったら、叩き割れ」

つまり、極秘情報という事だ。わざわざブルーレイディスクなどという古い情報媒体を使ったのにも、簡単に読み取らせないという意図を持つての事だらう。

「んじゃ、簡単に説明する。ちょっとこいつこいつ」

シンの手招きでモニターの傍に寄る。

と、角度を変えると覗き込めないようにしてある一番上のモニターに、見覚えのある女性のバストアップが映っていた。

「……あ」

セイはあからさまに嫌そうな顔をして女性を睨みつけた。

ミリアナ＝アルト＝^{トリル}ヴェルジネ。アルトパルランテのサーバーで拾つた、不思議な迷子。

おそらく、コウが先ほどアルトの手の者に襲われた原因。

さすがにコウも警戒を強めた。

「さつき拾つてきたこいつ、生体を失つた情報体である迷子^{トリル}つつたが、実は生存中に『ヒー』した『生体のバックアップ』だ。ミリアナ＝ヴェルジネといつ名の女性研究員が有事の為に作つておいた亡靈なんだが……」

「亡靈つて言い方はやめて。生体が消失した今、あたしはバックアッブじやなくて迷子^{トリル}の定義に区分されるわ」

「同じだ、バックアップも迷子も不協和音も」

「まったく……貴方ときたら、変わらないわ」

頬を膨らませたミリアナはセイとコウの方に視線を戻すと、腰に手をあてて宣言した。

「さつきので貴方たちの戦闘力は大体分かつたわ。文句無し、合格よ。だからあたしに手を貸しなさい」

この偉そうな物言いにセイがどこまで耐えられるか……。コウにとつてはそちらの方がよっぽど重要な課題だった。

これまで隠していた牙を研いだシンと、モーターの中の美女性を前にしながら、セイはひどく苛立つていた。

原因はミリアナの態度だけではない。先ほど録音で聞いてしまった二人の会話にも原因がある。

この二人は、コウのことを「創られた」と言つた。普段ならそんな言葉、気にも留めなかつただろう。しかし、そこに相方の「コウが絡むとなると別問題だ。何より、「創られた」という言葉がひどく心をき乱す。

「ミリアナはアルトの専属研究員だつた。理学と工学、それに医学の肩書きを持つていて専門は力学。2175年生まれ、蠍座、A型……つて、いうのはどうでもいいんだが

「シンの元同僚よ。アルトで、5年前まで共に研究をしていたの」「大昔の話だ。ソルディーノを作る時に抜けた」

「逆よ。アルトに愛想を尽かしてでていつた貴方を世界政府のお偉いさんがここぞとばかりにとつ捕まえてソルディーノのボスに据えたんでしょう?」

「それも話の筋には関係ないのでしょう? 早く要点を述べてください」

セイの隣に佇むコウは相変わらず無表情で、何を考えているのかは分からなかつたが、微かに触れる言葉の残滓には怒りが混じつている気がした。

セイはその様子を見て、コウが「創られたイキモノ」の話を知らないと確信した。もし知っていたなら、これほど冷静でいられるはずがない。怒りよりも戸惑いに支配される筈だ。

表情も感情も薄いコウだが、6年間という長い付き合いになるセイには何となく彼の内が読めていた。

「とにかく、あたしはアルトパルランテである装置の実験開発を

担当していたの。その装置つてのが実は相当厄介で、文明史上最悪の武器と呼ばれた核兵器以上に危険なシロモノなのよ

「それがもう少しで完成しちまつ。だから、完成する前にひとつとぶつ壊しちまおうと思つてな、お前らを呼んだんだ」

非常に簡潔な説明だったが、納得できるかと問われれば答えは否だ。

「ウは腕を組み、冷やかな目つきを上司と研究員に向ける。

「残念ですが、何の説明にもなつていません。まず、ミリアナさん……でしたか、貴方は何故自らが開発していたその装置を破壊する気になつたのですか？ どうやら歯向かつたせいでアルトに殺されたようですし、そこまでして破壊を願う装置とはいつたいたいどのようなものですか。それから何故、迷子と偽つてボク達が救助に向かわされたのですか。シン、貴方はボク達を差し向けた時点ですべて分かっていたのですか？ そして最後に、その機械はただ物理的に破壊しただけで止められるようなものなのですか？ もし設計図が残つていてすぐにまた同じものを製作できるなら全く意味のない破壊になりますが」

矢継ぎ早の質問に、シンは口角をあげる。

よく出来ましたと言わんばかりの表情に、滅多に感情を表に出す事のない「ウが眉根を寄せた。セイだけでなくどうやら「ウも機嫌が悪いらしい。部屋中を物騒な空気が満たしている。

「ミリアナ、簡単に『聖譚曲』の仕組みを説明してやれよ。こいつらなら理解するぜ？」

聖譚曲。

その言葉に、思わずセイは反応してしまつ。

「……仕方ないわね。特に赤目この子、納得しないと話を先に進めさせないんでしょ？」

ミリアナの指示で、シンは下部のモニターに何らかの設計図を映し出した。

先のひどく伸びた円錐形をしたそれは、スケールから判断して高

さだけで数十メートルはある代物だつた。

「これが『聖譚曲』^{オラトリオ}と名付けた装置の簡易設計図。この空洞部分に分解用の重力波発生装置付属、改良型ユニゾン・システムを組み込んで完成するわ。2104年にウイルチエックが確立した『量子重力理論』と2118年にドクターシノモリが作り上げた『シノモリの人体模型』を核にした原子分解・具現化システムよ

「原子具現化……？！」

隣で腕を組んでいたコウが息を呑んだのが分かつた。

「アレは30年以上前に不可能だと決定づけられたのでは」

「それは嘘よ。世間からその話題も研究も何もかもが消失したのは、研究が行き詰つたのではなく、アルトがすべて（・・・）の権限を傘下に入れただけの話」

どうやらセイの相方はこの話のあらすじを理解してしまつたらし

い。

「『消失領域』^{ボタブル・イヴェイ}の方は深刻性を理解したみたいね。貴方はどうかしら『永久灰燼』^{ジ・エンド}？」

問われて、セイは素直に首を横に振つた。

「どういう事だ？ コウ、教えてくれよ！」

しかしながらミリアナに教えられるのは癪だつたので、相方に助けを求める。

「コウはセイにしか分からないほどの微妙さで驚愕の表情を表しながら、ぽつり、と呟いた。

「現在でこそ物体の運動を数学的に解析する物理力学分野は一つに纏められていますが、100年以上前、『相対性理論』と『量子力学』は全く別のモノとして扱われていました」

唐突に始まつたコウの講義は、原子具現化という言葉から遙か遠方にあるよう思われた。

「相対性理論の元となつた古典力学はアイザック＝ニュートンを始祖とし、すべての物体の運動とエネルギーを数学的に解くという物理学です。乱暴な話、『世界中のどんな物体も、初期値さえ決定し

てしまえばその後の動きすべてが予測できる』という理論の元に構築された理論です。1900年代初頭にアルバート＝アインシュタインが発表した相対性理論が極みになりますね。古典力学のニュートンの理論はアインシュタインの相対性理論における一部分でしかありません

「コウはまるで自分自身を落ちつけるかのよつに淡々と語つた。さすがにそのあたりの物理学の歴史は理学分野の肩書きを持つセイも熟知していたが、コウがこれほど長い台詞をしゃべることは稀なので、黙つて聞く事にした。

「それに対しても量子力学は不確定性原理　『非常に微小な物体の位置と運動を決定する事は出来ない』という理論に基づき、物体の挙動を確率論的に解釈したものです。つまり、初期値さえ分かればすべてを解釈できるとした相対性理論とは一線を画すものでした。これは第一次情報成長期、西暦2000年前後に非常に盛んだった分野です」

相対性理論は「物体の動きはすべて机上の式によつて把握できる」。

量子力学では「物体が微小である場合、相対性理論では説明できない」。

相反する部分をざつくりと言えばそう言つ事だらう。

「ただしその頃、相対性理論は量子力学の『期待値』であるという仮説もありましたが……話し始めるとキリがないので、飛ばす事にしましよう。実際は、まあ、一口に言つてしまえば量子力学という分野は『怠慢』だつたわけです　これは、有名な話ですね？」

「量子重力理論の生みの親、ウイルチエツクの言葉にあるわね。『

文明の進歩を妨げるのは戦争ではなく、怠慢である』

「確率というものの自体をナンセンスだと言つたのはアインシュタインだつたか？」

ミリアナとシンがそれぞれ口を挟み、乾いた笑いがいくらか漏れた。

「要約すると『確率』を支持した量子力学という分野は、ただ微小で膨大な計算をすべて省いていたという話です。もちろんその原因は、あまりに微小な物体の観測が不可能であり、その世界でのエネルギー拳動の観測が不可能であったという点に尽るわけですが。何しろ、電子線が使われていた時代の理論ですからね、仕方ありません」

今現在、最小最強の波という称号を持つのは重力波である。非常に細かい周期で振動し、また大きなエネルギーを保有するそれは、放射線よりずっと有効な元素改変の手段として、100年以上用いられてきた。

「すみません、また話がずれました。兎にも角にも、この経緯でアルバート＝アインシュタインの相対性理論がある意味で『勝利』したわけですね。そして小さな矛盾をいくらか補つて、ウイルヘルムの量子重力理論が完成しました。この世に存在するいかなる物質も、机上の計算によつて支配できる。それが『量子重力理論』の真髓です」

「いや、そこまでは分かるんだけどよ、それと『物質の具現化』とどういうつながりがあるつづーの？」

「せつからちですね。説明をやめますよ…」

「どんな脅しだ！」

セイは怒鳴りかけたが、『ウの事だ、本当に何も話してくれなくなる可能性も大きい。

「大人しく聞くから、説明を続けてくれよ」

憮然とした表情でそう言つと、『ウは再び口を開いた。

「昔の言葉に『鍊金術』というものがあります。16世紀中世ヨーロッパで盛んに行われた『元素の変換方法』を探ろうとする研究です。実際は、卑金属を貴金属に変えようと様々に混合しただけの陳腐なものだったと聞いていますが」

「……？」

量子重力理論と鍊金術に何の関係が？

思わず首を傾げたが、また機嫌を損ねても面倒なので、口を開ざす。

「この世の物質はすべて、『原子』で出来ています。銅と鉛をどんな比率で混合しようと、その一つが違う原子で構成されている以上、異なる原子で出来た金にはなりえない、という事です。そして、その原子というものは広義の『素粒子』と呼ばれるモノの集合体です。実はこの説は、科学的諸説の一つでしかありませんが、ボクがこの場で断言できるほどにほぼ確定した事項です。そしてその形態としては1904年のプラグ・ペディング・モデルや電子雲モデルなど、さまざまありますが、ここでは単純化を促す為にボーアの原子模型を採用しましょう。詳細に不安はありますが、これから説明において特に問題はありません」

まるで初期教育課程前期の講義を繰り返されているようだ、とセイは思った。

ボーアの原子模型とは、原子を正電荷と負電荷の集合体として模式化したものだ。「中性子」と「陽子」で構成される原子核と、その周囲を一定の間隔を置いて周回する負電荷の「電子」とで表われる。地球を周回する月のように原子核の周囲をぐるぐると飛びまわる電子の図を、一度は見たことがあるはずだ。

その中性子、陽子、電子の違いが「原子」の違いに反映される。簡潔に例を出すと、中性子8個、陽子8個で構成される原子核を8個の電子が周回していれば酸素原子となる。中性子6個と陽子6個の原子核を6個の電子が周回していれば炭素原子となる。

このように、この世の中の物質を作り上げている最小単位 そう呼ばれていたのは20世紀までの話だが たる「原子」は、その根源を共にし、その「数」「エネルギー値」「大きさ」などの制約条件で様々に分類されていると言つていい。

「マクロの視点で見た性質を異にするとはいって、多くの原子の違いは微々たるものです。乱暴な話、陽子と中性子と電子、この三つを規定してあげさえすれば原子の形を成します。最も、素粒子という

話になつた時はさうに制約条件が多いのですが、……これも、長くなるので省きましょう」「コウはそこでいつたん言葉を切つた。

「コウはすぐに口を開く。

これほど雄弁なコウは珍しい。

「量子重力理論が2104年にウイルチェックによつて確立され、重力波の利用が台頭してきて以来、人類は再び『鍊金術』を望み始めました。それが、今からおよそ50年ほど前 2150年代の話です。今度は混合物などという陳腐なものではなく、重力波で原子の構成粒子、つまりは大昔には『概念』の一つでしかなかつた陽子や中性子そのものを操つて変換しようという科学的な『鍊金術』です。無論それには、物体の挙動を完全に理解する事が必要不可欠でした。最も、それはウイルチェックによつてすべて解明されます。もう障害は残されていません」

「つまり、人間は思うまま、欲しい原子を作ろうとしたつて事だらう」

「ええ、そうです。しかしその研究はいつの間にか下火になり、30年ほど前、一気に世間からその姿をくらました。おかしいとは思つていたんです、理屈ならボクでさえ理解できる範疇なのに、何が失敗を導いたのかと不思議に思つてはいたのですが……その歴史解釈自体が間違つていたようですね」

「コウはちらりとモニターのミリアナを見る。

「『鍊金術』はすべてアルトバルランテが引き継いでいたようです。世界政府がそれを容認しているのか、圧力をかけても応じなかつたのかそれとも他に考えがあるのかは分かりませんが」「それこそ世界政府の『怠慢』だ、怠慢」

シンが間の手を入れる。

「原子の具現化自体が成功したのは今から既に20年以上前の話よ。何しろ、あの時のアルトには信じられないくらいの頭脳が集積していたもの。アルトの特別研究チームは本来なら100年はかかるで

あらうはずの研究をたつたの10年で終えたわ

ミリアナの言葉には返答せず、コウはセイに向き直つた。

「それでは、量子重力理論の話はここまでにして、今度は生物学分野の話に戻りましょうか」

「『シノモリの人体模型』なら知つてゐる。人体を元素配列によつて示した模型の事だ。肩書きなしでも知つてゐるぜ、そのくらい」

「そうです。では、もう一息ですね。ユニゾン・システムとは何ですか？」

「さつきから馬鹿にしてんのかよ、コウ。情報空間に再現した疑似神経系と生体を連動させる事によつて、意識そのものを情報化し、空間活動を可能にしたシステムの事だ。情報空間に、生体の情報ほぼすべてをインプットし、防御壁で隔離された巨大な情報体となることで情報空間内に架空の生命体を作つてゐると言い換えてもいい」セイが即答すると、コウは抑揚のない声で返した。

「十分です。つまり、ユニゾン・システムは現実世界と情報空間の双方に人間のコピーを作れる事ができる、という事です。では、最後に一つ問題を出しましょ？」

「問題？」

「はい」

心なしか、コウの表情が緊張しているように見えた。

「ユニゾン・システムは『生体を情報化』するシステムです。それでは、量子重力理論と重力波の応用によつて可能となつた原子の具現化、それにシノモリの人体模型から導き出される結論は何ですか？」

?

原子の具現化。原子で表された人体模型。

セイははつとした。

創られたイキモノ

心臓の音が耳元で鳴り響いている。

現実世界から虚構へ。虚構から 現実世界へ。

ユニゾン・システムが生体を情報化するシステムだというのなら。

「『情報の生体化』だ」
セイの喉の奥から呻くような声が漏れた。

「正解です、よくできました」

抑揚のない声で「コウが賞賛し、ミリアナは視線を伏せ、シンは新しい煙草に火をつけた。

シンの吐いた煙で一瞬視界が白くなる。

「『聖譚曲』^{オラトリオ}」は、ゼロとイチで出来たただの情報を本物の人間に変換するシステムの事だ。クローンやハイブリッドなんかメジやない、本物の人造人間だ。しかも、見た目も中身も完全に人間だ 要するに、ヒトはどうとう自分の手で人類を作り上げる事が出来るようになったわけだ。めでたいねえ」

シンは煙と共に神に対する冒涙を吐いた。

「神の御業を真似ると天罰が下るはずなんだが、どうやら神様とやらまで『怠慢』だ」

冷たい目。侮蔑しきつたその眼差しに、セイは思わず息をとめた。「とりあえず『聖譚曲』^{オラトリオ}」については分かつたな

セイは声を出す事も出来ず、ただこくりと頷いた。

ああ、そうか。人間は「創る」ことが出来るのか 麻痺したようになに脳が働かない。コウ、コウはいったいどんな顔でこれを聞いている?

真紅の瞳に映る感情はいつたい何だ?

振り向きたかったが、恐ろしくて振り向けなかつた。

静まり返つた空氣が部屋を満たしている。時折唸りを上げる冷却用のファンと古いハードの起動する音が唯一の振動だつた。

その沈黙を破つたのはシンだ。

「『聖譚曲』^{オラトリオ}」は無から原子レベルで人間を作る機械だ。それ自体すでにかなりの脅威だが、本当に恐ろしいのはそこじゃない。原子を具現化し、モノを それも生命体を自在に作れるようになったことに問題があるんだ」

その蒼い瞳は灼熱の炎を灯している。

「応用はいくらでも効く。合成獣^{キメラ}どころか、完全な人造生物、殺傷能力の高い細菌でも、要人の完全な複製体も、それどころか全くこの世に存在しないはずの人間まで生み出す事ができる。筋力、頭脳、性格まで思いのまま。太古のオリンピックなど目じやないトップアスリートが次々に誕生するだろうよ。もちろん、スポーツに留まらず真っ先に軍事に応用されるだろうな。そんな事になつたら、いつたい人間はどうなる?」

21世紀から、ずっとクローリンの在り方が取り沙汰されている。それは、「クローリンに戸籍は必要か?」という問題だった。が、クローリンとして作成した後の環境によって同じ遺伝子と言えど別の人間になる、つまり環境で全く違う性質が育つということが分かり、クローリンにも人権が認められた。本体の特殊双生児として。

ただし、今も規制は非常に厳しい。情報危機^{サイバーショック}以降はそれどころではないが、それ以前は国家の憲法にまで追記載されるほど厳しい規律が定められていた。特に、死者のクローリンは認められていないにもかかわらず罰則を受けてまで再生する遺族が後を絶たず、規制は困難を極めたといふ。

もし「聖譚曲^{オラトリオ}」が完成すれば、また同じ混乱が社会に生じるだろう。

情報危機^{サイバーショック}で人口が半分近くに減少したこの極東地域で、さらなる混乱は社会の崩壊を意味する。下手をすれば人類の存続自体が危ういかもしれない。

もしかしたら、を考え始めればキリがない。

「世界政府には既に打診したが、ヤツらそう簡単には動かんだろう。それよりも、多少荒っぽくても俺達が動いた方が早い」

「聖譚曲^{オラトリオ}は現在のモノを破壊して、アルトに残っているデータを抹消してしまえば、あたしが持つバックアップデータがない限り新しく製作するのにまた何年もかかるはずよ。今は、とりあえず時間が欲しいの。人類がそれ(・・)を受け入れるまでの時間が」

「とりあえず破壊しておいて、その間に対策を……ですか。シンらしい、物騒な作戦ですね」

「まあ、問題は聖譚曲をぶつ壊すと、アルトに殺されるって事だ。

壊しに行く前に殺られるかもしれないわけだ」

「だから、ボクとセイに声をかけたんですね」

「そう言つ事だ。手伝つてくれるか?」

「ええ、愉しそうですから」

「コウは寸分の隙もなく肯定した。

セイは、震えた。これはいつたい何だろう? 敵の大きさに恐れたのか? それとも武者震いなのか?

まるでダリアと「ルバート」に入つた時のように抑えきれない衝動が全身から溢れてきた。

「行くに決まつてるだろ」

その言葉で、シンはタバコをくわえた唇の端をあげた。ずいぶんと長く伸びていた灰がぼとり、と床に落ちた。

「ミリアナは既に生体を失つてゐる。確実ではないが、十中八九アルトに消されたと見ていいだろ。その直前、ミリアナはこのバツクリップ持てる限りの情報と共に迷子としてアルトの広大なサーバーの端に放り出した。俺の元へ救難信号を出し、聖譚曲破壊の最後の希望となるために」

「それをボク達が回収した、とそういうわけですね。シン、あれがアルトのサーバーだという事もミリアナが迷子でない事も、すべて分かつていてセイとボクをあの場所に放り出したというわけですか?」

「怒るなよ、コウ。俺だつて今朝の救難信号を見て慌てたんだからな」

「どこが慌ててゐるのか、と言いたくなるほどにシンの物言ひはふてぶてしい。

「コウも諦めたらしく、そこで会話は途切れた。

沈黙になると、どうも落ち着かない。ジニアの録音を聞く限り、シンもミリアナも既に聖譚曲のプロトタイプで人間を創りだしてい

るはずだ。しかも、その対象が目の前にいる。

それなのに、二人とも全くおぐびにも出さない。

自分が過剰反応し過ぎなのか？ それとも、ジニアの録音 자체が

「セイ、さつきから大人しいですね。どうかしました？」

はつとするとコウの深紅の瞳が目の前にあつた。

まるで吸い込まれそうなほどに美しいその瞳は、何もかもを見透かす鏡。

「コウ、お前は本当に創られたイキモノなのか ？」

「どうせキミの事ですから、ダリアの事でも気にしているんでしょう？ 忘れてしまつ前にさつさとシンに報告しなさい」

ダリア。

その名を聞くまですっかり忘れていた。

ああ、そうだ。むしろそれが先だ。

「シン兄、悪いんだけど、報告しなくちゃなんねえ事があつて」

とは言つたものの、「ルバート」で防御を無理やりに外されて前後の記憶はかなり曖昧だ。あれは自分の感覚だったのか、ダリアの感覚だったのか、誰の記憶なのか、夢なのか現実なのか。すべての境界が曖昧で、すべての事柄が不確定だった。

「何だ？ 時間がないから簡潔に言え」

「コウといいシンといい、なぜこうも簡潔性を追求したがるのか。「えー……街でダリアに会つて、変な酒場に連れ込まれたんだけどさ、そこが『ルバート』を非合法に営業してる店で、俺も無理やりそれに押し込まれて……てか、それまで『ルバート』何て知らなかつたんだけどよお」

ジニアの録音の話は省いた。

あの会話を聞いた事は、絶対にコウに知られたくない。

「で？」

「事故つた。俺は無事だけどダリアは壊れた」

「かなり簡潔だな。合格……と、言いたいところだが、ダリアの様

子は？」

ティッシュ

「情報体は不協和音化したからその場で処分した。生体にもフィードバックが大きかった、精神も肉体もほとんどもうダメだ。その酒場のマスターが医者と警備を呼んだんだけどさ、気がついたら俺が完全に悪者になつて」

「逃げてきた、というわけか。通りで表にいろいろ集まつてゐる筈だ」「……え？」

「一応撤いたんだろうが、お前ら有名人過ぎて身元がモロバレなわけだ。このクソ忙しい時に余計な仕事増やしやがつて」

「げげつ」

どうやら警備がここまで追つてきたりしい。

「何とかしてやる。お前ら、特にコウ、即刻着替えて来い。これから数日、休む暇なんかなくなるぜ？」

もう一度キー ボードの方にくるりと体を向けたシンは、それで終いとばかりに真剣にモニターに向かつた。

これからとてつもなく大変な事が待つて言つといつのこ、厄介な事を巻き込んでしまつた。

「コウは怒つていないうだろか？」

ちらりと盗み見た横顔には相変わらず表情がなく、セイはほんの少しほつとした。

シンの部屋を後にし、割り当てられている個人の部屋に移動する。その間もコウは特に何も言わなかつた。

よく考えてみれば、会話する時はいつもセイの方から話しかけているのだ。セイが黙り込んでいれば必然的に会話は成立しない。沈黙の中に歩を進めていくと、通路の向こうに見慣れた影が佇んでいた。

「ジニア」

先ほどの事もあり、思わず呼び止めてしまっていた。

彼女の雰囲気はどこかコウに似ている。物静かで感情をほとんど映さないところ、よく整った顔立ち、どこか人間離れしている存在感。さすがに建物内では黒い傘を閉じているが、リボンとレースに彩られた洋装は彼女の人形らしさを存分にひきたてていた。

それでもこれまでセイがコウ以外の人間に興味を持つなど、なかつた事だった。

「あ、の、さ……ダリアが」

「…………知つていてる」

相方のダリアが事実上、再起不能になつた事を伝えるはずだつたのに、ジニアはそれを先回りしてしまつた。

行き場を失くした言葉の残りが喉の奥に引っかかる。

「…………いいの、きっと本望。彼女だつていつかこうなると分かつてあの店に出入りしていた」

微かなジニアの声が鼓膜を揺らす。

そこにはやはり何の感情も見えない。悲しみも怒りも喜びも。ただ事実を事実として受け止めただけ。

「貴方が気に留める事は何もない…………違つ？」

問われて口を噤んだ。

確かにコウに言われるまでダリアの事などすっかり忘れていたのだから。目の前で同僚が不協和音化し、それを自らの手で処理したというのに。

セイの中には何の感情も残つていなかつた。

口を噤んで佇んだセイの元へ、抑揚のないコウの台詞が降つてくる。

「着替えを終えて30分後に倉庫まで来てください。ブルーレイを読み込める端末を探します」

それだけ言い残したコウは、通路の向こうへと去つていく。

相方の後姿を見送つてから、セイは再びジニアの紫水晶に視線を

戻した。

「…………まだ、何か？」

「いや、何もない」

再びジニアの黒髪を見送つて、セイは自室へと急いだ。
30分の制限時間を使つた場合、コウがどんな辛辣な言葉で迎え
てくれるか、簡単に想像がついたからだ。

シンはその頃、表の警備をどうにかすべく、思いつく限りの手を打つた後、椅子の背もたれにぐつたりと寄り掛かっていた。

「あーめんど。セイガダリアをぶつ殺した事になつてんじやねえか。しかも、普段なら殺人なんかで動かねえはずの警備が総力で追つてやがる。本つ当にあいつら、面倒ばかり起こしやがるな……くつそー、何も考えず突つ走つたあの研究バカだけで手いっぱいだつてのに、この上まだ爆弾抱えろつてか？！」

盛大に文句を吐き出し、煙草に火を付ける。

そうして一息つくと、思い出すのはガラス玉のような碧眼、そして金髪を揺らしながら喉の奥から声を絞る、人を小馬鹿にしたような笑い。

彼は元同僚、そして研究仲間だつた。

二人はいつしか袂を別ち、進む道は一度と交わらないところまで来てしまつていた。

「あんのバカ野郎……俺達が何度言つても聞きやしねえ」

シンは何度も止めた。それは神の所業であると。人間の手に余る研究だと。

しかし、彼は聞かなかつた。

見限つたシンはアルトを抜けた。が、もしかするとそれは間違いだつたのかもしれない。彼の隣にいて、何をかけても止めるべきだつたのかもしれない。

「今度こそ……」

一瞬だけ蒼瞳に炎を灯らせ、ふつと視線をあげたシンは、ミリアナが深刻な顔をしている事に気付いて肩を竦めた。

「どうした、奈落多面体？」^{パラノイド・クラスター} 愛しい我が子の事でも考えてたのか？

「本当にあの子、『ゼロ』なの？ 普通の人間に見えたわよ……学習機構に問題もない。オリジナルのマコトを引き継いでいるかと思

えばそうでもないみたいだし、運動機能、言語機構、その他もろもろ問題なし」

それを聞いたシンは、ふつと口元を歪めた。

「んー、そうでもないぜ？ あいつ、感情がいくつか欠落してるからな。本人は気づいてるんだか知らねえが、傍から見てりや決定的だ。隣にあがいるから目立たないが……『感情を学習』する機構が完全にイカれてやがる。それがただ感情を忘れただけの人間とじや絶望的な隔たりだな」

きい、とシンの腰かけた椅子がきしむ。

「唯一の例外が相方だ。気のせいが知らんが、相方にだけはかなり特異な感情を有しているように見えるんだよなあ」

「ゼロとイチだけで創りあげた生命体、か あたしも随分と傲慢だつたわ、あの頃は。貴方が5年前に『ゼロ』を連れて姿を消した時、本気で憎んだものよ」

「プロトタイプねえ……今はどこに？」

「設計図しか残つてないわよ。本体は現在の聖譚曲^{オラトリオ}を構成する核として使われているわ」

「……そうか」

若かりし頃の過ちが、シンの中で古傷を刺激する。

あの頃、聖譚曲開発トップメンバーは4人だつた。一人はアルトに残つて聖譚曲を完成させ、一人は脱退して事後処理機関を設立、残つていた2人のうち一人は生体を失い、もう一人は正氣を失つた。「あの子は気づいているのかしら？ 自分自身の出生に」「いんや、まだだろうな。そう思つたらすぐに俺に聞くだろつよ。何より、偽の記憶と肩書きを上乗せしてあるから、気づくはずもな

い

「……言うべき、かしら？」

「いや黙つとけ。あいつはあいつだ。もし、本人が知りたがるような時が来れば、答えてやればいいさ」

シンはそう言うと、ミリアナは微かに寂しそうな表情を見せた。

「いつもそうなのよね、貴方は。自分から聞かない限り、何も答えてはくれなかつたわ」

「そうか？」

「そうよ」

モニターの中のミリアナは、今にも泣きそつた顔で……笑つていた。

指定時間ぴつたりに倉庫へと到着したセイは、赤目の相方が腕を組み、壁に寄り掛かっているのを見た。

真っ青なタンクトップの上に、襟元と左胸に十字架の刻まれたパンクセパレートのジャケット、さらに幾重にもパツチを施したアンメトリー柄のパンツを身につけたコウは、さながら悪の使者だと、言つても自分もそう変わりない恰好をしているのだが。

「コウが動く度にぢやらり、と重い鎖の音がする。

セイは「コウの身につけたこの鎖の音が好きだつた。硬質で冷徹な鎖の音は、タチエッジ虚構と同化しそうな自分達を現実に繋ぎ止めていてくれる気がしたからだ。

ところが、相方の眉間に微かに皺が寄つてゐる気がして、恐る恐る尋ねた。

「もしかして、俺、遅刻した？」

「いいえ、時間ぴつたりです。キミにしては珍しいですね、セイ」

「ああ、よかつた。

ホッとして笑うと、氣のせいかコウの纏う空氣も柔らかくなつた気がした。それだけで嬉しくなる、と言つたら誰か笑うだらうか。

拾つてくれたシン以外では、唯一セイが心を許す相手だ。それは「コウにとつても同じはずだと勝手に確信している。

「それでは、理不尽な上司の期待に応えるために端末を探しましょ

う

「ブルーレイだつたよな？ あるのかよ、そんな遺跡みたいなシロモノ」

「シンがこのブルーレイに情報を焼きつけられた、という事実があるなら、この倉庫内に読み取る端末もあるはずです」

「あーあ、めんどくせえ」

ほとんど口癖になってしまった台詞を吐いて、セイは倉庫の扉に手をかけた。

ブルーレイディスクを読み取れる端末を倉庫の最奥から発見した時、すでに一人は埃まみれになっていた。既に不要となつたモニターや古いパソコンの残骸が壁際に山積みとなつており、さらにはまるで呪詛のようにセイの口から絶えず文句が飛び出している。

「じゃあ、開きますよ」

シンから受けとつたディスクを端末に挿入し、コウが簡単に操作した。

すると、「ウーン」という低い起動音と共に幾つものウインドウがモニターにフラッシュする。

「コウは慌てずその一つ一つを処理し、必要な情報をピックアップしていくた。

「アルト本社の立体図ですね。あとは、アルトのサーバー地図と研究者リスト……確実にアルトのサーバーにハッキングかけてますね、これは。叩き割れ、という指示をくむと、シンはこれを暗記しろ、と言つているようですが」

「……げえ」

心の底から嫌そうな顔をしたセイに目もくれず、さらに端末を操作したコウはもう一つのフォルダを発見した。

「過去」と名付けられたそのフォルダは隠しフォルダ　当時はこう

呼んだらしい　になつており、簡単な操作をしただけでは開けない仕様になつていた。

フォルダを開こうとしたコウは、なぜか頭の中の警鐘に気付いて思ひとどまる。コウの中の何かが、危険だと喚いていた。

そのフォルダからポインターを外し、コウはセイに指示を出した。「とりあえずもう一つ端末を起動してください。そちらにもデータを送ります。1時間以内に丸暗記してください」

セイはさりに呪詛を上塗りしながらもじぶしづ端末を起動し、暗記を開始した。

それを確認してから、コウはもう一度隠されたフォルダにポインターを合わせた。

「何だ、これは。

ファイルを開いたコウは、その内容に愕然とした。

これは「隠しフォルダ」　過去のシステムの為、肩書きを持つコウでなければ開けなかつただろう。もしかすると、セイでも無理だつたかもしねえ。

つまり、シンはこの情報をコウにだけ「えようとした　?

「……」

コウは目を細めた。

そして、モニターに映し出された設計図に釘付けになる。

ファイル名「ゼロ」　それは、簡略化されたものとはい、まごう事無き「人間の設計図」だった。ベースはおそらくシノモリの人体模型。ブルーレイディスクの許容量が非常に少ないため身体の細部は略してあるが、遺伝子配列はすべてが記載してあつた。まる

で服の採寸をしたかのようすに正確な数値が体中に書き込まれ、構成するための原子量と比率が個数単位で記されている。

心臓の拍動が耳元で聞こえる。隣にいる筈のセイの存在を一瞬忘れ、夢中でページを繰った。

最後のページ。

そこには、モデルとなつた人間とそれに携わった人間すべてが記されていた。ミドルネームの「アルト」がすべての人間に共通している。これはおそらくアルトパルランテの研究員全員に与えられるものなのだろう。

中に「シン＝アルト＝オルディナンテ」と「ミリアナ＝アルト＝ヴェルジネ」という名を認識して確信した。

ツクリモノ

襲撃者の最後の言葉を思い出す。

6年前まで上司シン＝ミリアナと迷子ミリアナは共にアルトの研究者であったと言つていた。おそらく、その頃から聖譚曲オラトリオの開発に関わっていたに違いない。もし不完全とはいえその頃には既に聖譚曲オラトリオが稼働していたとしたら。

もし偶然に生命体を生みだしていたとしたら。

「ウはごくりと唾を呑んだ。これほどに緊張したのは人生で初めてかもしれない。

「マコト＝アルト＝ビグリッジ」

最期のページ、一番上に記された「ゼロ」の遺伝子モデルとなつた人物の名を思わず声に出してしまい、はつとする。

セイの訝しげな視線に動搖し、「ウは思わずそのファイルを消去した。

その瞬間、指の先がさつと冷えた。

セイに対する引け目。

が、彼はどうやら暗記の方がせつぱつまつてゐるらしく、すぐこ自分のモニターに視線を戻した。

煩いくらいに耳元で響き渡る繰り返しに思わず頭をぶん、と振つ

た。心臓が大きく拍動している。

創りモノ創りモノ創りモノ創リモノツクリモノ
こんな動搖、らしくない。

ただ自分が原子具現化システムによって創られた人間かもしけないという可能性を知つただけで。

シンはいつたい何を意図したのだろう。コウにだけこれを見せるつもりだったのか？ それとも、一人で見ろという事だったのだろうか。いずれにせよ、何も知らないセイに見せるのは酷く抵抗がかった。

自分の中に狂気が潜んでいる事と同じくらい、「創りモノである」という事をセイに知られたくなかった。

シンはコウを情報危機の孤児だ、と言つた。

今となつてはその言葉も自分の中の記憶も正しいのかどうかわからぬ。何しろ、記憶情報などいくらでも再現出来てしまうからだ。情報危機以前の世界では、精神科の医療にユニゾン・システムが使われることが多かつた。それは、ユニゾン・システムが疑似神経系を模した情報体を作り出す事に大きく関わつてくる。

それこそつい先ほどセイが巻き込まれた「ルバート」を極小にしたような治療が行われたらしい。つまり、防御を解いて直接精神情報体に触れる事で、肉体治療へのフィードバックを期待したのだ。

フィードバックというのは、どどのつまり「思い込み」という言葉に近い。医師から渡されたものが例え小麦粉でも、薬と信じて飲めば病状が改善するというプラスチーボ効果などは有名だろう。そのため、退行治療などにも適している。

兎にも角にも、情報体は神経系を核にしているため、精神的な操作に非常に脆い。

だからこそ、「コウのように感情の希薄な人間は事後処理機関で働く事に適しており、生きる道を見いだせるのだが。何が真実で、何が虚偽なのか。何が現実で、何が虚構なのか。

迷子とは何だ？ 不協和音とは？ 生体のバックアップと名乗つたミリアナは、はたして人間と呼べるのか？

そして、創りモノ

「コウ？ 大丈夫か？」

ふいに声がして、思考が分断する。

一気に冷や汗が吹き出し、全身がざあっと冷えた。

気づけば目の前のモニターは凄まじい勢いでウインドウがフラッシュュし、まるで古い映画のようにスライドショーを行っていた。

「こんなスピードで回すから酔つたんじゃねえの？ 顔色、悪いぜ？」

「……何でもありませんよ。それより、キミこそ暗記は大丈夫ですか？」

「もちろん！」

自信満々なところを見ると、本当なのだろう。

とうに内容を覚えきっていたコウは、なおフラッシュを続けるデータプレイをスタンバイし、セイの方の端末に入ったデータの消去にかかりつた。

データはすべて抹消。

「この『クライ』オメガ』アルト』アルトパルランテ』って研究員、今のアルトの元締めだよな」

「ええ、そうですね」

セイの指示した人物は、このブルーレイディスクの情報を見る前から知っていた顔だった。

クライ=アルトパルランテ 世界政府に属さない人間としては、最高権力を有しているのがこの人物だろう。アルトパルランテ本社の社長にして世界有数の頭脳を持つ工学分野の肩書き所有者。また、能力段階式の教育制度が取り入れられて最初の卒業生、つまり第一期生と言つ事になる、

写真では小さ過ぎて判別できないが、金髪碧眼で眉目の整つた好青年であるというのがもっぱらの噂だ。歳は三十近いはずだが独身。

先ほどコウが確認した「人間の設計図」の作成にも携わっていた重要人物。

「重要な研究員はマークされていましたが、確認しましたか？」

「ああ。クライ＝アルト＝クラスター……この3人が最重要。それに、聖オ^{ラトリオ}譚曲開発に携わっているのはさらに23人」

「あと一人、要注意人物がいましたが、覚えてますか？」

「セキュリティ担当のハルカ＝アルト＝リュウジンだろ。こいつに会つたら逃げる、なんて、シン兄らしくもねえ注意書き」

「対迷子、対不協和音用のセキュリティからハッカーの相手まで、セキュリティ部門を一手に引き受けていますからね。掛け値なしに世界最高レベルですよ」

ハルカ＝リュウジンはアルトに勤める以前、有名なクラッカーだった。3年前には世界政府の情報中枢に侵入、破壊を終えると、続ければまにアルトパルランテのサーバーに侵入、完全に破壊する寸前で取り押さえられた。

本来なら監獄行きだが、被害者のアルトパルランテが莫大な保釈金と身柄の保証金を引き換えにハルカ＝リュウジンをアルトに引き入れたのだ。

以来、アルトパルランテの中核は鉄壁のセキュリティを誇つている。

「それなりに記憶したようですね。本体を処分しましょうか」

端末内のデータをすべて抹消し、コウはブルーレイディスクを取り出した。

そのディスクを空に放ると、次の瞬間には轟音と共に何発もの銃弾がディスクを貫通し、さらに銀のラインがその残骸を粉々に切り裂いた。

「シンの部屋に戻りましょう。最大の仕事が待っていますよ

「おう！」

銃を収めたセイは、楽しそうに笑った。

その笑顔を見て、思つ。自分が聖譚曲^{オラトリオ}によつて創られた存在かも
しれないと知つたら、セイはいつたいどう思つだらう 胸の辺り
がぐるぐると渦巻くような感覚が拭えない。

先ほど、「ゼロ」と名付けられた人間の設計図を見た時から、心
臓の辺りが苦しい……これは、痛い？

いつたいこれは、何だらう。

セイに対する引け目。秘密を抱えてしまつた苦しみ。
そして、自分自身に対する疑惑。

「……コウ？」

不思議^{オラトリオ}そうな顔で覗き込むセイの漆黒の瞳。

「大丈夫です、何でもありませんよ」
いつものよつて表に出でず答えると、コウは再び歩みを始めた。

シンの部屋にはすでにいくらか人が集まっていた。

黒衣裳のジニア、マップ係かつ通信担当のカラム=マクレーンとスフィア=マクレーン、そして、シンとモニター内のミリアナ。

「来たな、迷子係」

その中央に座るシンの蒼い瞳が入ってきた一人を貫く。

「これで全員だ。俺とミリアナは現場で指揮を執る。セイ、コウ、ジニアの3人は直接戦闘員だ、一緒に来い。カラムとスフィアはここに残つて状況把握と通信、補助にまわれ」

シンは、コウの覚えていいる限りで久しぶりとも思えるほどに椅子から立ち上がった。

細身で猫背の上、いつも椅子に座つてゐるので分かりづらいが、シンはかなりの長身だ。近くにいたジニアが本物の人形のように見える。

肩にも届かないジニアの黒髪にほん、と手を置いたシンは、煙草をくわえた口でやりと笑つた。

そしてシンはモニターに映つたミリアナを全員に紹介してから、先ほど説明したような聖譚曲^{オラトリオ}の性質と危険性を簡潔に述べ、そらひは詳しい作戦を説明した後、見渡してこう言った。

「余計な事は考えるな。聖譚曲^{オラトリオ}を破壊できさえすればいい。その後の事は全部、政府やアルトとの相手も含めて俺が何とかしてやる」
「すっげえ、シン兄、それできたら、おれたち英雄じやん?」

通信担当のカラム^{サイバーショック}がにしし、と笑う。

8歳の時に情報危機^{タチエット}に巻き込まれ、フィードバックによつて右目と左足を失つたカラムは、同じく左目を失つた妹のスフィアと共に、拡大を続ける虚構の地図を描いてゐる。

専門は通信・暗号解読部門。

「そういうのを余計だと言つんだ。世界がどうのと考へるくらいな

ら、気に喰わない相手に喧嘩を売るつて考えた方がよっぽどいいぜ

「それ、いいわね」

左眼帯の妹スフィアがにこりと笑う。
いつも左足を失ったカラムの車椅子を押して移動する彼らは、いつも共に在った。

「ねえ兄様、楽しそうじゃない？」

「だな！ 相手がアルトパルランテなら不足はねーな！」

今の医療技術なら、失った左足を新しく継ぎ直す事は難しくない。手術が面倒ならば、本物と変わらない義足もある。

が、カラムは頑なにそれを拒否した。

それは情報危機を忘れないためのものらしい。親も、スフィアの下にいたというもう一人の妹もあの混乱の中で失ったという話をどこかで聞いた事がある。

世界政府が真っ先に作り上げていった教育体制がなければ確実に路頭に迷い、この世を去つていただろう。

もつともそれはコウやセイも同じ事で、教育制度が整備されなかつたら、そして、シンに拾われなかつたら今頃どうなつていたか分からぬ。

「相手はあのアルトだ。相当キツい仕事になるだろうな。だが……全員、死ぬなよ？」

その言葉で全員に緊張が駆け抜ける。

最もこの場に、敵の大きさを知ったからといって逃げ出すような人間はいない。何しろ、ダリアという不協和音^{ディック}系を一人欠いたとはいえ、いずれ劣らぬ事後処理機関ソルディーノの精銳たちだ。

何より、相手があのアルトだとしたら人数は関係ない。数で攻めるなら、それこそ世界政府直属の軍隊を動かすレベルでないと意味がない。

だとすれば、絞りに絞った精銳で忍び込むのが最も有効な手段だ。目的は制圧ではない、たつた一つの機械を破壊する事だけなのだから。

いざれにせよ、ソルディーノには人海戦術を使えるほどの人員はない。

「さあ、天下のアルトパルランテに喧嘩売りに行くぞ」

楽しそうなシンの声で、世界を救うという名目の無謀なケンカが始まった。

アルトパルランテは、情報関連の商品を世界中に売り捌く大企業であると同時に世界最大の研究施設もある。

中でも最も力を入れているのは工学と生物学の混合分野 ユニゾン・システムに代表される情報世界への入り口を開き、さらに情報空間内での活動を円滑に行う装置の開発を目的としている。情報空間関係のほとんどの製品はアルトパルランテの研究チームによって生み出されたものだった。

サイバーショック
情報危機以前、この組織は世界のすべてを手にしていた。

経済だけでなく政界にも手を伸ばし、大陸のほとんどの国を裏から牛耳る巨大な組織。その総裁ともなれば世界の支配者と呼んでも過言ではない。

メール一つで大国の軍事力を動かし、一声で大統領が変わるこれは揶揄の一部だが、それほどの力を有していたのは事実だ。

情報空間の拡大に伴い、その権力は膨張していった。

それと比例するように当時の情報空間には、大量の迷子トヨリが発生していった。

現実世界を見限つた浮浪者、この世のすべてを手にした豪族、生体を売りに出さなくてはいけなくなつた子供たち。

現実世界の生体を捨て、情報体のみになり。それでも「死にたくない」と願う魂は、ただのゼロとイチの塊となつて情報空間をさま

よつた。

自らのサーバーを持つ者はいいが、居場所を持たぬ亡靈は場所を構わず出没し、最大の社会問題と化していた。ネットで繋がった全世界が迷子トリル対策に追われ、ユニゾン・システムを開発したアルトパルランテが対迷子のセキュリティを開発し、急場を凌いだほどだ。その頃から、現在の情報空間を迷子トリルごと隔離すべきという構想が生まれていた。

生体を捨てて永遠の命を得たければ隔離された情報空間内で勝手に生きていけばいい。その代わり、現実世界には一切干渉を許さない俗に「タチエット虚構構想」と呼ばれるものだ。

しかし、4つ目の次元とまで呼ばれるほどに拡大した情報空間をおいそれと破棄できるはずもない。この頃、既に教育機関や国家の重要機関すらも情報空間に移転されており、ユニゾン・システムで情報空間と現実世界を行き来して生活する人々は多い。

とても情報空間を切り離す事などできなかつた。

が、ある日、膨らみ過ぎた権力は破裂する。切つ掛けは小さな欠陥バグだつた。

極東の小さな島の、しかしアルトパルランテを有する情報大国の片隅で誕生した小さなバグは、遺伝子内の逆転写コードと結びつき、さらに壊死アボートトリルコードを巻き込んで、一人目の迷子トリルを破壊した。すでに時を止めて数十年を経ていた迷子は、誰にも看取られることがなく消失したのだつた。

それは些細な出来事だつた。

しかし、それだけでは終わらなかつた。

最初の犠牲者を破壊したバグは偶然に感染型のウイルスに組み込まれ、近くにいた迷子トリルに侵入した。

その保菌者は各サーバーを渡り歩き、ウイルスを振りまい^{トいた}た。

被害は、誰も与り知らぬ処で徐々に拡大しつつあつた。迷子から^{トリル}迷子へ^{トリル} それは数十年の時を経てきた者達の悲劇。縁者もいない彼らが消滅したところで気付かれなかつたのが、被害拡大の最大原因だつた。

アルトパルランテがそのウイルスの存在をいち早く認知した時、それでもウイルス発生から半年が過ぎ、すでに百万単位の迷子が消滅した後だつた。

次々と迷子を呑みこみ、その度に変異を繰り返すウイルスのワクチンを作る事はほぼ不可能。各国は、情報空間を呑みこんだ混乱の收拾に乗り出したが、時すでに遅し。

それまで迷子だけを襲つていたウイルスが、とうとうヨーロン・システムで情報空間に入り込んでいた生体を持つ人間に感染した。情報空間内は大混乱に陥つた。

そしてその直後、「情報危機」^{サイバーショック}が勃発するのだつた。

* * * * *

アルトパルランテの本社はソルディーノがある街の中心部に佇んでいる。

最高度を誇る有機素材性の建造物は、情報危機を経てなお揺らがないアルトパルランテの権威を誇るように聳え立つていた。

あの建物に侵入するのは至難の業だ。

一階からの出入りは不可能。地下通路は、ここからおよそ数キロ離れた所にある10年前まで存在した国家の中枢が集まつていた場所、現在の世界政府極東支部まで通じてゐる。建物の中央部から伸

びる空中路も同じだ。

その一つの経路以外では、空中から建物の屋上に侵入するか、建物の200階以上に設置してある窓から侵入するか。

いずれにせよ、この街から直接侵入するのは不可能だった。

天候は、雨。

暗雲から絞り落とされる粒が窓の有機硝子を叩いていた。流れ落ちる水のスジから焦点を外にやると、女性が10人いたら10人とも振り返るであろう美男子の姿が映っていた。

少々クセのある金髪はセツトしなくてもそれなりに見えるという便利な髪質だ。やや細めの眉と艶っぽいと評判の眼におさまる碧の瞳は、女性たちに好評だつた。普段は眼鏡をかけているのだが、女性を口説くときだけは外すようにしている。その方が、成功率が高い事を彼は知っていた。

シャツの上に白衣を身に付けているのもただのポーズだつた。自分は科学者だという自負と自覚を身に付けているようなものだ。

「そろそろ来るかな」

窓に映つた男性がぽつり、と呟く。

そして、眼下に広がる名もない街を見下ろした。

「おいで、シン。僕はいつだって待つている」

窓に張り付けていた手をゆっくりと下に滑らせ、街の一角を指した。

あの街の片隅にいるのは、5年前にここを出ていった同僚だ。

「僕が正しいと言わせてみせるから」

美しい貌に物騒な笑みを張り付けて、男性は微笑つた。喉の奥から声を絞り出しながら、まるで、おもちゃを前にした無垢な子供のような表情で。

「おいで」

音は聞こえないが、ほんの少し硝子を離てた所に確実な雨の気配がある。

それを掴み取るかのように強く握りしめた拳を硝子に押しつけ、男性は微笑んでいた。

が、最上階の窓から一心に外を見つめる男性の背後から声がした。

「ボス、全員揃いました」

まだ年若い女性の声。

振り向いた男性は、部下の姿を目に留めた。

艶やかな黒髪を結い上げ、伝統工芸品の美しい蜻蛉玉が下がる簪を挿しているが、服はそれに似合わぬ洋装だ。大人しいチョコレートブラウンのフリルがついた優しい色のブラウスに臙脂色のタイ、そしてひざ下まであるチョックのフレアスカート。

気弱そうな表情と裏腹に目に灯る強い光が、ふわりとした穏やかな空気の中にも芯の強さが伺える容貌を醸し出していた。

「すぐ行くよ、ビアンカ」

男性は踵を返すと、窓の傍に小さな花瓶台があるだけの殺風景で手狭な部屋を後にした。

扉を開けてすぐの所に、彼の執務室がある。

先ほどの部屋とは違い、豪華なアンティークの調度品に飾られた、落ち着いた雰囲気のある空間だ。1600年代欧風に統一された部屋では、彼の白衣が明らかに浮いていた。

臙脂色をした天鵝絨の椅子に深く腰掛け、彼は目の前の部下たちを一回り、見渡す。

と、いつも先ほど呼びにきた女性を含めて3人しかいないのだが。

「さて、もうほとんど話す事はないと思つけど……裏切りのミリアナがそろそろ帰つてくる頃だから、出迎えて差し上げようか」

金髪碧眼の男性の言葉に、最初の女性は跪き、一人目の壮年男性は軽く会釈し、もう一人の青年は話を聞いているのかいないのか、ガムを噛みながら返答もしなかった。

「ハルカつ、何度も言つたら分かるのです、ボスの前でその態度はやめなさいと言つていいでしよう？！」

女性がヒステリックな声をあげて青年を糾弾する。

が、青年はよれよれになつたジーンズのポケットに手を突つこんだまま、女性の方を見ようともしていない。

前髪をヘアゴムで上に結んでいる。鼻の辺りにはそばかすが散つており、彼を年齢より若く見せていた。プリントTシャツとジーンズというラフな格好をした青年は、明らかに嫌悪の表情を見せていた。

「いいよビアンカ、いつもの事だ」

ところが、彼らのボスは鷹揚に頷いた。

「適当に遊んであげて。情報空間内なら何人殺しても構わない……と、言つてもシンの性格上、大人数で来る事はまずないと思うけど」「なあボス、これから来る敵つてさあ、ほんとに俺様より強いのぉ？」

「ああ、本当だ。現にハルカ、お前は幾度もハッキングを許していはるはずだが」

ボスの言葉にぐつと詰まる青年。

「あ、あれは油断してえ」

「情報を抜き取られたのは事実だから」

笑みを浮かべながらばつさりと切り捨てるボス。

「ビアンカとジュラも適当にね。構成員を配置してもいいけど、増援は不可。銃は使用を認めるけど、建物内でレーザーは禁止。後は特に制約なし。殺しちゃつたらすぐ報告ね」

それを聞いた女性とスーツ姿の壮年男性は、答える代りににこりと笑つた。

「ゲームには、ルールが必要だから」

にこりと笑うボスには邪気がない。

それが却つて恐ろしく、うすら寒さを『え』ていた。

「さあ、ゲームの始まりだよ。みんな愉しもう！」

狂科学者たちの祭典。

文明の行きつく先、奈落の終焉。

様々な「想い」が交錯する場所。

何が現実で何が虚構か、何が真実で何が虚偽か。

これは、世界を賭けたゲームのはじまり

侵入は迅速に、目立たず、気づかれずに
が、鉄則なのだが、鎖や装飾を音がするほど装着したコウとセイ、
人形のような服を着たジニア、それにどう見ても真っ当な職業につ
いていると思えない汚れたジャケットに咥え煙草のシンといフメン
バーでは、目立つなという方が酷だ。

「お前ら、とくにそこの赤目と黒髪は相当有名人だ。アルト内でも
知つてゐる奴は多いだらう。隠れて侵入するのは不可能と判断した」
妥当な判断だ　「ウはそう評価する。

「よつて正面突破する」

シンの号令で、4人は街から数キロしか離れていない世界政府極
東支部が存在する都市に向かつた。

ミリアナは、タチエック虚構内に張り巡らされたアルトのセキュリティを破
つた後、カラムとスフィアがソルティーノの本部から直接転送して
くれる事になつてゐる。

よつて、物理的にアルトバルランテ本社に侵入するのは、指揮を
執るシン、それにセイ、コウ、ジニアの4人という事になる。

リングホンからカラムの声が届く。耳の穴の中に装着する小型の
音声受信機で、骨伝導を利用するため周囲に音が漏れる事もない。
「聞こえますかー。聞こえたら返事してねー」

さらに首には口に出さなくとも喉の奥を震わせるだけで音を伝え
てくれる高性能の受音機が仕込んだチョーカーをつけている。

最も、この機械を使いこなすにはそれなりの訓練が必要だが。
「はいはーい、ありがとー。全員、感度良好つ！ がんばれよー」

呑気なカラムの声がきんきんと頭に直接響く。

「つたく、カラムのヤツ、テンションたけ な」

隣で同じようにこめかみを押されたセイは、ぼそりと呟いた。ジ
ニアはいつものように表情もなく真つ直ぐに前を見ている。

シンはそんな3人の様子を見て鼻で笑うと、レンタルのリニアカーを一台借りた。

どうやらこれでアルトまで向かうらしい。

「てなことで、俺らはこれからアルトに向かう訳なんだが、侵入が一番面倒だから適当に入る事にした」

「……もう少し詳しい説明をお願いします」

「んー、まあ、俺は5年前までアルトにいたわけで、内情はちいつと分かってる上に知り合いも多い。だから、昔の知人を偶然思い立つて尋ねるって事で、受付を通る。あれさえ通つてしまえばあとはザルみたいなもんだ。警備員はレーザー銃携帯だからそれだけ気をつける。人数少ない場合は問答無用でぶつ倒して隠しておけ」

本当に適当ですね、とは言わなかつた。シンが言うのだからほぼ確実に侵入できると見ていいだろう。この上司が見た目によらず計算高く、広い人脈と卓越した頭脳の持ち主だという事は分かつている。

それもおそらく、アルトパルランテにいた頃は要職についていたはずだ。

「地図は頭に入つてるな？ もしバラバラになつても、ポイントAで集合、人数が揃わない場合は待機だ。完全にあの部屋を隔離しなければ意味がないからな」

そうだ。あの部屋を制圧できるかどうかにすべてがかかっている。「アルトなんてセキュリティに頼りっぱなしのボンクラ集団だ。生きるか死ぬかの世界で戦つってきたお前らの敵じゃねえよ」

仮にも天下の大組織アルトパルランテをさらりと扱き下ろし、シンはリニアカーのハンドルを握つた。

自動操縦でも構わないはずだが、どうやら手動運転でアルトに向かうらしい。

大粒の雨が空中路を包む有機硝子を叩き始めた頃、4人を乗せたリニアカーはアルトパルランテに向かつて発進した。

リニアカーの中においても感じられるほどの強い雨粒が硝子チューブを叩いている。

車内で会話はなく、ただ、暗記した事を口の中でぶつぶつと繰り返すセイの声だけが鈍く響いていた。

沈黙の中、アルトパルランテまでは数キロ、わずかな時間を要しただけだった。

目の前、雨の向こうに巨大な建物が迫つてくる。

「最後に確認する。侵入したら最初にポイントA制圧、セイがしがりで確認、ジニアは俺の補助、その間にセイとコウが全面ロックを発動する。コウ、やり方は覚えたな？」

「はい」

「シン兄、何で俺に聞かないんだよ」

「キミの記憶力を考慮に入れれば、言わずとも分かるでしょう」
すぱりと切り捨てられてセイは不平不満を浴びせかけるが、コウはそれをすべて無視した。

黒々と開く入口は、リニアカーが次々と吸い込んでいく。空中路が続く先は敵陣。

いつもの任務とそう変わらない。ただほんの少し複雑なだけコウはそう思っていた。

そして数分後、4人はアルトの廊下を全速力で駆けていた。

「シン兄、マジですげーな。受付、あっさり通れたぜ！」

やはりシンは過去かなりの要職についていたのだろう、ほほ顔パスで受付を素通りした一行は、社員の怪訝な顔を無視してエレベーターに搭乗、受付で指示された102階で降りたと見せかけて20

0階へあつさり侵入した。

周囲の視線に曝される前に、人気のないビルの裏側通路に入り込む。

これが鉄壁を誇るアルトのセキュリティ……？

「コウは怪訝に思ったが、罠と氣付いても戻れるものではないし、戻る意味はない。とにかく聖譚曲オラトリオがある最上部に辿り着いて、破壊してしまえばこちらの勝ちだ。」

人気のない通路を、4人は駆けていた。

もちろん認証コードの必要な扉が何枚もあったのだが、リングホンから届く本部のカラムたちの指示で つまり、つい最近までアルトに勤めていたミリアナの指示で次々に突破していった。

その合間にスフィアからの警告が入る。

「今使つていい認証コードはミリアナのものらしいの。おそらくこの認証を使えばまずセキュリティ部門にミリアナが帰ってきた事が通達されるそうよ」

シンが了解の意を伝え、さらに並んで走る3人の部下に声をかける。

「ここには倉庫ばかりの下層部だから人が少ないが、この先はいつもに会うか分からん。散るぞ。各自対応しろ」

シンとジニアは共にエレベーターを使う。

こくり、と頷いたセイとコウは非常扉に飛び込んだ。二人は原始的に階段で上る事になっている。こちらには、まず人がいるはずはない。

カラムの指示で何枚かの扉を抜け、最後に分厚い鉄の扉 最近では全く見かけなくなつた素材だ 強風が襲つた。

眼下に広がるのは自分たちの街。

見上げれば、大きな窓ガラスが幾枚も張られた200階以上の区画が天にのびている。

「あのさー、コウ。この非常階段で、何で作るわけ？ 侵入してく

れつて言つてゐるよつなもんじゃねえの?」

「まさに非常用ですよ。電源が落ちる事はまずないですし、いくつも自家発電と蓄電がありますから大丈夫だとは思うのですが、それすべてがダウンした非常事態に、このビルを脱出する経路を確保するためです。最も、この階段も長い間使われていないよつですが」「ここから避難すんの? 普通の人間が?」

階段とは名ばかりの有機素材の壁に張り付いた梯子としか呼べないような不安定な足場。下を見れば、足の隙間からはるか下に先ほど通つてきた空中路が見え、さらに吹きさらしのこの場所では風も強く雨が打ち付ける。

とても普通の神経でこの階段を200階分も下れるとは考えにくく。

落ちた方がよっぽど速い。

一人にとつては十分な足場だが、研究ばかりのアルト職員がここを降りられるとは思えない。それこそ、二次災害だ。

肩を竦めたセイに視線を遣り、まるで平地を走るかのよつに駆け上がつた。

1

一方、シンとジニアは堂々と通路を歩いていった。

どこに持つっていたのかシンは白衣を纏い、小さなジニアの手を引きながらエレベーターに向かつて行く。

対面から白衣の男性が歩いてきたが、一瞬怪訝な顔をしただけで素通りした。

ジニアは素通りしていったアルトの研究員を不思議そうに見送つ

てから、かなり高い位置にあるシンの顔を見上げた。

「何で怪しまれないのか、つて不思議そうな顔してんない
シンはぐしゃぐしゃ、とジニアの黒髪を撫でた。

「研究者ってのはな、自分の研究以外に興味ねえんだ。しかもここ
はアルトの上部区画。何重ものセキュリティの内側だ。まさか怪し
い人間がこんな所を歩いてるなんて誰も思わねえよ。特に、白衣を
着ている人間に関してはな。そして手を繋いでるお前はその身内つ
てわけだ」

それを聞いてジニアは返答もなくまた視線を落とした。

堂々とした正面からの侵入。何の臆面もなく敵陣内を闊歩し目的
地へ向かう 大胆ではあるが、逆に盲点を突いた作戦ではある。
下手に無茶な侵入を試みるより成功率は高く、気づかれにくい。

それもこれもすべてシンが元々ここの研究者であり、さらにミリ
アナという強力なバックアップがあるから出来る事だが。

それも、研究者という特殊な職業を持つ人間たちの心理まで見抜
いている。

犯罪に遭う場合、最も恐ろしい敵は、自分の事を知る人間 つ
まり、内部犯が最も成功率が高いという。それは、古い慣用句「敵
を知り、己を知れば百戦危うからず」にも通ずる。

「しかし、さすがに4人で連れだって行動すれば目立つからな、あ
いつらは外から回したのさ」

難なくエレベーターに乗り込み、一番上のボタンを押すシン。
二人を乗せた箱が滑るように上昇する。

「それにも、ここまで妨害がないとは、こりや完璧にあのバカ
は待ち伏せてるな。ミリアナの認証コードを使つた事になんざ、と
つぶにセキュリティの奴が気づいてる筈だろうに……めんどくせえ
いつもの台詞を吐いたシンは、煙草を取り出して火をつけた。
機械音声が到着を告げ、扉が開く。

そこもまた人気のない通路だった。

有機素材の床はつるつるに磨かれており、ここがほとんど人の通

らない場所だという事が分かる。

窓はなく、無機質な扉だけが左手の壁一面にずらりと並んでいた。

「さあ、行くぞジニア。ポイントAはすぐそこだ」

エレベーターを降りてなお離れない手を見て、ジニアは少し首を傾げる。

この人は、私の手を離さない。

強く引かれているのに不快ではない。

だつてこの手はこんなにも温かい。

「この階はすべて倉庫だ。様々な製品の試作品やすでに使われなくなつた器具を置いてある場所だ。ここに来る人間はめつたにいない」通路の最奥にある最も大きな扉に近寄り、シンは本部にいるカラムたちと交信している。

その邪魔にならないよう、ジニアはふと手を解く。

シンが扉の横にあるパネルを幾らか操作すると、何の前触れもなく扉が開いた。

「ここ」の認証だけは5年前と変わつてねえな…… どんだけ触つてねえんだ、この「ゴミ箱」

「ゴミ箱、とシンが称したその扉の向こう側には、様々な機械が雜然と積まれていた。

むき出しの基盤からゴーン・システムの一部と思われる半球体、さらに何に使うのか想像もつかない奇妙な形をした機械が所狭しと並んでいる。

むつと押し寄せた埃と黴の匂いから逃げるよう、ジニアは半歩身をよじった。

唯一の救いは、その機械の山の向こうから微かに光が漏れていることだ。

シンはその埃と黴の匂いを感じていなかのようにビカビカと入り込み、最初に灯りをつけた。

いつたいこの部屋を作ったのはいつなのか。

ほとんど旧時代の遺物とも言つていい蛍光灯がピイン、と高い音

を響かせて点灯した。

ついでに空調設備にも手を加えたようで、大きな音がして空気が「ごそりと動くのが分かつた。しかし、埃と黴を撤去するにはもう少しかかるだらう。

その間にシンは部屋の最奥に消えてしまった。

作戦の一つ目はこの部屋を制圧する事だが、ジニアには「ここで特にやるべきことがない。

部屋の空氣から逃げるようにくるりと背を向け、傘を差した。

そうしてジニアは小さな小さな唇から小さな小さな声を漏らした。

「道行く子犬は 何を探す」

軽い節がついたそれは、ジニアが唯一知る童謡だった。

「首輪の無い子は 首に輪を 腹空かせた子は 食べ物を」「仕事の前にはいつもこれを唄う事にしているのを知つているのは、相棒だつたダリアだけだ。

いつ覚えたか知れないこの歌は、これから奪う命への鎮魂歌。レクイエム

「 何が欲しい 何が欲しい

言つてしまえば 夢現 ディップ 叶う事だけ想い行け」

ジニアは不協和音を今でも人間だと思つていた。いくら壊れても、人間には違ひない。それが情報化しているというだけで処分の対象になる事は本当ならおかしい事だと

それでも、不協和音係としていつも彼らを消滅させていく。

今回の任務で、不協和音を破壊する事はない。それでもこれは、任務へと向かうジニアにとって、一つの儀式だつた。

「 てんてん 手鞠 何処行くの

転がる先は 池の中 跳ね行く先は 川の岸

何が欲しい 何が欲しい

聞いてしまえば 夢現 叶う事だけ想い行け」

とんとん、と黒靴の先で床にリズムをとつた。

「 人間様は 何欲しい

文明開化の鐘の音 天の神様 仏様

何が欲しい 何が欲しい

獲つてしまえど 夢現 叶う事さえ適わない

すべて唄いきつて、ジニアは目を伏せた。幼い記憶の底に眠る父

親に思いを馳せたかつたから。

情報危機^{サイバー・ショック}で失つた両親の思い出はそれほど多くない。姉もいたよ

うな気がするのだが、霞がかつていてよく思い出せなかつた。

いつしかジニアの中から感情はすっぽりと抜け去つていつた。

そうなつた原因もあつた気がするのだが、ほとんど覚えていなかつた。

しかし、先ほどシンと手を繋いだ時に何かを思い出しそうになつたのだった いつたい何を思い出そうとした？

記憶の底を必死にさらつてみたが、何も引っかかるなかつた。

「ジニア、どうした？」

シンの声で振り向く。

その後ろには、雨に降られてずぶ濡れになつた迷子係が一人、不機嫌そうな顔で佇んでいた。

13：通じる何か、通じない何か

シンはてきぱきと指示を出して、『ミ山から稼働しそうなユニゾン・システムの残骸を掘り出した いや、正確には迷子係をして掘り出させた。

雨で濡れそぼった上に埃まみれになり、セイはぶつぶつと文句を言っている。

が、シンはそれを完全に無視してユニゾン・システムの調整に入つた。

セイとコウは不機嫌オーラを全身から発散しながらもこの部屋を完全に制圧するための準備に入つた。

セイは、サイレンサーを付けた銃で監視用のカメラアイをすべて撃ち落とす。

少々過激だが、シンに言わせれば「何万個もあるカメラのうちの数個だから気づくのに時間がかかる」らしい。デジタル機械は「破壊」というアナログな対抗手段に最も弱い。ハッキングなどにはかなりの抵抗を持つのだが、まさか直接破壊されるとは考えていない。しかも、同時刻にスマートフォンのサーバーに侵入を試みて注意をひきつけているはずだ。全員がここにいることを知られるまでにはタイムラグがあるはずだ。

物理的なセキュリティから人員を払つたツケか、外部からの侵入には鉄壁の守備を誇つても、内部に入り込んでしまえばこれほどに脆い。

「警備員の一人すら見なかつたな」

セイはまるで犬がやるようにふるふると頭を振つて水を飛ばした。正確に言えば、リニアカーを駐車した場所と受付ではかなりの人数を見たのだが、エレベーターで上に来てからはシンの誘導とミリアナの助言もあり、人っ子一人見なかつた。

もちろんそれは、30階分以上も外の階段を駆け上つてきたせい

もあるだろうが。

「警備はリニアカーの入口と出口、それに受け付け、そして数万個の監視画像解析に人手を割いていますよ。シンが受付を通った時点で、ボクたちは侵入を完了したも同じです」

赤いメッシュの入った黒髪からぼたぼたと零を垂らしながら、コウが答えた。

その間にもコウは壁に埋め込まれたタッチパネルを操作し、この部屋を周囲から隔離に導いている。

セイは部屋の外を警戒しつつ、コウの作業が終了するのを待つ。その間にシンはユニゾン・システムを起動させ、壁に埋め込んであつた端末に接続した。

「よーし、思つたより早く出来そうだ……コウ、セイとジニアを連れてもう行け！　ここでの隔離は俺がやる」

シンがそう呼びかけた瞬間、部屋の外で凄まじい警笛音が鳴り響いた。

「ちつ、さすがにばれたか……早く行け、ここは大丈夫だ！」

その言葉で3人は弾かれたように部屋の外へ飛び出していった。後姿を見送ったシンは、コウが途中まで進めていた部屋の隔離を完全に完了し、埃臭い部屋の中央にぼんやりと浮かび上がる一台のユニゾン・システムと向き合つ。

迷うようにしばらくそれと見つめあつた後、シンはそれに乗り込んだ。

かつての同僚を止めるために。

* * * * *

部屋を飛び出したセイと「ウは、一番足の遅いジニア」とはいえ、とてもひらひらとしたワンピースを着ているとは思えぬほどの速さで走っているのだが、を間に挟むよつとして通路を駆けいつた。

「セイ、この壁と窓硝子はすべて防弾です。兆弾に気を付けてくださいね」

「分かってるよ。そんなもんに当たるほど俺は鈍臭くねえ」「本当に分かっていますか？ ボクらを巻き込まないでください、という意味ですよ」

「ウにびしやりと言われてセイはぐつと口を噤んだ。

「できる限り一緒に行動しますが、最悪の場合ポイントBに集合です。もしその前にシンから連絡があればポイントAに引き返してください」

「ウが最後の確認をし、ジニアとセイは軽く頷いた。

銀色のラインが走り、「ウの体が宙を舞う。着地で鎖がじゅらりと音を立て、隣に傘をさしたジニアがふわりと降り立つた。

その背後で血飛沫があがる。

徐々に3人の元へ集まりつつある警備員の数はとうに一桁を越していた。

その2人に追いついたセイがまたも文句をぶちまける。

「こんな人数、どこに隠れてたんだ？！」

「言つたでしょ、最初からいましたよ、と。ただ、シンがいたお陰で襲われはしませんでしたけれど……しかも暗記したはずの資料に警備員の配置と人数が記してあつたはずですが」

「……忘れた！」

「そうでしょうね」

あまり興味のない記憶を留めておけるほどセイは器用ではない。そろそろ忘れ始める頃合いだ。

左手で銃を構えたセイは、銃を持つ警備員の手を正確に打ち抜いていく。

「同じ銃なら俺の方がはえーよ、バーカ」

新しい弾を詰めながら、セイは悪態をつく。

回転式拳銃は弾を詰めるにしてもハンマーを引く動作にしても、明らかに時間のロスだと思うのだが、セイはそんなものを感じさせないくらいに速い。しかも狙撃の正確さに関してはシンの折り紙つきだ。

どうやらオートの拳銃だと狙いがわずかに逸れるらしい……といつても、ミリ単位のズレだが。

回転式の拳銃など、もう100年以上前に生産は中止されているのだが、セイは古いパーツを集め、自分で組み立てている。銃弾も、自ら硬度の高い有機素材を削つて作っている。

そしてセイは左手の一部のように銃を扱う。照準合わせを機械に頼り、オートで打ち出される弾を待つだけの警備員とは格が違う。

接近戦ではコウがワイヤーを操り、遠方の敵はセイが銃で片づける。

そして、ジニアはふわりふわりと追撃を避けながら襲つてくる敵を傘で退けていた。

「なあ、それ、その傘さあ、どうなつてんの?」

触れる事なく警備員を吹つ飛ばしたジニアを見て、セイが思わず聞いていた。

ジニアは紫水晶の瞳を一瞬ちらりとセイの方へ向け、喧騒の中聞こえるか聞こえないかという小さな声で返答した。

「…………これは、ボスが作ってくれた重力波の発生装置」「重力波?！」

セイが驚いた声を出す。

無理もない。

重力波はもともと巨大な質量が高速運動する時に発生する高エネルギー波である。発生装置はかなり小型化したものの、世界最先端の技術でもユービン・システムレベルの大きさが必要だ。

しかし、ジニアの手におさまる傘は黒い天鵞絨^{ビロード}と白のレースが主体の、むしろ小さいくらいの大きさの傘。

とても重力発生装置が仕込める大きさではないし、仮に発生装置があつたとしても細腕のジニアが片手で持ち歩けるような代物ではないだろう。

それ以上ジニアは説明しようとはしなかった。

が、言われてみればあのふわりふわりとした身軽な動きは重力波発生装置のお陰だ。触ることなく警備員を倒す事が出来たのも、重力波を攻撃的に発射したせいだろう。

そう思つてみれば、先ほどジニアが吹き飛ばした警備員は、外傷もないのに仰向けに倒れ、口から泡を吹いている。全身がびくびくと痙攣し、手足が床を叩いていた。

典型的な重力波によるショック症状だ。

信じられない事だが、シンは超軽量の重力波発生装置まで開発していらっしゃい。

「コウは思わずため息をついた。

「このままじゃラチがあかねーな」

3人背中合わせに両側から迫つてくる警備員を迎撃し続けたが、さすがにこのままでは前にも後ろにも進めない。

すると、ジニアは指していた傘を閉じた。

「…………危ないから、少しどいて」

「危ない?」

セイが怪訝な顔をしながらもジニアから距離をとる。

もちろんその間にも銃弾は次々打ち出され、押し寄せる人の波をとどめている。コウのワイパーも同様で、縦横無尽に通路を踊り消^ホタル・^{バイ}タル・^{バイ}タル・^{バイ}タルを作り出す。近寄れば裂かれる見えない武器の急襲。

既に足元は倒れた警備員の山で制服の黒と血の赤に埋もれている。

「何するつもりだ？」

「床、壊すから…………」

「はあ？！」

「はあ？！」

この床は特殊な硬質有機素材でできている。
打撃に強く、また銃弾を弾き、切断も不可能な硬壁をいつたいど
うやって壊すつもりなのか。

と、思った瞬間、ジニアは閉じた傘の先を床に叩きつけた。

刹那

耳を凄まじい刺激が貫いた。

床がせり上がり、立っていた地面が大きく鳴動する。
足が痺れるような感覚に思わず飛び上がるコウとセイ。
衝撃波はジニアを中心に発生している。両手で傘の柄を握りしめたジニアは、ふいにその傘を開いた。

ぱん、と乾いた音がして空気が止まる。

その場に沈黙が降り、全員の動きが停止した。

すう、と流れるような動きで広げた傘を頭上に持つてきたジニアは、ひとつ、ひとつ、ひとつ、と、靴の踵で床を3回打ち鳴らした。

すると。

「 つ？！」

音もなく、ジニアの立っていた場所の床が粉塵と化した。
ぱっくりと口を開けた直径3メートルほどの床の穴に吸い込まれていったジニア。

着地の床を失い、セイとコウも同時に階下へ落下した。

何とか受け身をとつたものの、下の階の床に全身を打ちつけ、コウはよろよろと立ちあがった。隣でセイも盛大に痛がっている。

そこへ、ふわりとジニアが降りてくる。

まるで何事もなかつたかのように。

「…………この武器は情報空間より現実世界の方が数倍有効。だが

「私は情報空間内の不協和音の処理に向いていない」

多少雄弁になつたジニアはほんの少し高揚しているように見えた。

驚きに絶句したセイとコウを見て、ジニアは唇の端をあげた。

「私は頬廃崩壊^{ゴシック・ヒエロ}……破壊を願う、道化師」

ジニア^{ゴシック・ヒエロ}アリーチェ、ソル^{ゴシック・ヒエロ}ディーノ不協和音担当。通り名は「紫苑^{ゴシック・ヒエロ}の頬廃崩壊^{ゴシック・ヒエロ}」。

初めて人形が微笑んだ。それは美しく妖艶な悪魔を潜めた微笑み。破壊を願う道化師に操られる人形は同じく破壊を願い、破壊に自己を見出した。人の死に触れたコウが自分の中に確かなものを芽生えさせるのと同じように。

ジニアの紫水晶の瞳がコウの真紅を捕える。

紫苑と紅緋が、互いの中の何かを確かめるように交錯する。感情を忘れてしまつたモノ、感情を麻痺させたモノ。

同じ形のピースは、互いの欠損を埋めるかのように惹かれ合つ。もう一度感情を取り戻す為に

「おい、行くぞ二人とも！」

セイの声ではつとした。

今の一瞬の空気は何だったのか。

確かめる間もなく、警備を振り切るためにもう一度駆けだした。

深淵の闇を映しこんだ情報空間内に、黒髪の男が立つていた。その蒼い瞳には隠しきれない怒りが含まれている。

敵のサーバーの只中だというのに、全く意に介していない。

そこへ、ふつと金髪の女性が現れた。

「ありがとう、カラム。もういいわ。あとはあたしとシンで何とかする。あなた達は本部から逃げて」

ミリアナがそう言うと、本部からの通信は途絶えた。

セイ達が見つかれば、まずソルティーノ本部を抑えられるはずだ。その時、カラムやスフィアが本部にいてはまずい。無論、他の構成員はすべて昨日のうちに退避させてある。

シンはアルトの内部からユニゾン・システムで情報空間内に入り込んだが、IPアドレスはソルティーノ本部のものに書き換えてある。もしアルトのセキュリティがシンを解析しても、アルトの本部内からアクセスしている事はそう簡単に分からぬはずだ。

そして、警備員達はセイたちがひきつけている。

倉庫でユニゾン・システムと繋がれたシンの生体が見つかる前にセキュリティを突破し、聖譚曲オラトリオのある中枢部に入り込まねばならぬい。

「んー……」そこから2枚防御壁を破つたら研究員のイントラネットに入れれるな

空中にぼんやりと光文字の浮かぶパネルを浮かべ、ポケットに手を入れ、のらりくらりと歩いて行く。

その斜め後ろを歩くミリアナは黙りこくっている。

「しけた顔してんじゃねーよ、お前がこうしたいって言つたんだろーが」

シンはどこからか煙草を取り出して火をつけた。

その瞬間、ミリアナの眉が跳ね上がる。

「この非常識！ 情報空間内で煙草を吸わないでよつ！」

「いいじゃねえか、ちよつとくらい情報書き換えたつて

「それが非常識だつて言つたの！」

タバコを吸う、という行為はかなり複雑だ。まず情報体の煙草を作り出し、吸つて火を付けるという動作をまず行わせなければならない。特に「煙草」という情報体と、現実とフィードバックでつながる生体との相互の働きを再現せねばならないのが非常に厄介だ。

さりに煙草の煙に含まれる成分の値を体内で上昇させるなどして、
様々に情報を流しこみ、書き換えるねばならない。

それを何でもない事のようにあつさつとやつてのける能力を非常
識だと称したのだ。

これは補足だが、コウガワイヤーを操作したり、セイが銃を扱う
場合、それは一種の型として既に情報体にプログラムされているた
め、毎回自ら書き換えるという作業は必要ない。

他にも、コニゾン・システムに付随している生体外の情報体とし
ては、衣服のプログラムやコンタクトレンズ、メガネ等の付随品が
ある。

しかし、煙草は違う　　要するにシンはこの場で「たばこを吸う
といつプログラムを一瞬で構築した事になる。

「……非常識男」

最後にもう一度ぼそり、と咳いたミリアナの言葉は完全に無視さ
れ、代わりにシンは深淵の闇に目を凝らした。
気づけば周囲に浮遊していたはずの稼働ソフトはすべて移動して
おり、ミリアナとシンは隔離された状態になつていて
「一枚目の防御壁だ、ミリアナ、解析しろ」

「自分でやりなさいよ…」

「俺はちょっと準備があるんでね。それに、お前の方が解析向きた
らう、奈落多面体？」

周囲に鈍く光るパネルを幾つも浮かび上がらせたシンは、蒼い瞳
をミリアナに向けた。

が、ミリアナはぴしゃりと言い放った。

「その名を呼ばないでつて言つたはずよ」

ミリアナは薄いレンズの眼鏡をはずすと、それを両手にはさんで
ぱん、と潰した。

そしてふつと開いた両手の隙間からは、光の粒が溢れ出した。

青白い機械的な色をしたその粒は、彼女の手を離れ空間内に広が
つていく。

「何か変なメガネかけると思つたら、お前、ワームをそこに隠してたのか」

「ええ、こうしないとアルトどころかソルディーノのセキュリティに引っかかるもの」

「俺が作った網を通り抜けたって事は新しい圧縮方法か？」

「そうよ。あたしが ミリアナ＝アルト＝ヴェルジネの情報を持つバックアップがアルトパルランテのサーバーの網を通り抜ける事が出来たのもそのためよ」

「やるな、ミリアナ」

「非常識に言われたくないわ」

再びぴしゃりとシンを言い含め、ミリアナは目を閉じた。

今飛ばした蒼い光は、情報空間内に存在するものを解析し、ミリアナの元へ帰結する。

「この周辺からソフトを遠ざけてあるわ……あたしたちの存在には既に気づいているようね。コントロールは中枢部に集まつてゐる。おそらく今はハルカが一手に引き受けているはずよ。あいつ、自分一人で何でもできると思つてる自信家だから」

「自信家ねえ」

シンは煙草を咥えたまま唇の端を上げた。

「あと、こここのセキュリティは追尾型ね。速度と攻撃力を武器に獲物を消去するまで追いかけるタイプよ」

「それだけか？」

「あとは網が2枚張つてあるけど、あれはあたしがやるわ。シンは追尾型の方をお願い」

戻ってきた光の粒を両手で包みこみ、ミリアナは目を開けた。

すでにシンの周囲は凄まじい速度で文字が流れしていく数十枚の光のパネルが取り巻いているのだが、次々現れるパネルのすべてに目を通し、まるで著名なピアニストを思わせるタッチパネルの操作で一つ一つをクリアしていく。

その横顔はパネルの光に浮かび上がり、闇の中で蒼い瞳は恐ろし

いほど澄み切つていた。

ぞつとした。

蒼穹の幽鬼

ふつと、ミリアナの頭を現役時代のシンの通り名が過ぎる。

「その自信家とやら、腕は確かだろうな？」

「少なくとも赴任してからこれまで、あなた以外の侵入を許してないわ。間違いなくアルトで一番、いえ、世界トップクラスよ」

「……この年で挑戦者とは燃えるねえ」

「この年で、というシンはまだ26歳。とても老人を名乗る年ではない。

最も、能力段階式の教育制度で2期生に当たるシンは、この業界では平均年齢をあげる方なのがだ。

「追尾型……ああ、腕はともかく洒落てんな、」

「ええ、よく分からぬこだわりは多いわね」

ミリアナとシンの目の前には、光ない情報体が立ち塞がっていた。以前セイとコウが遭遇した正方形のものとは全く異なる、追尾型床から情報を受け取らずとも自ら侵入者を認識し、追尾・撃破するオートセキュリティ。

その闇は明らかに背景の黒とは性質が違う。

錯視で浮かび上がる画像のよつに、同じ色の闇のなかにくつきりと浮かび上がっていた。

異様なのはその形。

「ゼロ」と「イチ」で表わされる空間で、はつきりとした生き物の形をとつていた。

「これ、犬か？」

「たぶん狼よ、シン

大きく開かれた口の中だけが真っ赤に塗りたくられていた。涎でも垂れてきそうな口にはびつしりと鋭い歯が並んでいる。走る事に長けた四肢の爪をしっかりと床に張り付け、巨大な駆除狼が一人を見下ろしていた。

シンは周囲のパネルをほとんど消し、代わりに先ほどのミリアナが使ったような青い光の粒を一つ、指先に止ませた。

目の前には真っ赤な口を開けた駆除狼。セキュリティ・ウルフ

追尾型のセキュリティであるならば、形を整える必要はない。触れば情報体を分解する、という特性を持つために、形はどのようなものでも効果は同じなのだから。

「最初に言つておくれど、あの牙と口は洒落で付けてあるだけで全身武器だから」

ミリアナが後ろから声をかける。

振り向くどころか返答もせずに、シンは指先を駆除狼に向ける。セキュリティ・ウルフ

それだけで、青い光の粒を駆除狼の口の中に放り込んだ。

その光はなす術もなくセキュリティ 内部に取り込まれていく。

そして、それを契機に追尾型駆除狼がシンに突進した。

ところが。

まるでシンとミリアナを包む見えない壁があるかのようにそのまま前でぴたりと停止した。

いや、四肢は前に進もうと疑似的な床に引っかけ、もがいている。それどころか、前足をその壁に叩きつけているように見える。

ちょうど二人を包むドーム型に防御壁^{セキュリティ・ウルフ}が張り巡らせてあった。

「さっきから準備してたのはこれだつたのね」

「ああ、即席にしちゃかなり丈夫だぜ？」

頭上で奮闘する狼型のセキュリティをのんびりと見あげ、シンは再び周囲にパネルを浮かべた。

「あともう一個、作つてたんだよな。そつちも起動するか

「……楽しそうね」

「理論を実践で試せる機会なんてそうないぜ？ お前も今のうちこいついろ試しとけよ」

それを聞いてミリアナはため息をついた。

どこまで行つても科学者は科学者。頭の中で構築した理論を試さずにはいられない人種なのだ。無論シンだけではなくミリアナも、この先に待つ金髪碧眼の同僚も。

「相手にとつて不足はねえつと言いたいところだが、残念ながらこいつじや役者不足だな」

情報空間に音が存在したなら大きな唸りを上げ、がりがりと爪を立てる音が響いていただろう。

そして、全身を何度も防御壁に叩きつける駆除狼は、徐々に防御壁を侵食しつつあつた。

ぐにゃり、と空間が歪み、ゆっくりと防御の天井が下がつてくる。最も、外枠とはいえアルトのセキュリティをこれだけの時間押し留めていた強度を賞賛すべきだが。

「あれに触つたら、さすがにひとたまりもないわよ?」

「んー? ま、見てなつて。発動まであと12秒だから。10、9、8……」

楽しそうにカウントダウンを始めたシン。

セキュリティ・ウルフ

駆除狼の爪がとうとう防御壁を切り裂いた。

漆黒の塊がシンとミリアナの頭上に降つてくる。

「2、1……ゼロ!」

が、シンのカウントの方が早かつた。

何の音もなく、目の前の漆黒の塊は一瞬にして霧散した。代わりに目の前に広がつたのは、青い光の粒。

無数に増殖したそれは、セキュリティ内部から弾けるように飛び散つた。

「はい、完了」

ぽん、とパネルを閉じたシンは振り向いた。

跡形もなく消え去つてしまつた駆除狼の残滓を見つめながら、ミリアナは愛らしく首を傾げる。

「ワームの一種だったのかしら? セキュリティを分解したように

見えたけれど

「いや、どっちかというとウイルスだ。サイバー・ショック情報危機の時のウイルスを参考にして作った逆転写・アポート・システムみたいなもんで、ずいぶん前に考えてあつたんだが、なかなか使う機会が」「何ですって？！」

ミリアナの眉が跳ね上がった。

「あなた、あの『冥界』をいじくったの？！ 馬鹿じゃないの？！ また広がつたらどうするつもりだつたの？！」

「何を今さら……迷子係にやつた武器だつてベースは同じだぜ？ かなり機能を限定したからユーナンの情報体には効かねえが」「そう言う問題じゃないわよ！ バカ！」

ミリアナの剣幕に肩を竦めたシンは、新しい煙草に火をつけた。

「あのウイルスがどれだけの人間を殺したと思つてるの？！ フィードバックで亡くなつた人間がどれだけいたと思つてるの？！ 本当に世界を滅亡させる力を持つたウイルスなのよ……自覚しなさい！」

「自覚したから使ってんだろうか」

「何を言つてるの、手に余る力を無暗に使うなんて、それじゃ聖譚オラト曲リオを完成させようとしているクライと同じよ」

「俺はあいつとは違う」

シンの声が一段低くなつた。

その豹変にミリアナは口を噤む。

「俺は全部分かつてやつてる。もちろん、武器を与えたあいつらも分かつてる。ジニアすら自分の持つ武器を理解した。自分が持つているモノが何なのか、どういう危険があるのか、もしそれが暴走した場合どう対処するのか 何を捨てても避けるべき事態も」

煙草の煙を吐き出し、シンは青い瞳で真つ直ぐにミリアナを見た。「あいつは分かつてねえよ。自分の創つてるモノが世界を崩壊させる可能性をもつって事が、全く分かつてねえ」

原子具現化がいつたいどれほどの可能性を持つのか。

それは「魔法」だ。ファンタジー世界が実現するという事なのだ。何もない場所から「何か」を生み出す技術。工ネルギー条件さえ満たせばとうの昔に枯渇した石油を創りだす事も、核をその場に生みだす事も、それこそ魔法のように岩や水を具現化する事さえ可能だ。

「突飛な話、材料さえ整えば地球をもう一つ作りだす事も可能になる技術なのだ。

「まだいい面しか見ちゃいねえ。分明つてのは確かに偉大だ。だがな、表があれば裏がある事を絶対に忘れちゃいけねーんだよ」

シンはそこまで言つと、セキュリティが消失しましたもとの暗闇の世界に戻つた情報空間内を歩きだした。

「だから、まだ早い。あれは今の人間が持つには大き過ぎる力だ

「 本当なら、もっと早くに止めるべきだったのだ……シンは苦々しい思いで前を見据えた。

「 ちょうど迷子トロール」が次々にウイルスによつて消滅していくという現象が情報空間内を埋め尽くしていた頃 10年前。

とうとう、生体と繋がれた情報体にウイルスが感染した。

そのウイルスの名は「冥界インフェル」 逆転写コードと壞死アボトシスプログラムを持ち、驚異の感染力を持つた破壊的なものだつた。

ユニゾン・システムで情報空間に入り込んだ情報体が突如消失し始めた。

その感染速度は想像を絶し、ほんの10日間で全世界のネットワークを覆いつくした。

ユニゾン状態でそのウイルスに感染すれば、現実世界の生体にも

影響が出る。それも、消滅が唐突過ぎるために約30パーセントの確率で現実世界の生体がショック死を起こすのだった。

世界中が突然死した遺体で溢れ返った。

特に情報空間内に本社を持つ組織や政府も多く、労働者や要人から順に命を落としていくという最悪の事態。

収集しようにも政界の重役は既に故人、しかもネットワークが使えない事で情報が滞り、被害はさらに拡大していった。

そんな中で比較的被害の少なかつた南半球の国々はいち早く対策班を立て、何より先に情報空間を完全に遮断した。

情報危機 サイバーショック

情報空間を閉ざした混乱の事を俗にそう呼んでいる。

もちろん遮断したからと書いてすべてが解決するわけではない。何より緊急を要したために情報空間から全員が退避し終わる前に切り離しが行われてしまったため、さらに被害者の数は増えていった。

情報空間にいた20から60歳までの被害が特に多く、情報大国とも呼ばれた先進国では子供と老人の割合が激増、社会のバランスは一気に崩れ、ネットワークの遮断による食糧供給不足、交通麻痺などの二次災害が勃発。

情報危機から向こう2年間は世界が地獄と化した。 サイバーショック インフェルノ

世界政府が設立されたのは、情報危機からわずか半年の事だ。崩壊した国家を撤廃し、大陸をいくつかのブロックに分けて支部を設置、事態の收拾に乗り出した。

最初の2年でライフラインを。そして、次に行つたのは教育機関

の設置だった。

特に被害の大きい先進国での生き残りは子供達を中心だ。まずはそれを救わねば未来がない、といつ当時の世界政府総帥プレトリアの思想を反映したものだった。

セイたちの所属する極東地域は特に被害が大きく、廃墟と化していたためにテストケースとして最も早く教育機関が取り入れられた場所だ。

とはいって、10年が過ぎた今も澱みは多く、未だソルディーノの
ような閉ざされた情報空間、「タチエット虚構」の整理をする事後処理機関や、
秩序を少しずつ是正していく世界政府直属の警備隊などがいそがしく働きまわっている。

コウ達の年代では情報危機サイバーショックによる孤児が非常に多かつたのだが、
世界政府の働きで保護・教育され、今では事後処理機関など特殊な
部門で働く主要世代になった。

シンは情報危機の際、すでにアルトパルランテの研究員だった。
あの時の混乱は今となつても忘れ得るものではなく脳裏にはつき
りと焼き付いている。

同僚も失った。家族も混乱で行方不明になつた。そして恋人も
腐臭漂う大量のユニゾン・システムが廃棄されて行く光景は目を
閉じれば昨日の事のように思い起こされる。

もう、あんな悲劇を見たくはない。

聖譚曲オラトリオが完成すれば、再び世界が『そう』なつてしまふ可能性が
非常に高い。

「行くぞ、ミリアナ。一枚目の防衛壁ファイアウォールだ」

さらにアルトパルランテの中核部に向かつて進む一人の前に、ふつと現れた影があった。

前髪をヘアゴムで括つて額を出し、よれよれのジーンズにTシャツを着ただけの不機嫌そうな青年だ。歳は20歳前後と思われるが、鼻の辺りに散つているそばかすが彼を年齢より幼く見せていた。

「あらハルカ。ここまで来たのね、珍しい」

ミリアナがその青年を見て肩をすくめて見せる。

憮然とした表情の青年はハルカ＝リュウジンの情報体。アルトのセキュリティ部門を一手に引き受ける元ハッカー。

「顔、見たかったんだよ。俺様のウルフがあつさりやられたからさあ、ちょっと気になつてえ。しかもさあ、何度かハッキングしたの、アンタでしょお？」

だらしなく語尾を伸ばす口調はひどく不快だつた。

「ついでに面倒だけど、俺様が相手するかなあと思つてさあ。だつて、既存のセキュリティじや不安だしい」

そう言いながらも、先ほどのシンと同じようにパネルを次々に起動させる。

「チャンピオン直々に出迎えてくれるとは、嬉しい限りだ。こつちから行く手間が省けたつづーもんだぜ」

シンは加えていた煙草を足元に落とし、スニーカーで火を消した。この非常識！と叫びかけたミリアナはぐつと堪えてハルカを睨む。

「

「通して、ハルカ。あたし、クライの所に行きたいの」

「ずいぶん若くなつたんだねえ、ミリアナさん。その姿ならあ、俺様あちよつと惚れちゃうかもお」

「やめて頂戴、気色悪い」

「うわあ、ひどいねえ」

ようやくへらつとした笑みを見せたハルカだが、すぐに表情を引き締めた。

「ミリアナ、お前邪魔だからとばっちり食わないよう防衛かけて後ろに下がつてろ。さっきの防衛プログラム貸してやるよ。適当に強化と修復して使ってくれ」

「……ありがと」

文句を言いたいのはやまやまだつたが、ハルカとの対決はおそらく情報の解析と構築の早さの勝負になる。

いかに早く相手の防御を崩して情報体を破壊するか。

ミリアナとてそう言ったモノの知識がないわけではない。むしろ、情報を生体化するという聖譚曲計画^{オラトリオ}に携わっていたのだ、プログラムの構築、破壊などという分野の肩書きを有するのはもちろん、ワームを持ったままセキュリティを突破できるような高性能の圧縮プログラムを自ら開発する程度には長けている。

しかし、速度となるとまた別問題である。

それは反射神経と理解力、解析力と言った疑似神経内を走る電子信号の速度、ひいては生体そのものの性能に関わる問題だからだ。

そう言つ意味でシンは天才だった。

むろん元A級ハッカーであるハルカとてかなりの能力を有しているだろう。

しかし、シンのそれは桁違いだ。それこそ、宇宙のどこにあるというアカシックレコードすらも読めるのではないかと思えるほどに。

ミリアナは大人しくシンが即席で作成した防衛プログラムを受け取り、後ろに下がつた。

すでに戦いは始まっている。

睨みあう二つの情報体の周囲を無数のパネルが取り巻いていた。

ミリアナが防御壁に包まれた事を確認したシンは、先ほど駆除狼^{セキュリティ・ウルフ}に使用したウイルスをまず増産した。

もちろん、一度使つてしまつたウイルスがハルカ相手に効くとは思つていない。

が、もしハルカが先ほどのように生物を模したセキュリティプログラムを得意とするならば、ウイルスの情報を少し書き換えるだけでそれぞれに有効な兵器となるだろう。

肉食獣が倒れる時、それは飢餓か病氣だ。

巨大な強きモノを相手にする時は、微小なもので対抗してやればいい。

「さあて、どれを試してみるかな……」

この台詞を言う間に、シンの脳内を数十通りの理論が駆け巡る。ちらりとハルカのパネルが出現・消失する規則性を見て、ウイルス・ワーム系はないと判断し、生物体を模した追尾型、もしくは全方位照射の無差別、そして空間圧縮型の大技を準備していると読んだ。

追尾型をウイルスで相殺、全方位照射は先ほどの防衛で防げるだろう。

シンはそこまでを一瞬で考えてから、空間圧縮に対応する膨張プログラムを組み始めた。

それと併行してあるプログラムを描く。

「前から使ってみたかったんだよな、これ」

嬉しそうに口元に笑みを浮かべ、シンは周囲に何重もの防衛壁を張り巡らせた。

増産したウイルスを重ねた防衛壁の間に仕込んでおき、さらに打ち出し型のウイルス弾を作る。

「もう攻撃しちゃつていいかなあ？」

ハルカがシンに問う。

「あとさあ、音声オンにしない？ 僕様やつぱ臨場感が欲しいんだ

よねえ」

「仕方ねえな、でも俺もどつちかつーと音有りのがいい

「んじやあ決まりだねえ」

一人は同時に音声の回路を開いた。

「この回路だけは不可侵でえ、先に情報体を潰した方が勝ちつて事でえ、いい？」

「いいも何も、お前がそうしたいならそうしろよ」

「ええー、だつてこれゲームじやん？ ゲームにはルールが必要じやんよお」

「ま、好きにしろ」

シンはぽん、と最後のパネルを叩いて、すべてのプログラム構築を終了した。

「んじゃあ、やるよお」

ハルカはそう言ってプログラムをいくつか起動した。

シンの見立て通り、ハルカを取り巻くように現れたのは生物型の追尾型セキュリティだつた。触れた人間の情報体など一瞬で消し去つてしまふ巨大な兵器だ。情報空間内では食物連鎖の頂点に立つと見なしていい。

それぞれ、古代東アジアで崇められていた竜、虎、鷹、蛇をモチーフにしているのだが。

「トカゲ？ と、猫と鳥と……紐、か？ 妙な取り合わせだな」

隣にミリアナがいたら問答無用で頭を叩かれたろう。距離を置いていたのは幸いだ。

当初の予定通り、向かつてきた駆除生物にウイルス弾を撃ち込む。もちろん、その間にも既に次のプログラムの構築を始めていた。対ウイルスのプログラム、逃走経路を絶つための壁、最後に攻撃用の自己破壊プログラムを設定する。

そして、試そうと思っていた増殖プログラムが完成した。

緑の光を放つ小さな植物種の形状をしたその新しいプログラムを指先に弄び、シンはハルカをちらりと見る。

「音声回路から送れば一瞬なんだが……しかたねえ、あいつのルルに従つてやるか」

その時、どおん、と大きな音がして防御壁に凄まじい衝撃が降つ

てきた。

ハルカの駆除生物だ。

以前使つたものである、といつ事を考慮すると、先ほど撃ち込んだウイルスが発動するかは五分五分といったところだろう。

防御壁が破れれば、さらに多くのウイルスが発動するはずだから、おそらく2体、うまくいけば3体は消えるはずだ。

「あいつの前に圧縮を発動するか……？」いや、ここはむしろ

シンはプログラムを決定し、防御壁を何枚か取り払つた。

駆除生物が防御壁を破壊するまで数秒、その瞬間に抜け目ないハルカは全方位攻撃を加える筈だ。その瞬間にプログラム鏡を発動すればいい。

もしハルカが発動するのが圧縮の方ならば膨張を起動させればいい。

「もう破れるぜえ？ 侵入者さんよお、さつき俺様の大事なウルフを倒したと思ったのは気のせいだつたかあ？」

ハルカはにやにやと笑つた。

が、シンは冷静に手の中に握つた緑の種を、触れた部分を破壊する情報破壊プログラムと共に銃弾に仕込んだ。空中からセイのモノと同じ拳銃が出現する。

それを右手で握つたシンは、銃口をゆっくりとハルカに向けた。

「なんだあ？ その古臭い武器はあ」

シンはまた新しい煙草に火を付けた。

その瞬間、凄まじい轟音と共に最後の防御壁が敗れた。

唯一残つていた鳥型のセキユリティが迫る。

が、シンは慌てずプログラム鏡を発動した。

がぎいん、と重い金属音を響かせて跳ね返される駆除生物の漆黒の体。

「うえ？ 何だ今のあ？」

ハルカは不可思議なモノを見るような目でシンを睨んだ。

無理もない。このプログラム鏡は完全にシンのオリジナル、しか

も実践するのは今回が初めてだつたからだ。

背後からこの非常識、と聞こえた気がしたが無視した。

駆除生物をすべて破壊されたハルカは案の定、全方位からの漆黒の刃を降らせてきた。

もちろんその刃はプログラム鏡に余す事無く跳ね返され、打ち出
し本人大きなハレカニ向かって斬り狂った。

その間にシンはミラーを解除。膨張プログラムをセットした。

用意していた防衛壁で何とか自分自身の攻撃を防ぎ切ったノルカは、ぎろりとシンを睨みつける。

打ち出した。

膨張プログラムと相殺し、圧縮プログラムは発動しなかつた。

じいん と静まり返った空間

いた。

＊＊＊＊＊

いつの間にか目の前に立っていた敵の姿を確認し、ハルカは喉の奥から絞り出すような声を辛うじて漏らした。

たて

逃走経路はとつぐに塞いである。諦めろ」「シンの蒼い瞳が冷酷に見下ろしていた。

「『こ』のまま破壊されたいか、それとも大人しく負けを認めるか、どうする？」

ユニゾンを切ろうとしたが無理だった。完全に押さえられている。気がつけば新たなプログラムを発動できないよう、情報体がロックされている。

いつの間に。

「強けりやいいつてもんじゃねえ。情報戦は、先を読んだ方が勝ちだ」

そうして唇の端をあげたシンは、余裕だった。

まさか、最初から読んでいたというのだろうか。全方位攻撃どころか、とどめに組んであつた圧縮プログラムさえも。そして逃走しようとする事も……

ハルカは、絶対的な敗北を感じた 格が、違う。

この人間と自分とでは、圧倒的な力の差がある。これ以上の抵抗は無意味だ。

「もうちつとは粘るかと思つたんだが、最後に焦つたな。おかげで俺の方の最終兵器は使わざじまいだ」

銃口を逸らさずにシンはそう言い放つた。

いま、この情報体を破壊されたら生体がどうなるか分からぬ。ここは降参するしかないだろつ。

しかも、敵はまだ最終兵器をとつてある。おそらく、この銃の自身が今回の最終兵器なのだろうが、いつたいこの男は『こ』の中に何を詰めたんだろ？ 純粹な好奇心で知りたかった。

「ミリアナ、こいつ圧縮してけ」

「あなたさつきから我儘じゃない？！」

組織を裏切つてバックアップを外に流したミリアナ 彼女は、この男に助けを求めるために逃げたのだ。

「だいたい、何が起きたのかさっぱりよ！ ウイルスもほとんど使つてないみたいだし……」

ぶつぶつ言いながらも圧縮をかけ始めるミリアナの言葉を聞き、

ハルカは驚愕する。

「あんたさあ……」の上にウイルスまで使うわけえ？」

「ん？ ああ、俺はもともとワームだのウイルスだの、ちつせえ奴を使う方が専門だからな」

当たり前のように言つたシンを見て、心の底から感服する。だめだ、絶対に勝てねえや。

「この非常識男に負けたからって気にしない方がいいわよ。こんな

のイレギュラー中のイレギュラーなんだから」

自分に対するフォローなのかシンに対するイヤミなのか判別できないミリアナの台詞を受け止めて、ハルカはため息をついた。

悔しい、という氣すら起こらない。

足搔いてもどうしようもなかつたのだ。

「おい、お前、ハルカ」

「……何だあ？」

シンの声にふつと見あげると、彼は持つていた銃を「」とリとハルカの前に置いた。

「このプログラムを今回試せなかつたのが心残りだ。アルトに誰か侵入してきた時にでも使って、試してくれ」

怪訝な顔をしたハルカを無視し、ミリアナが圧縮をかけ終える。ここで情報体を縛つておけば、ユニゾン・システムの方を操作しない限り生体も情報体も動けないはずだ。

ぐつたりと床に倒れ伏したハルカを確認してから、二人はさらに奥、クライの待つ中枢に向かつて行つた。

もう何人倒したか分からない。

押し寄せる波のような雑兵を切つて捨て、撃ち抜き、吹き飛ばし
……既に足をつく場所もないほどに人間が転がっている。

さすがに息を切らしたセイは、飛びかかってきた警備員を横からの蹴りではり倒した。

「弾切れだつ！ 後は頼むぜ、コウ！」

銃をホルスターに戻し、セイは代わりに皮製のグローブを装着した。

セイの武器は銃だけではない。

その身体能力を生かした格闘も非常に得意だ。

両側から突進してくる警備員を飛び上がって避け、空中から踏みつけるように倒した。

「本当にキミはいつも無茶ばかり……言いますねつ」

すでに返り血で顔も服も真っ赤に染まっているコウが叫ぶ。

「コウの方もワイヤーがかなり劣化してきてる。切れ味がかなり悪く、付着した血液が固まってしまい、動きも悪い。何より、目に見えるようになってしまっては、武器の威力が半減だ。

もちろんコウも格闘に関して達人レベルだが、このままではキリがない。

シンと合流するポイントBはもう見えているのだ。数メートル先の有機硝子の向こうに見えている3階下のホールを抜け、正面の扉をすでにカラムから聞いている暗証コードで開けばいい。

本来ならエレベーターへたどり着き、下に降りる予定だったが、この際仕方がないだろう。

このまま雑兵を打ち取つていても仕方がない。

「ジニア、エネルギー残量はどのくらいありますか

ひらりひらりと舞う人形の耳元にそつと囁くと、黒の人形は聞こ

えるかどうかという小さな声で返答した。

「…………あの窓を破るくらいならまだ余裕。その後は…………3人支えるのは、エネルギーに閑わらず無理」

「ボクが道を拓きます。後ろは任せますよ、セイ」
無茶言つな！ というセイの叫びを完全に無視して、コウは周囲に張り巡らせていたワイヤーをいつたんすべて収納した。

「離れないでください」

ジニアを背に庇い、古武術の「空手」の構えをとつたコウは、一足で敵の間合いに踏み込んだ。

逃げる暇を与えず、頭と体のプロテクタの隙間に拳を叩きこむ。ぐえつと蛙が潰れるような声を出し、警備員は後ろに倒れた。間髪入れず隣の男の側頭部に横から薙ぎ払うような踵打を叩き込んだ。グラリ、と傾いた体を踏み台に、向こう3人を連續で仕留める。

細身の外見に似合はず、コウの攻撃は非常に鋭く、重い。
どうすれば相手にダメージを与えるかということが本能的に分かっているからだ。拳に力を込める一瞬、インパクトの瞬間、当てる位置、角度、そしてタイミング。

明らかに体格のいい敵には渾身の当て身を食らわせ、体勢が崩れたところを掌底で沈めた。

そうやって作り上げた道を小柄なジニアが駆ける。

後ろを守るのはセイで、こちらは流れるような動きで次々相手を投げていった。

「…………ジニア」

十分に窓まで近づいた時、コウは後ろの少女の名を呼んだ。

こくりと頷いたジニアが向かつて駆けてくる。

両手を前で組んで腰を落とし、それを踏み台にしたジニアを思いきり窓に向かつて投げつけた。

閉じた傘を構えたジニアはそのまま窓に向かつて突っ込んでいく。

そして、その場の全員があっけにとられている隙にコウとセイは

警備員を踏み台に、まるで飛び石をするようにジニアを追う。

黒天鷲毯の傘が重力波を発生させ、周囲に耳を圧迫する余波が派

生した。

うねる様に硝子が鳴動し、そこへ傘を開いたジニアが身を縮こめて飛び込む。

続いてセイとコウが窓の外へ身を躍らせた。

ジニアは重力波の発生装置を使い、ふわりと空中に浮いた。

その足元で、轟音をあげて人間達が床に叩きつけられた。

潰れる音、碎ける音、飛び散る音、破裂する音

それから一瞬遅れて、粉々の硝子が降り注いで、紺色の中に綺羅らかなスパンコールを作りだした。

その場所を避けて少し離れた場所に着地すると、後ろから聞き慣れた言い合いが追いかけてきた。

「いつてーつ！ 高いだろ！ 明らかに飛び降りる高さじやねえだろ！」

「そのくらい予測してください。見取り図は一度覚えたはずです

「忘れたって言つただろ！」

「知りませんよ、キミの事情なんて」

落下した警備員の間を縫うようにして迷子係が顔を出した。

一緒に落ちた他の人間をクッショönに使つたらしいが、さすがにコウは足を引きずり、セイは左腕を押させていた。

吹き抜けになつたこの広いホールの中央に位置する扉からのみ、
聖譚曲オラトリオのある部屋に入る事が出来る。ここは研究者たちが議論を交わす場でもあるらしい、円形のテーブルを囲むように椅子が配置してある。

部屋自体も円形で、聖譚曲オラトリオへと続く扉のある中央の柱も円を描き、外側の壁とドーナツのように平行な空間を描いていた。

ふつと見上げると、警備員が粉碎した壁の辺りで押し合へてしまっているのが見えた。

あの場所から銃で狙われたら少しまずい。

はやくここを離れて

「どうどうここまで辿り着きましたか……こちらは1000人以上の警備員を配置したというのに、戦闘員が3人だなんて、馬鹿げています」

きつぱりとした女性の声が響いた。

「ウとセイが睨む先。

「上の者達はもう下がりなさい、田ざわりです」

大人しいチェックのスカートとベージュブラウンのブラウス。瞼脂色のタイが目を引くその女性は、その洋装と似合わぬ艶やかな黒髪を結いあげていた。

きりりとした目元に気の強さがにじみ出ている。

「セイ、問題を出しましよう……彼女の名前は、何ですか？」

上階から銃口が向けられ、さらに逃げ道に敵が経っているという状況で、それでも「ウは慌てていなかつた。

それはセイも全く同じで、慄然とした表情を作つて相方に叫んだ。
「馬鹿にすんなっ！ ビアンカ＝アルト＝クラスター、オラトリオ聖譚曲開発者的一人かつクライ＝アルトパルランテの秘書！」

「正解。では、その後ろの御仁は？」

「ジュラ＝アルト＝リアドビス、同じく聖譚曲の開発者、専門は化学で別部門の研究者だつたけど、5年前にクライに引き抜かれてきたんだつけ？」

いつの間にか、女性の背後にスース姿の壮年男性が立つていた。
「よくご存知のこと。それは、どこで知つたのかしら？」

「……」

今度は返答しなかつた。ジニアは一人の奥にある扉を見ていた。
そう、一人が中から出てきた事で扉が開いている。
今ならすぐに侵入できる。

「コウ、行けつ！」

セイの声で弾かれる様に「ウが地を蹴つた。

その瞬間、ホール内が一気に冷え込んだ気がした。

戦闘開始

セイも同時に敵に向かつて間合いを詰めており、ビアンカの攻撃圏内に入り込んでいた。

一步遅れてジニアは、コウを足止めしようとしたジュラに、傘で物理攻撃を仕掛ける。上から叩きつける瞬間、傘が纏っていた重力波のシールドを外すと、傘は本来の重量を取り戻し、凄まじい勢いで振り下ろされる。

おそらくその力を見誤ったのだろう。

右手上段で受け止めたジュラの腕がみしり、と音を立てた。

確実に折れたはずだ。

すぐに重力波を切り替えてふわり、と距離をとる。

その視界の端でコウが今閉まろうとしている扉に滑り込んだのが見えた。

しかし、コウが扉の向こうに消えた途端、頭上から銃弾の嵐が降り注いだ。

ジニアは傘をさしてそれを防ぐが、セイはそもそもない。

狙い撃ちにならないよう部屋の中を一人駆け回った。

「ああああああ！ 何で俺だけ……！」

にしてもジニアが思わず目で追つてしまふほどに身軽である。進路をふさぐテーブルもひょいと飛び越えていく。

が、そこに鋭い女性の声が響いた。

「やめなさい、下手クソ共！」

びりり、と硝子が揺れるほどの衝撃。

見ればビアンカが腰に手をあててきつと上階の銃口を睨みつけていた。

その頬には赤い筋が走っている……おそらく、銃撃のとばっちり

を受けたに違いない。

「この二人は私とジュラで処理します。もういいです。あなた達は破壊された箇所の修理にでも回りなさい！」

沈黙。

どうやらそれは絶対の命令らしく、それ以上銃弾が降つてくる事はなかつた。

ビアンカはポケットからハンカチーフを取り出し、頬の血を拭う。

「これでいいでしょう。貴方の相手は私ですよ……『漆黒の永久灰燼』？」

にこり、と微笑んだビアンカは明らかに怒りを湛えている。

「ボスの邪魔は絶対にさせません」

そんな二人のやり取りを見てから、ジニアは自分の相手に視線を戻した。

寡黙な壯年男性は、少し灰色が混じつた黒髪を綺麗に撫でつけ、精悍な顔立ちにぴつたりとはまつた髭を幾らか頸にたくわえている。名前と顔くらいは知つてている。

先ほどセイが叫んだように、現アルトの元締めクライに数年前に引き抜かれた科学者で、有能な部下らしい、という事は知つていて、最も彼が戦闘に長けているといつのは全く聞いた事がない。

もちろんそれはビアンカにも言える事で、研究者兼秘書である彼女がとても戦闘向きとは思えない。

たとえ少々の心得があろうとも、ジニアには重力波発生装置がある。エネルギーは残り少ないが、たかが人間を一人倒す事など造作もない。

しかも、この人間はすでに手負いだ。

閉じた傘をまっすぐ胸元に向ける。

勝負は一瞬でつくはずだった。

ところが。

「?!」

重力波を発する前に、ジュラの拳が迫ってきた。

予想していなかつた速度に、反射的に傘を開いて防御する。が、衝撃を吸収しきれず、吹つ飛びばされてしまった。

床を転がり、背中からテーブルに激突して息が止まる。

続けて追つてきた一撃目を横に転がるようにしてかわし、さらに追つてくる攻撃を、何とか傘で逸らす。

一瞬の隙をついて空に飛び上った。

重力波を最大値に引き上げ、空中に停止し、息を整えた。

ふと見降ろせば、セイも同じように凄まじい音を立てながらテーブルと椅子に突っ込んだところだった。

同僚を救うため、追撃しようとするジアンカの上に飛び降りる。が、寸での処でかわされた。

とん、と床に足をつき、起き上がってきたセイと並んで二人の敵を睨みつけた。

「あいつら……普通の人間じゃねえぞ。筋力、反射神経、どれをとつても『見かけによらず』なんてレベルじゃねえ」

「…………本当に」

可能性は二つ。

一つ目は何らかの筋力増強剤を使用している場合。しかし、彼らに副作用であるドーパミンの多量放出や急激な発汗、皮膚の紅潮といった症状は見られない。

だとすると、もう一つは

「…………おそらく、聖譚曲は、すでに完成している…………」
ぼつり、ジニアが咳くと、隣のセイはぐつと唇を噛みしめた。もう一つの可能性。

それは、すでに完成した聖譚曲による肉体強化。情報空間内にとりこんだ生体情報を書き換え、もう一度現実世界に具現化する。そうすれば、人間が持ちえないはずの力を手にする事になる。ジニアの小さな声も聞こえていたのだろう。敵方一人は同時に唇の端をあげた。

「さすがシン」オルディナンテの秘蔵つ子ですね、よく教育されて

います」

すべての可能性を考える。あり得ない、などと切り捨てるのは完全に否定する証拠がある場合のみだ　これは、シンの口癖のようなものだった。

聖譚曲は、情報体を生体として具現化する事が出来る。

だとすれば、ユニゾン・システムを組み込んだ場合、もともとの人間をまず情報化してから、その情報を書き換えることで「同じ人間でありながら全く違う人間」を生み出す事が出来るのだ。

目の前にいるビアンカとジュラは、おそらく一度情報空間に完全に取り込まれた後、調整を加えて再び聖譚曲オラトリオによって具現化された二次生命体だ。

「それじゃ、こいつら人間じゃ……ない？」

セイの声が少し震えていた。

ところが、そんなセイを嘲笑うかのようにビアンカが高らかに宣言した。

「私達は人間です」

頬に手を当て、恍惚とした表情でビアンカは言い繋いだ。

「ボスへの忠誠も、研究への情熱も、この手足もすべて私のモノです。何も変わっていません。ただ、ボスを守るための力を手に入れたという点以外は」

間一髪で扉の中に滑り込んだコウは、一息ついてから、目の前の柵の向こうに、見た事もないような巨大な機械がある事に気付いた。心臓が驚撃みにされたようにどくりと脈打つ。おそるおそる柵に近寄つて覗き込んでみる。

目眩がした

自分たちが破壊しようとしているモノの、あまりの大きさ。

まるで、人類が過去に何度も何度も創造を挑戦してきた宇宙船のように、その巨大な物体はコウの視線のはるか下から目の前を通り、さらに見上げるまで続いている。

外装が有機的な何かだという事しか分からない。最下部が大きく広がった極端に先の細い円錐形をしている。その表面は決して滑らかではなく、コードや機器がむき出しになっている部分も多い。所々で起動を示すダイオードの光が点滅し、警告を発するかのように機械音を響かせる部分もあった。

ミリアナに見せてもらった簡易設計図を記憶から呼び覚まし、この上部はほとんどが重力波の発生装置だという事を思い出した。中間部に瘤のように飛び出たのは、人体の素である素粒子の塊^{オラトリオ} 俗にプラズマ、と呼ばれるモノの格納庫。

そして、最下部に広がる裾野の部分が聖譚曲の中核部、生体情報を読み取るユニゾン・システムと、その情報を元に重力波で素粒子を操り、生命体を生みだす核が並んでいるはずだ。

「ウは、迷わず近くのエレベーターに飛び乗り、下を指す。ミリアナの認証コードで聖譚曲中枢部まで降下した。

エレベーターの扉が開き、神に捧げる歌が目の前に押し迫った。上から見下ろした時以上の威圧感に、さすがのコウも一瞬心を奪われる。

それは理屈ではない。生物の根底にある、自分と違う世界に属するモノに対する恐怖が湧き出していくのだ。

鼓動が速い。

「シン？」

そこへ澄んだ声が響く。初めて聞く声 よく通る男性のテノール。

はつと聖譚曲から視線を戻すと、床が一段高くなっている場所に金髪の男性が立っていた。薄いレンズの向こうに、澄みきった碧い瞳。無造作に散らした金の髪が目を惹く。何より、そこには何か人を引き付ける絶対的な空気を感じる。

纏っているのは薄汚れた、とは言わないまでも着込んでいるである白い白衣。

それでもなぜか浮世離れした恐ろしさを感じた。

そう、ちょうど、本気になつたシンを目の前にしたような

「ああ、違うよね。だってシンはちょうど今、帰つたところだし」

帰つた？

その言葉を奇妙に思い眉を寄せると、男性の背後にバチバチ、と火花を散らすモニターが見えた。その中央には大きな穴があいている。

よく見れば男性の握りしめた拳からはぱたりぱたりと血が落ちていた。

彼がモニターを殴りつけて破壊したのは一目瞭然だ。

「君はシンのところの……コウ＝タカハラ『紅緋の消失領域』美しい貌に物騒な笑みを張り付けたこの表情には見覚えがある。」

そう、よく相棒のセイがキレた時に見せる表情だった。

「危険！」

「コウの中の何かが叫ぶ。

「そう、君がシンの『切り札』か。赤い目の迷子係くん」
シンは、最上階の倉庫からコニゾン・システムでアルトパルラン
テの回線に入り込み、この部屋の端末に辿り着いてこのボス ク
ライ＝オメガ＝アルト＝アルトパルランテを説得する手はずになつ
ていた。

察するに、シンはすでにこの部屋の端末まで辿り着いていたのだ
ろう。そして、クライと面会し、聖譚曲を止めるよう、ミリアナと
一人で言い聞かせた。

が、説得に失敗し、逆上したクライがモニターを破壊した。そう
言つ事だ。

と、すればコウのとる行動は一つ。

敵のトップを物理的に拘束、のち、聖譚曲破壊作業に入る。

すきり、と右足が痛む。先ほど無茶なダイブをしたせいだ。

「残念だけど、聖譚曲は破壊できないよ。核兵器でも持つてくるな
ら別だけど……凄まじいエネルギーが詰め込まれているからね、も
し無理に破壊すればこのビル全体が吹つ飛ぶだけじやすまない」
クライの周囲を不可侵のオーラが取り巻いている。

この威圧感を持つ人間に出会ったのは一人目だ。一人目は、自分
を拾つて育てた、現在の上司。

彼には一生勝てる気などしないのだが、ここで敵のボス相手に退
くわけにはいかない。

コウは消失領域（オロ・タブル・イヴィル）を解放した。

この劣化した武器でどこまで戦えるか分からなが。

「そんなことはすべて承知です。でもボクは、それを破壊すると決
めましたから」

破壊を願う道化師、と名乗ったジニアと自分をどこか重ねていた。
これを破壊すれば何かが変わる気がした。

何しろ、これが自分を生み出したかもしれない機械なのだから。少しづつ芽生える感情と固まっていく何か。外れていたモノが

自分の中に戻ってきて補完を始めたような不思議な感覚だつた。

緩慢な動作でクライが破壊されたモニターの横にあるパネルを操作する。

「残念ながら、僕は弱いからラスボスには向かないんだ」

その間に、コウは相手との距離を詰める。

余計な事を考えず、まずはクライを捕えてしまえばいい。

コウは銀線を走らせた。

「でも、動かせる手足は多いんだ。僕は『ボス』で『科学者』だか

ら

不気味な笑み。

コウの手から放たれた血に濡れたワイヤーが彼に届く寸前で、横から漆黒の何かが割り込んできた。

「？！」

思わずワイヤーを引くが、その漆黒を切斷できない。

このまま手にしているのは危険。

そう判断したコウは一本のワイヤーを手放し、距離を置いた。

「現在、僕が持つ『手』は4本、と操る方の手が2本。でも、君には2本しか腕がないようだ」

「……作業用のアームですか」

クライを守るよう頭上から降りてきたのは聖譚曲のよつに巨大な機械を組み立てる時に使う作業用のアームオフトラコだつた。人の手の倍ほどの大さで、不格好なパイプをいくつも繋げたような形状をしていた。

実際にパートを掴む部分以外はむき出しで、動きは滑らかだが関節部の動きが手に取るように分かり、動く度にコードが撓むという簡素なものだつた。

そのうちの1本に、コウのワイヤーが絡みついている。あれをずっと引いていたら機械との力比べになり、負けて指を持つていかれ

ていたかもしれない。

どう考へても、「コウが一番不得手とする相手だった。

ワイヤーの裁断が通用しない、しかも腕力で勝てる筈はない。

「さて、どうしましようか」

アームを無視して操縦者本体に遠距離攻撃が出来るセイの拳銃や、アームさえも碎くジニアの傘があれば簡単だつただろひ。

しかし、ここには一人ともいない。

何通りかの試作を脳内でシミュレーションし、コウは再びワイヤーを纏つた。

「どうするのかな、『消失領域』^{ポータブル・イヴイール}。このままやられてしまつつもりかい？」

アームが迫つてくる。

足の怪我とワイヤーの劣化具合を考えると、チャンスは一度だ。コウは複雑にくねくねとのた打つアームの動きに集中した。

たん、と片足で軽く地を蹴つた。

襲いかかつてくるアームの隙間を縫い、流れのよつな動作でふわりと避ける。指は、まるで綾取りでもするかのように優雅な動きを見せる。

そして、なんのダメージも受けずにアームを通り抜けたコウは、最後に握つていたワイヤーの端をくい、と軽く引いた。

4本のアームがぴたり、と動きを停める。

いつたい、この一瞬で何が起こつたのか、と操縦者^{クリエイ}が目を見張る間にアームは、断末魔の様な甲高い音を発しながら空中分解した。

大きな音を立てながら床にぶちまけられたアームの残骸を見て、

クライは肩を竦めた。

「やれやれ、なんてことだ。僕は君を甘く見過ぎていたようだ……まさか、関節の継ぎ目を狙われるとはね」

「あれだけ狙つてください、と言わんばかりに動いていれば誰でも対処法は分かります」

「細いワイヤーでそこを正確に切断するのは並みの技術じゃないよ。一步間違えば、自分の武器で指を落とすかもしれないんだ」

「ボクはそれほど間抜けではありませんよ」

「コウは最後に残つたワイヤーでクライを縛り上げた。

一つ目のミッション、完了。

シンに報告すべく、破壊されたモニターの隣にあるサブモニターのスイッチを入れた。何度か砂嵐のよつたな横線が入つたが、すぐに画像が安定する。

間をおかず、画面に煙草をくわえた青年の姿が映つた。上司の姿を確認するや、コウは報告を行う。

「クライを拘束しました。これから破壊作業に移ります」

「ああ、了解……セイとジニアはどうした？ 一緒にじゃないのか？」

「ピアンカ、ジュラ両名と戦闘中です。ボクだけが先に内部へ侵入しました」

「ピアンカとジュラ？ あいつら、戦闘力なんぞゼロじゃねえか。なんで瞬殺出来なかつた？」

不思議そうなシンの声に、一抹の不安がよぎる。

その不安を冗長するかのように、縛り上げたクライが乾いた笑い声を上げた。喉の奥から、絞り出すように。

「彼らは生まれ変わつたんだよ、この聖譚曲によつてね」

「何だと？」

モニターの中のシンが眉を寄せ、すぐにはつと目を見開いた。

「まさか、あの一人の情報体を操作したのか？！」

「ああ、そうさ。彼らは力を欲しがつた。だから『えた。強いよ、彼らは前人未到の領域に踏み込んだんだ』

「どういう事だ？」

一瞬、眉を寄せる。

情報体の操作、生まれ変わる、力を手に入れた

「クライ、お前はつくづく救えねやつだな。それだけは、絶対にやつてはいけなかつたんだよ……人体に手を加えることが、どういう事か分かつているのか？！」

途中から激しい怒りをあらわにしたシンは、蒼炎の瞳で縛り上げられたままのクライを睨みつけた。

「もちろん分かつているよ！　これは人類の革変だ。素晴らしい第一歩！　人類はとうとう神に並ぶ英知を手に入れたんだ！」

「バカやろうつ！　情報操作で創つたモノなんざ、人間なんかじゃねえつ！　頭冷やせ、このバカ！」

彼らしくもない激情で罵つたシンは、怒りに肩を震わせていた。それに対し、クライは先ほどのうすら寒い笑みを仮面のように張り付けている。

「人間じやない？　おかしなことを言つね、シン。君だつて『創つた』じやないか。『コードネーム』『ゼロ』　情報体、つまりゼロとイチのみから構成された生命を！　人間ではないと言いながら、それをソルディーノの一員に迎え入れ、人間として扱つてているのはシン、君じやないか！」

クライの言葉に、今度はコウが絶句した。
心臓が抉り取られる感覚が襲う。

創られた生命体。

「聞くなコウ、クライの言つ事に耳を貸すな！」

シンの叫び。

ああ、やはり本当だつたのだ　　思考が麻痺した頭で、コウはぼんやりと思う。

無から作られた生命体「ゼロ」。それは、プロトタイプで偶然創り上げられた「創りモノ」。人間ではない、ただの素粒子情報体。青い顔をしたコウを見て、シンもさらに眉を吊り上げた。

「それ以上余計な事を言つんじやねえ、クライ！」
が、興奮状態のクライはさらに続けた。

「それにこの『ボータブル・イヴイル消失領域』もそうだ……こいつだつて、破壊された

情報体を復元して人間に押し込んだ、いわば人造人間じゃないか！
その瞬間、すべての時が停止した。

呆然となつたコウの思考が、少しづつ回転し始める。

いま、クライはおかしな事を言わなかつたか？

それにこの『消失領域』ポータブル・イヴェイルもそうだ

コウ自身も、ということは、別にもう一人存在するという事だ。
それより何より、クライの話しぶりからすると、まるで「コウとは
別に『ゼロ』が存在するような口ぶりだ。

まさか自分は「ゼロ」ではないのか？

混乱する。情報が錯綜している。

分からぬ。分からぬ。ワカラナイ分からぬワカラナイ

「シン！」

気づけばコウは、腹の底からその名を叫んでいた。

「教えてください」

まるで、助けを求めるかのよう。

「『ゼロ』は、誰ですか？」

ずっとわだかまつっていた心の隅。相棒に負い目を感じてまで隠し

た「ゼロ」の資料。

「コウの紅緋がシンの蒼穹を貫いた。

モニターの中のシンは、一瞬迷つたように見えたが、すぐにコウ
を見つめ返した。

「俺やミリアナ、それにクライが6年前に偶然創りだしてしまった
生命体『ゼロ』は、セイ＝オルディナンテ、お前の相棒だ」

セイが「ゼロ」 ? !

頭を殴られたようなショックだつた。

屈託ない笑みを、拗ねたような表情を思い出す。あれが、創りモノ?

そんなコウの様子を見て、シンは視線を伏せた。クライの押し殺した、喉の奥から絞り出すような笑い声だけが響き渡る。

「では、ボクはいつたい何ですか?」

喉がからからに乾いてうまく声が出ない。

真実を知つたというのに、現実が揺らいでいる。

シンは彼に似合わぬ落ち着いた声で、言葉を選ぶかの様にゆっくりと言葉を紡いだ。

「……覚えているか分からぬが、お前は情報危機で虚構に取り残された迷子だつた。しかも、完膚なきまでに破壊された情報体だ。もしあの時生体に繋がつていれば、欠損が酷過ぎてファイードバックで死に至るほどにな」

耳から入るシンの声が遠い。

手も足も、現実感がない。

「そしてその迷子を解析してみると、辛うじて残つた生体情報から身元が割り出され、情報体を切り離された生体は世界政府直属の病院内で、未だ昏睡状態のまま生きている事が判明した。もちろん、情報体を突然切り離された生体はかなり危険な状態で、そのままにしておけば確実に生命が危うかつた」

何を考えていいのか分からぬ。

こんな感情を有した事がなかつたから、どう対処していいのか分からぬ。

喪失感と安堵を「つちやにしたこの感覚を、人はいつたい何と名

づけるのだろう?

「だが、もしかすると、『情報体を修復して生体と繋げば回復するんじやないか』」

「……当時の俺は直感的にそう思った」

「……それではまず、^{タチエット}虚構に取り残されていたボクの情報体を修復した、と」

心臓の音が耳元で鳴り響く。

「ああ、そうだ。当時、俺は医学を始めたばかりだったもんだから、クライや他の研究員にも助けを求めて俺は、^{タチエット}お前を実験台にしたんだ。これから先きっと問題になるであろう^{タチエット}虚構の迷子と、未だ昏睡を続ける多くの人間を救う手段の一つとして有効なものになるかも知れないと、お前を使って確かめたんだ」

それでも、まるで懺悔のようなシンの言葉は、少しづつ、少しづつコウの中に入り込んで、徐々に彼を落ち着けていった。

「実験は、成功した。ただ、接続とフィードバックの際にいくらか身体に影響があつたがな。お前の赤目と半端な髪の色はその名残だ」言葉にならなかつた。

あまりのショックに脳が考えるという機構を麻痺させていたのもしれない。

自分は「ゼロ」ではなかつた。しかし、別の意味での「創りモノ」であった。

セイ セイは果たして自身が無から創られた事を知つてているのだろうか? セイはだつたらこんな時、いつたいどう笑う?

こんな時だというのに浮かぶのは、なぜか相方の笑顔だった。

「ジニアとダリアもお前と同じように創つた。歳はバラバラだが、フィードバックは同じ時期だ。セイを創る4年前、情報危機からそう経つていなかった。ダリアはすでに10歳を越していたからな、3人の中では当時の事を特異的にかなり覚えているようだつた」

シンの口から「創る」という言葉が出るたびに、胸の辺りがずきずきと痛む。

こんな感情は初めてだ。

「コウだけでなくダリアとジニアもそつやつて修復した体らしい先ほどジニアに覚えた連帯感をほんの少しだけ理解した。彼女もコウと同じ創りモノだったのだ。

「では、セイは……」

「……6年前に俺達は聖譚曲オラトコオのプロトタイプでセイを創った。あの時はまだ理論が完全でなく、ほとんど偶然創ってしまった、というのが正確だ。お前はセイの設計図を見ただろう？もし何かあった時に、と思ってお前にだけ渡しておいた」

シンから受け取ったブルーレイディスク。確かにそこには「ゼロ」と名付けられたファイルが在った。

ゼロとイチだけで構成された設計図。情報のカタマリ。

「何もないところから遺伝子を書くのは難しかった。だから、当時研究員の一人だったマコトの遺伝子をベースにした

「マコト＝アルト＝ビグリッジ、ですね」

コウの声は微かに震えていた。

そのあまりに珍しい反応から、彼がどれほど動搖しているかが知れた。

「ああ、そうだ。マコトは極東の地方語で『誠』という字を書く。それを大陸読みに直せば『セイ』となる」

マコト 誠 セイ

コウの頭の中で何かが繋がっていく。

忘れかけていた記憶が蘇る。初めてセイと出会った時、それはすでにソルディーノの本部が完成していたように思つ。

とても綺麗な人間だと思ったのをよく覚えている。縄のような黒髪も闇を集めて作った漆黒の瞳も、中性的な顔立ちも均整のとれた体型も、今から考えてみれば創られたモノゆえの美しさだったのか。

「セイはそれを知らないんですね」

「ああ。不自然でない程度にいくらか記憶を上書きしてある。創られた時点で10歳の設定だつた。特にコウ、お前は3人の中では最

も情報体の破損がひどかったために記憶系統もまだ安定していないかった。ちょうどいいと思って誤魔化すためにお前らと一緒にしておいたんだ」

本当なら存在しないはずのセイの存在を、サイバーショック情報危機すべてを失つた少年と重ねて存在を誤魔化す為に。

「だが、セイは教育を受けてねえ。肩書き持ち程度に知識はあるがな」

そうだ。セイと一緒に教育を受けた記憶はない。学習機関へ通うのは何時も一人だった気がする。

「あいつは感情が決定的に足りてねえからな。あいつの中には悲しみも恐怖も不安も執着もない。しかも、その感情を學習する事もねえ。いつまで経つてもあいつはあいつだ。どんな経験を経ようともな。たとえ死ぬ事になつてもあいつは笑うだろつよ」

ゼロは自分の方だと思つていた、という言葉を飲み込んで、口くちは唇を引き結んだ。

空虚な心、死に安息を見出す不確定性、願いもなければ怒りも悲しみも絶望さえない口くちの中身は、創りモノと呼ばれるに相応しいものだと思っていたから。

それなのに。

喉の奥から絞り出す乾いた笑いが響く。

「懐かしい、『ゼロ』が完成した時は4人で抱きあつて喜んだね……。それもマコトが壊れて、君が『ゼロ』を連れてアルトを裏切るまでの話だけだ」

楽しそうに口くちを細めたクライは、また喉の奥から絞り出すように笑つた。

笑い続ける昔の同僚を冷やかな口くちつきで睨んだシン。

「セイを創りだしてしまつたからこそ俺とマコトは自分の考えの浅さに気付いたんだ。人間を創りだす事の恐ろしさを」

「恐れるだけでは前進できないよ、シン。時には勇気を持つことも大事だ」

「お前のは勇氣でも何でもない、ただの無知で、無茶だ。危険性は俺やマコトがずっと叫んできたはずだ。今ではミリアナも理解した……なぜ、分からぬ？ 人類が手にするには大き過ぎる力だとう事がなぜ理解できない？」

だんだんと言葉に力が籠ってきたシンは、必死だった。かつての同僚を止めるために自分のすべてをぶつけていた。

そこにいるのはソルティーノのボス、シン＝オルティナンテではなく、シン＝アルト＝オルティナンテという一人の研究者だった。「そんな危険とは比べ物にならないほどの恩恵があるというのに、どうしてシンはいつもそうなのかな。どうしてこの素晴らしい研究を否定するの？」

いつしかコウの掌には握りしめたワイヤーが食い込み、床にぽたりと零を落としていた。

「重傷を負つた患者でも、聖譚曲オラトリオをつかつて情報空間に取り込み、修復をすれば全快だ。治らない病気はないよ！ 正常な状態の情報に書き換えるだけなんだから。壊れたプログラムを修復するみたいにね」

「そうすればどうなる？ 新しい不老不死理論の完成か？ それとも理想郷ユートピアの実現か？ それこそ、情報危機サイバーショックの再来を誘発するだけだ！」

「そんな事はないよ。だつて、この機械さえあれば生体を失つた迷子リルさえ現実世界に生体として蘇る事が出来るんだから！」

「そうやって大量の亡靈で溢れた世界が理想のわけがないだろう！ 生と死が曖昧になり、健康である事の恩恵がなくなり、物を食べずとも生命活動は続く。生きる努力をせずとも生きられるようになつた人間たちの集まりが、どうして文明を存続できる？」

聖譚曲オラトリオが汎用されるようになれば、食物を摂取せずとも生が存続する世界が実現する。生殖せずとも生命は創られ、情報を書き換えるだけで老いる事も死ぬ事もない。もし何かの事故で亡くなつたとしても、バックアップさえあれば何度でも復活できる。

シンの叫びの根底を理解した瞬間、コウの背筋を冷たいものが通り抜けた。

初めて、聖譚曲の恐ろしさを心の底から理解した。

聖譚曲は世界を崩壊させる恐ろしい兵器だ。

その先には、核兵器で地球を破壊しつくすより恐ろしい世界が待つて いる事になる。

「人間が持つには、少なくとも現代においては大き過ぎる力だ。だから、まだ早い。遙か未来に託すべきオーパーツだ」

シンが断言した。

その言葉に、コウは深く納得した。

そして、何が何でもこの任務を遂行しなくてはいけないと思った。何に対しても執着がなく、感情を波立たせる事もなく、ただ淡々と毎日を過ごすだけだったコウの中で「恐怖」が後押しした「必死」。

ただ、怖かつた。恐怖などこれまで感じたことなどなかつたというのに、世界が崩壊するビジョンが明確に映し出された今、酷く怖かつた。

欠落していた心の欠片を拾い上げる。

コウは、そう言った意味で人間だった。

新しい感情を受けて、少しだけ心の形を変えることが出来るという点で。

平行線をたどる口論を続けるシンとクライ。

が、唐突にクライは声のトーンを落とした。

「じゃあ聞くけど、シンはもう一度と『シェリー』に会えなくともいいって言うんだね」

その言葉でシンの眉が跳ね上がった。

「可哀想にまだ眠つたままで、彼女は17歳のまま君だけが年をつしていく。これ以上待たせるの？ 君が年をとつて、死んでも？」

シェリー。

「ウには聞き覚えのないその姫君、どうやらシン君とりて嬉しいものではないらしく。

モニターの中で一瞬にして極寒にまで冷え込んだシンの表情。その唇から、冷たい声が漏れた。

「一度とその名を出すな、クライ。いくら貴様でも許さん」
トーンの低いシンの声から怒りが漏れ出して、口には思わず息を
止めた。

「バカ、もういい。この男を説得する事は不可能だ。聖譚曲を破壊
しろ」

ぶつん、とモーターの電源が落ちた。

シンを一瞬にしてあれほど凍らせるシリーと書いた名が少し引っかかつたが、意思を強く持ち、動き始める。

破壊しなくては。

ウライを近づけの辻に詠う

に入つた。

後ろで彼はずつと何かをぶつぶつと呟いていた。それが非常に恐ろしくもあつたが、恐怖を感じるほど荒廃した未来を想像出来てしまつたコウにとって、作戦決行の方がよほど重要だつた。

まずは聖譜曲の起動

先ほどの会話で聖譚曲が既に完成している事は分かっている。こ

の場合、作戦は「最悪」の場合への対処に移行
しかし、この場合の破壊は最も簡単だった。

まず聖譚曲を起動し、さらに現在では情報としてしか残っていな
オラトリオ

い「プロトタイプ」を聖譚曲の原子具現化機能によって具現化する。オラトロオ聖譚曲プロトタイプは、情報を具現化するだけでなく、物体を完

全に情報空間に取り込む機能を備えている。ユニゾン・システムのような疑似神経を走らせる中途半端なものではなく、取り込んだものを現実世界から消してしまうという文字通りの情報化だ。

その機能を使い、プロトタイプで聖譚曲を情報化、情報空間内に待機するミリアナとシンが情報体と化した聖譚曲を「ゼロ」と「イチ」に分解するという、まるで言葉遊びのような作戦だった。

プロトタイプはエネルギー値の設定に問題があるが、それは具現化の方で、情報化の機能は完成している。また、その大きさは比べるまでもなく聖譚曲オラトリオより非常に小型のものだ 2メートル四方あるらしいが、何階分も天井をぶち抜いて存在する完成版に比べれば非常に小さい。作戦が終了すればセイたち3人が物理的に破壊する事になつていた。

聖譚曲の大部分はエネルギー、つまり重力波の発生装置だ。

あの部分を単純に破壊した場合、その凄まじいエネルギーでこの街一つくらいは吹っ飛んでしまうかもしれない。

だからこそ、重力波を重力波で相殺し、プラズマの発生も最低限に抑える必要があった。そのためのプロトタイプだ。オラトリオ 聖譚曲の破壊オラトリオには聖譚曲を。

また、プロトタイプを具現化するのもそのエネルギーを使いきるという目的も大きい。

時間も人手もなく、また街の人間を避難させるような権限も持たないシンたちに残された唯一の道だつた。

もし聖譯曲が完成してしなかつた場合、その完成度に応じて幾二
もの作戦が練られていたのだが、完成していったのだから、もうそれ
らは意味を為さない。

混乱と恐怖とが過ぎ去り、またいつものように凧いだ心に戻った
コウは、クライの代わりに聖譚曲のメインパネル前に立つ。
オトラリオ

、またいつものように屈いだ心に
オラトリオ
聖譚曲のメインパネル前に立つた。

本来なら一人で操るような機械ではない、とはミリアナの言葉だ。だが、セイビジニアが到着していない今、一人でやるしかなかつた。

最もコウは最初から一人でやる自信があつた　創りモノの頭脳は、新たな知識を吸収していった。もとが器用なコウだ、理屈さえ分かつてしまえばどれほど複雑に入り組んだ仕組みも肌で理解した。シンが英雄ヒーローに仕立て上げようとしているという事実など露知らず、コウは集中して聖譚曲の操作に入った。

その頃、セイビジニアが残されたホールには、静寂が訪れていた。散乱したテーブル、クレーターのように凹んだ壁。

積み上がった椅子の横に、黒髪の少年が倒れ伏していた。

そこから数歩、少年とその敵との間にうずくまっているのは、黒髪の少女だ。

「今までして遂行するような任務ではないはずでしょう？」

膝をついたジニアに冷やかな声をかけたのは、あちこちが破れすっかり汚れてしまつたブラウスを着たビアンカだつた。

その背後にはスーツの上着を脱ぎ、包帯代わりにネクタイをシャツの上から負傷した腕にきつく巻いたジュラが立つていた。もう右腕は動かないだろう、だらりと体の横に下がつてているだけの状態だ。「ボスの邪魔をしないなら、私も引きさがりましよう。命のあるうちに退いた方が身のためですよ」

「…………だめ、この人が絶対に退かないから」

彼女を庇つて地に伏したこの黒髪の迷子係は、頑なに相棒の元へ向かおうとするだろう それこそ、命を賭けて。

ジニアはもうエネルギーの残り少ない傘を杖にして立ちあがつた。もしエネルギーが尽きればこの傘はとてもジニアには持ち上げられない本来の重さに戻つてしまつ。

そうすればジニアに闘う手段はない。

非力な彼女の唯一最強の武器がこのシンのくれた重力波発生装置だ。

これが最後。

ジニアは傘を握る小さな手に力を込めた。

冷たい床の感触から現実に戻ってきた。
体が動かない。

無理に動かそうとする腕と腹に凄まじい痛みが走った。

「……う」

辛うじて声が出る。

それだけで頭を殴られたようなショックが貫く。
床に頬が当たってひんやりとしている。ぼんやりと焦点を合わせた先に、黒が見えた。

何だろう。

もつとはっきり見ようとするといしすつ画像が鮮明さを増した。

「ジ……」「ア」

視界に入ったのが同僚の不協和音係ディッシュだと気付いた時、はっと意識が回復した。

同時に痛みも鮮明になり、思わず顔を顰める。

が、耳に届いた声がそのまま意識に響き渡つた。

「駄目だ。この二人はここで殺す。創りモノを完成させるのは、すべてボスが最初でなくては意味がない」

殺す

その言葉が痛みを越えてはっきりと意識を旋回させた。

だめだ。こんな所で倒れでは。

自分は、コウの元へ行くのだから。

あいつは絶対に辛いなんて言わないから。手伝ってくれなんて、口が裂けても言わないから。

だから、勝手に隣にいる。

体を起こそうとすると支える腕ががくがくと震えた。体が悲鳴を

上げている。

「まだ立ちますか」

ビアンカの冷たい声。

そして、ジユラの淡々としたバリトン。

「何故ヤツらはこれほど弱い少年一人がなぜ倒せなかつたのか」

「……ヤツら?」

荒い息でふらりと立ち上がり、きつとジユラを睨みつける。

「プロの暗殺者だというから雇つたというのに、何の役にも立たなかつたヤツらだ」

「プロ?」

その言葉ではつとした。

セイが無理やり連れ込まれたルバートで大変な目に遭つていた頃、口ウは多人数の敵に襲われていた。

おそらくプロだらうと口ウは言つていたが、いつもなら返り血も浴びずに軽くいなし、撃退する口ウにしては珍しく「殺した」事を全面に主張していた。

要するに、相手が口ウの命を狙つていたという事だ。

「口ウの命を狙う奴は何であるうと叩き潰す。そう誓つていたセイ」とつて、ジユラの言葉は怒りを買つには十分すぎた。

* * * * *

「あつそ、あれは……口ウを襲わせたのは、お前だつたわけ。探す手間省けたわ」

言葉を発するにもふらふらと立つていたセイが、突然はつきりとした言葉を発した事に驚き、ジユラもビアンカも怪訝な顔をした。

「そうだ。警備をかけしかけて殺人の罪を被せたのもボスが創るモノ以外を排除するためだ」

その言葉を聞き、セイは軽く笑う。

「あれもお前だつたのか……『殺られるまえに殺れ』これ、鉄則ね。あと、コウに手を出したのは失敗だつたかもねー」

中性的に整つた顔に恐ろしい笑みを張り付けて、セイは一步、踏み出した。

先ほどまでは違うキレたオーラに、ビアンカは一步、退く。数歩目で立ち止まつたセイはゆっくりとジニアの隣に転がつた傘を拾い上げた。一瞬その重さに負けてよろけたが、すぐに体勢を立て直して左手一本で傘を持ちあげた。

「ごめん、俺、手加減つて苦手なんだよねー」

かなりの重さがあるジニアの傘がぶおん、と部屋の空気を切つた。口の中の血を床に吐き出し、唇を袖で拭つたセイは、傘の先をジユラに向けた。

「覚悟する暇はないぜ?」

ジユラは動かなくなつた右腕を庇うように左手を前に構えた。

「ボスのものでない創りモノは破壊する」

「創りモノ創りモノうるせーよ」

刹那。

轟音と共にジユラが頭から床に叩きつけられた。

「 つ?！」

隣のビアンカが大きく目を見開く。

いつたい何が起きたのか、認識できなかつた。

ただ隣にいたはずのジユラが一瞬視界から消えて、轟音が響いて

「何が創りモノだつて? もつかい言つてみてくれるかな?」
気がつけば、ビアンカの喉元に傘の先がつきつけられていた。耳元に少年の声。

ぞくりとするほどに艶っぽいその声の主は、明らかに黒髪の迷子

係だ。

とても振り向けない。振り向いたら殺られる。

「ついでに教えてくんない？ その『創りモノ』とやらの秘密をさあ

『ごくり、と唾を呑む。

違う。これは、先ほどまでの少年ではない。絶対的に違う何か。

生物としての性能が全く違う、創られた生命体。

現在の聖譚曲が出来る以前に、プロトタイプによつて創られた「ゼロ」。

「俺、早くコウの所に行きたいんだよねー。簡潔に答えてくれる？」

ビアンカは必死で、こくりこくりと頷く。

絶対的ヒエラルキー。

聖譚曲で多少情報を書き換えたところで、ゼロから創られた生命体に勝てはしないのだ。

「コウつてさ、あいつ何者？」

「コウ＝タカハラ、『紅緋の消失領域』……彼は

ビアンカは自分の知る限りの知識をすべて話した。

簡潔に、という彼の意志には反していたが、『永久灰燼の通り名』を持つこの少年はどうやら思つたより気が長いらしい。

コウ＝タカハラの修復に携わつた研究員の名を列挙し終わり、ビアンカはいつたん口を閉ざした。

ところが、話が終わつた途端、大人しく聞いていた彼に動搖が走る。

「迷子？」あいつが迷子だつたつて？ 生体が残つていた？ ジヤ

あ、あいつは人間

途端に先ほどから背後に突きつけられていた鋭い殺氣が消滅する。

「じゃあ、聖譚曲で創られた生命体は何だ？」迷子係は、創つたつ

て……ゼロから創られたって言ったのは……」

ビアンカは確信する。

これはただの迷子係だ。先ほどまでの「ゼロ」ではない。

それも自分の出生を知らず、動搖しているただの16歳の少年だ

6歳かもしれないが。

「あなたは何も知らないのですね、セイ＝オル＝ディナンテ
曲プロトタイプによつて創られた世界初の人工生命体」

「？」

背後の少年が息を呑んだのが分かつた。

その一瞬の隙をついてビアンカは少年の体を蹴り飛ばした。
強化された肉体での一撃だ。黒髪の少年はそのまま後ろに飛び、
壁に激突して床に落ちた。

ビアンカは息を整えながらセイの元へ歩み寄る。

武器になり得る傘を途中で拾い上げ ようとして、あまりの重
さに断念する。

これを軽々と持ち上げるなど、やはり並の人間ではない。
ぴくりともせず床に沈んでいるジュラを見れば、頭の形が変形し
ている。後でボスに頼んで聖譚曲オラトリオで元に戻してもうつ必要があるだ
ろう。

自分と並ぶ忠誠心を持つこの男を、ビアンカは信頼していた。
彼もビアンカも、何もかもを失っていたところをクライに拾われ
たのだ。

ジュラはその年齢故、世界政府による教育世代との軋轢で居場所
を失くし、ビアンカはその知性故に以前働いていたアルトの受付嬢
から爪はじきにされた。

一人とも、どうしようもなく周囲からみ出ていたところをクラ
イに救われた。

そして、絶対の忠誠を誓つたのだ。

「げほつ……」

口から真っ赤な血を吐いて、セイはぐつたりと壁にもたれかかった。

服に大量の血液が撒かれる。

「な……あ、それ、本当なのか……？」本当にコウじやなくて俺が

『創られた方』なのか……？

荒い息の下から確認を求めるセイを、ビアンカが冷たい瞳で見下ろしている。

「嘘をつく理由なんてありませんから」

「そ……か」

コウは創りモノなんかじやなかつた。

不思議なほどに安堵していた。

無理をして動かした体はもう言つ事を聞かなかつたし、全身は痛みを通り越して熱くなり、その後、急激に冷えていった。喉の奥から「げほつ」ほと血が上つてくるからきつと内臓を傷つけたんだろう、と思う。

このままでは危険だらう事はすぐに分かつた。

ああ、でもコウに会いたい。

降りてくる瞼に負けそうになつた時、よく聞いた声が耳に届いた。「すまんが、ビアンカだつたか、そこ、どいてくれるか？ そいつを回収しなくちゃいけないんでね」

冷えて行く指先がぴくりと動いた。

この声は。

「部下の不始末は上司の責任でね、そこのオヤジと一緒にお前もちよつと眠つてる」

きいん、と不快な高音が響いて、ビアンカが床に崩れ落ちた。落ちてくる瞼に逆らつて見上げると、見慣れた蒼い瞳が見下ろしていた。

背にはジニアを背負い、手に黒い傘を持っている。

「少しだけ待つていり、すぐにコウの処へ連れてつてやるから」

シンの穏やかな声を聞きながら、セイは意識を手放した。

次に目を覚ました時、最初に目に入ったのが美しい真紅の瞳だった事に安堵した。

生まれて初めて、神に感謝した。

「……コウ」

知らず唇の端が上がつて微笑みの形をとる。

「キミは馬鹿ですか」

覗き込む相棒の顔が青ざめているのは氣のせいじゃないだろ？。多数の切り傷が刻まれたコウの指がセイの頬に触れた。

いつも辛辣な台詞を投げ掛ける相棒が優しいのも氣のせいじゃないと思いたい。

「よかつた……コウが人間で」

よく分からぬ言葉が口をついた。

しかし、セイの心の中のすべてだった。

「いつたい何を言つているのですか、理解できません」

抑揚のない声の中にも動搖が見える。

長い付き合いだから。

今度は確信した　「コウはきっとここに来るまでは知らなかつた筈の真実を知つた。セイが「ゼロ」と呼ばれる創られた生命体である事も、コウ自身がかつて迷子トツルであつた事も。

相棒はすべてを知つて、それでも自分の隣にいてくれる。

「何故逃げなかつたのですか、相手は聖譚曲^{オラトリオ}で強化された者達だったのでしょう？ しかも弾切れのキミとエネルギー切れのジニアでは、勝てるはずがない事はすぐに分かつたはずです」

「ここでコウを助けに来るためだ、と言つたらきっと相棒は嘲笑するだろ？ キミに心配されるほどボクは間抜けではありませんよ、と。

だから、言わない。

実際、あの時にシンが来なかつたら死んでいたかもしれない。それを相棒に知られるのは非常に悔しい気もするので黙つておく事にする。

これほどに満たされた心を味わえるのが、自分を「創つて」くれたシン達のお陰なら、一度くらい礼を言つてもいいかも知れない。

セイはいつたん目を覚ましたものの再び目を閉じた。容体は芳しくない。ここを出たら真っ先に医者に走らねばならないだろう。

ジニアの方はそれに比べればまだ軽傷と言えた。

それでも固く閉じられた瞼が開く気配は全くないが。

つい先ほど、コウが聖譚曲を前に一人悪戦苦闘している時、突然シンがぐつたりしたジニアを連れて入ってきた。

作戦変更の命令を受けていないと撫然としたコウを尻目に、シンは続いて血まみれのセイを連れて戻ってきたのだつた。

心臓が止まるかと思った

内臓を幾らか傷つけており、非常に危険な状態らしかつた。

シンはコウと交替し、モニターのミリアナと会話をしながら、コウによつてすでに起動が終わつていた聖譚曲でプロトタイプを具現化すべく忙しく動き回つた。

その間もずっとやかましく喚いていたクライには拳を叩き込んで黙らせていた。

シンとミリアナが着々と準備を進める中、コウはセイとジニアの様子を見を任せていた。

体のいい厄介払いとも思つたが、確かにコウがやるよりもあの二人がやつた方が格段に速い。

ユニゾン・システムで中枢に入り込んでいたはずのシンがなぜここに来たのか不思議ではあつたが特に尋ねるべき事でもなかつた。

「悪い、コウ、手伝つてくれ！」

作業を続けるシンに呼ばれ、コウは一人を置いて上司の元へ向かつた。

プロトタイプの情報はすでに聖譚曲^{オラトリオ}に送られている。

あとは、機械の微調整を行い、具現化を行うだけだ。

「重力波のコントロールを俺がやるからお前はプラズマの方を頼む」「分かりました」

「コウはシンの隣に入り込み、パネルの上で両手を滑らせた。

「あと30秒後に照射開始するわ。カウント、29、28、27……」

「コウは炉にプラズマの流入を開始した。

これは「素」だ。プロトタイプを作るための「質量」。

そして、シンが「作る道具」である重力波を照射する。

エネルギーレベルが上昇していく。聖譚曲^{オラトリオ}全体が大きく震え、緊

張を高めていく。

「15、14、13……」

「重力波スタンバイ〇・K・」

シンが中央のレバーに手をかけた。

「プラズマ量が規定値を突破しました。放出回路を閉じます」

「5、4、3、2、1……照射！」

ミリアナの声と共にシンがレバーを強く引く。

地鳴りのような音がして、床が振動した。遮断しきれない熱が聖譚曲^{オラトリオ}から漏れだして、熱風として吹きつけた。

思わず両腕で顔を庇い、身を低くする。

特に創生炉から、固く蓋を閉じた隙間から熱と言つには禍々しいエネルギーの残滓が身を乗り出している。

人類には過ぎた力。

「コウはその言葉を思い出していた。

こんな力の前に曝されれば、人間などひとたまりもない。

熱風は数十秒にわたり続いた。

ちりちりと痛みを残す両腕をそつと外すと、

聖譚曲^{オラトリオ}は何事もなか

つたかのようにその場に佇んでいた。

何も動じない、黒々としたフォルムに改めて恐怖を感じる。

「どうやら、成功よ。炉の冷却後、すぐ聖譚曲の情報化に入るわ。

ただ、冷却に10分以上かかるの。その間に敵がそっちに行かない事を祈ることね

「お前こそ聖譚曲情報体の分解の準備はできるんだろうな

「貴方にこそプロトタイプの操作方法、忘れていないでしょうね?」

そろそろ聞き慣れてきた一人の応酬は聞き流し、コウは部屋の隅に避難させてあるセイとジニアの元へ向かつた。

今 の 振動 の せい な のか、ジニアが目を覚ましたらしく、 ゆっくりと起き上るところだつた。

「大丈夫ですか?」

決まり文句のようになんとうと、ジニアはこくりと頷いた。
陶器のようだつた頬に殴打の跡がある。服もぼろぼろで、レースが破れて垂れ下がっている部分もあつた。

「…………ごめんなさい」

唐突に、ジニアは言った。

首を傾げると、いつもにも増して消え入りそうな声でぼつり、ぼつりと言葉を紡いだ。

「…………助けられなかつた…………そのヒト」

ジニアは隣に横たわるセイを示した。

「キミが彼を助ける理由はないと思うのですが

「…………でも、貴方ならきっとそうすると思つて。それに、彼も貴方の元に行く事を望んでいた」

不可解な言葉だった。

セイが望む、望まないはジニアに何の関係もないはずだ。まして

や、命をかけてまで細腕の女性が闘うような理由ではない。

それはヒトの望みを叶えようと闘う英雄のモノだった。

「……私は破壊する事以外出来ないから……せめて、何かを守つて

みたかった、んだと思う」

本当に不思議だった。

この少女の考えている事はまったく理解できず、それなのに、この少女に興味を持った自分がいる。

出生を知ったことでコウの中に少しずつ確実なモノが出来上がりつつあった。

それは、ずっと忘れていた「感情」と呼ばれるパート。

この少女も「ウと全く同じ出生を持つのだという。そのせいで、どこか歯車の合わない不安定な精神を抱えているのかもしれない。

「ジニア」

一步踏み出るのは、今なのかもしれない。

「ここから戻つたら、話したい事があります」

表情もなく首を傾げた彼女となら自分の中の虚構を共有できるだろうか。欠けたピースを合わせるように、欠落を互いに埋められないだろうか。

帰つたら彼女にも自分と同じ出生を知つて欲しかった。

その上でどう変わるのかを知りたくなつた。

拾つてくれたシンと相棒のセイ以外に何も存在しなかつた世界に、初めてコウはヒトを引き入れた。

この場と状況にそぐわぬ穏やかな空気が包み込む。

「……分かった。でも、今じゃ駄目?」

「できればセイにも聞いて欲しいと思ったのですから」自分の中に生まれた変化に。

それを聞いたら、彼はいつたいどんな風に笑うだろう?

コウは、知らず微笑んでいた。

冷却の終わった炉の中では、シンはプロトタイプの起動を始めた。

その間にコウは聖譚曲本体のシャットダウンを開始する。出来る限りのエネルギーを外に逃がし、緊急用のハッチを開いてプラズマのほとんどを建物の外に放出してしまう。

なるべくエネルギー値を下げなければ大災害につながってしまう。情報化とは「物体の原子配列とエネルギー値を読み取る」「その情報を情報空間に打ち出す」「本体を重力波によって分解する」という3つの過程を経ている。

つまり、情報化した物体は消えるのではなく能動的に分解を行っているのだ。

特にエネルギーの高い物体を無理に情報化すれば分散しきれなかつたエネルギーが収束、一気に拡散して大爆発を起こす危険性もあつた。

最期に聖譚曲の残存エネルギーをすべてプロトタイプに転送する。これでコウの担当パートはすべて終了だ。

あとはプロトタイプが起動し、聖譚曲を情報化するだけ。

「コウ！ エネルギー転送あとどのくらいだ？！」

「問題なればあと1分32秒です」

「わかった、2分後に聖譚曲の情報化を開始する！ お前は先に離れてジニアとセイを頼む」

それを聞いてコウはもう一度一人の元へ向かった。ジニアはすでにかなり回復しており、よろけながらも自分の足で立ち上がった。

コウは気を失ったままのセイを背に負い、ショックから避けるために聖譚曲からかなり離れた位置にあるアームの台の陰に入り込んだ。

ほつとすると忘れていたはずの足の痛みが襲ってくる。

折れではないと思うが、かなりひどい打撲になっているのは確かだ。

実だ。

「コウ！ これも持つてろ！」

シンが遠投で寄越したのは手のひらサイズの端末だつた。小さいながらもモニターが付いており、ミリアナやシンと通信できるようになつていた。また、アルトのサーバーの簡単な見取り図も出ている。

「コウはそれを握りしめてもう一度身を隠す。
そろそろ1分前だ。

作業を終えたシンも氣絶したままのクライを抱いですぐにやつてきた。

「さあ、つましくかな……？」

にやり、と笑つたシンの顔を見ると結果は上々らしい。
しばらくすると部屋全体が揺れ始めた。

「コウ、お前はセイを見る。ジニア、お前はこっち来い」
ワイヤーで縛つたままのクライは床に放置してアーム台の壁にもたれるよう膝を立てて座つたシンは、ジニアを呼んで自分の前に座らせた。

こうして並ぶと親子に見えるから不思議だ。

「コウは血に染まりきつたセイの服飾の鎖をはずし、横抱きにしてシンの隣に座る。

その間にも揺れは酷くなつてゐる。

「さあ、くるぞ！」

インパクト衝撃の瞬間、シンはジニアを膝の間、腕の中に包み込んだ。

「コウも未だ動かないセイの体を強く支えた。

形容できない凄まじい音がして床が上下に大きく揺れた。それで
も収束しない熱風が一瞬遅れて吹きつける。

背に当たつていた壁は一瞬で急激な温度上昇を示し、上下で済ま
ない衝撃波は左右、前後、あらゆる方向に搖さぶつた。

何かがぶつかつたわけでもないのに背中に衝撃を受け、息が止ま
る。

熱風にせりられないよう田を閉じ、必死にこの余波がおさまるのを待つた。

それからどれだけ経つただろう。

ふと気がつくと揺れは収まつており、熱もあらかた引いていた。それでも熱耐性があるはずの有機素材の壁にははつきりと溶けた跡があり、コウたちが身を隠していたアーム台も溶けて角がなくなり、半壊していた。

そつとセイを床に横たえ、隣を確認するとすでにシンとジニアの姿がない。

立ち上がりつて振り向くと、そこには 何もなかつた。

「成功だ、コウ」

聖譚曲オラトリオがあつたはずの空間は、ただのがらんじうと化していた。

見上げても天井の見えない吹き抜けが見下ろしているだけ。

裾野の広がつていた場所は床が大きく溶けた跡があり、まるでクレーターのように凹んで無残な姿を曝している。

その中央には、プロトタイプと思われる有機体と金属の塊が落ちていた。情報化を施した機械自体もこのエネルギーの大きさに耐えられなかつたのか、あちこちに溶けた跡がある。

それでも起動を示すランプがついていたのはさすがとしか言ひようがない。

「あとは情報空間で聖譚曲オラトリオを破壊すれば任務完了なんだが……コウ、わつきの端末」

セイと共に底つていた端末は無事だつた。

シンにそれを渡すと、モニターにミリアナが現れた。

「ありがとう、完璧よ、シン」

頬を紅潮させたミリアナは興奮気味に叫んだ。

「あとは任せて。あなた達は早く脱出するの」

「了解」

シンは端末を切つた。

さすがにコウの肩から力が抜ける。

これでようやく世界の崩壊を、当面回避できたようだ。

「ジーナ、先にポイントAへ戻れ。傘はさつを充電しておいたから少しほは使えるはずだ」

そう言つてシンはジーナに傘を手渡す。

「コウはセイを連れて行け。プロトタイプの破壊は俺がやる」「分かり……」

「……ちょっと待てって」

「コウの言葉を遮る声があつた。

先ほどまで意識を失っていた相棒の声。

見ると、つっすらと田を開け、こちらを見ていた。全く回復していないその様子に「コウは一抹の不安がよぎる。

「プロトタイプ、壊す前に見てみたいんだ。だつてそれ……俺を創つた、ヤツだろ？？」

セイの言葉に、コウは、シンでさえも言葉を失つた。

「コウは歩けないセイを担いでプロトタイプに近寄つた。

クレーターの坂を下り、近寄つて見ると溶けているように見えたのは突出部だけで、本体はほとんど傷ついていなかつた。

ほぼ正方形だが、レーザー銃のような射出口が一つ飛び出している。完成版に比べるとあまりに簡素、としか言いようがない。

コウの背のセイは懐かしむようにその表面に触れ、目を閉じた。

「なんとなく、思い出した。俺は、これから生まれたんだ」

「……」

「コウには何も言えなかつた。

何より、セイが自らの出生を知つていた事に驚き、それでも変わらない笑顔を見せる事が酷く嬉しかつた。

例えそれが彼の「感情を学習出来ない」という能力を示していたとしても。

「うん、最初にシン兄を見た。それから、ミリアナ。あと黒い眼のヒト……あ、あれ俺のオリジナルだ、マコトさん。それにあいつもいたなあ、金髪のさ、そう、クライ」

「その4人が当時の主要メンバーだつたからな」

シンは珍しく邪氣ない笑顔を見せた。そうするとやけに幼く見える。

「コウに会つたのも覚えてる……6年以前のコウの記憶がないって、当たり前だよなあ。だって俺が生まれたのは6年前なんだから」
そう言いながらセイは目を閉じてコウの肩に額を預けた。
幼子のようなその行動は、6歳という年齢を示しているようにも見え、コウはあまりに弱々しい声と力ない体に不安を覚えた。
「コウ、あんまり近寄るなよ、まだスタンバイ状態だ」

「……そうですね」

「コウがプロトタイプを離れよつとした時、端末からミリアナの切羽詰まつた声オラトリオが流れてきた。

「シン！ 聖譚曲を破壊できない！」

「何だと？！」

「？！」

一瞬にしてその場に緊張が走る。

端末のミリアナは頬を紅潮させ、必死で状況をシンに伝えた。
 「プログラムがすべて凍結しているの！ 見た事もないプログラム
 よ、ウイルスさえも取り込まれて動かないの！ 聖譚曲^{オラトリオ}に絡みつく
 みたいにして増殖してるよう見えてるわ」

「増殖……まさか！」

シンの眉が跳ね上がった。

「そいつは俺がさつき構築した増殖プログラムだ。気をつけろ、ミ
 リアナ！ ハルカがその辺にいる筈だ！」

「ハルカですって？！」

切羽詰まつた事態だ。

コウが口を開こうとし時、さつと後ろから影が飛び込んできた。

「何だ、と思う間もなく目の前が光に包まれる。

「聖譚曲^{オラトリオ}を返せ！ 今すぐ現実世界に戻せ！」

振り向いたコウの目に飛び込んできたのは、顔を真っ赤に腫らし
 たクライだった。先ほどの熱風でやられたのだろう。

クライは焦げた金髪を振り乱しながらプロトタイプの側面にある
 操作パネルに齧りつく。

「クライ！ バカ！ 逆だ！ そつちは情報化の操作ボタン……」

シンの言葉は途中までしか聞こえなかつた。

コウはセイを担いだまま、虚構^{タチエック}へと吸い込まれていつた。

田の前でセイとコウが消えた。

これは、二人が虚構タチエットへと飲み込まれてしまったことに他ならない。

「こんの……バカやううつ！」

思わずクライに掴みかかつたが、顔を真っ赤に腫らした彼の目の焦點は合っていない。

駄目だ。もう、こいつは

理性はそう判断したが、感情はそうもいかない。

「聖譚曲オラトリオはもうねえんだぞ！ それを情報化しやがつて……あいつらまで迷子トコリにつ……！」

原子具現化を可能にする聖譚曲オラトリオが情報空間に消えた今、あの二人は現実世界に戻れない。

永久に情報空間を彷徨うことになる。

握りしめた拳が震えた。

「もうあいつらが現実世界に戻ることは出来ないんだぞ？！」

一見すると、常に冷静さを保っているようにも思えるシンだが、その内面は真逆の性質を持つている。だからこそ努めて心の表面を穏やかに保つようにしているのだ。

「聖譚曲オラトリオはもうない。誰も虚構タチエットからは帰つてこられない」

「黙れ、クライ」

クライの言葉がシンののらりくらりとした仮面を取り去っていく。

「創りモノの彼らも、君のシェリーも、僕の母も、誰も戻つてこない

い

「貴様、分かつていてわざと」

「そうだよ、シン。君が望んだことだろう？」

「……つ！」

その瞬間、全身の血が逆流したかと思つた。

気づけばクライの頬を殴り飛ばしていた。

残った拳の痛みと、收まりきらない感情と。

「君は何がしたいの？ 僕は今でも分からないよ。聖譚曲を否定するくせに迷子を擁護して不協和音を処分して、拳句に『ゼロ』を育てて……僕にしてみれば、君の言う事の方がよっぽど理解できないけどね」

自分の中の最大の矛盾を突かれ、シンは言葉に詰まった。

まるで旧時代の永久凍結。

現段階ではどうする事も出来ない、迷子を救う方法が見つかる未来へのタイムリープを再現しているにすぎない。

それなのに、もともとは同じ人間の情報であつた不協和音を、周囲に害をなすという理由だけで消滅させている。

まるで、疫病の発生した村を焼き払つ、原始の時代の荒療治のようだ。

そう、今は原始時代なのだ。

不協和音の治療法さえもない、情報空間の原始時代。

「だから未来に託すんだろうが……！」

いま、出来る最大の努力をする。

そしていつかの未来に、解決を託すのだ。

「それをすべて壊すんじゃねえ。手に負えないオーパーツなんぞに頼るんじゃねえ……っ」

未来をすべて消してしまつる、恐ろしい兵器に頼つてどうするのだ。

何かを望む限り、望んで目指す限り、文明は進んでいく。

「文明はまだ滅びねえよ。まだ、此処は終着点なんかじゃねえからな」

重力波が発見されたように、放射能を打ち消す事が出来るようになつたように、いつかきっと不協和音も迷子も救える日がやってくる。

現実世界で昏睡を続ける人々を、最小限のリスクで目覚めさせる方法を見つける日がいつかやってくる。

「だから、進化の全てを否定する聖譚曲だけは、絶対に具現化させねえ！」

クライの胸倉をつかみ、額を突き合わせるほどに近くで、耳元で、一言一言言い聞かせるように。

シンは言葉を発散していった。

クライだけでなく、自分自身の意味を確立し、一つずつ確認していくかのように。

大丈夫だ、このまま自分が信じた道を進むのだ、と言い聞かせるように。

「見てる。コウもセイも、このまま現実世界から消えさせたりしねえよ」

「無駄だよ。奇跡は一度きりだ。あの『ゼロ』を作った時に、奇跡は終わったんだよ、シン」

喉の奥から絞り出すような、クライの笑い声。

その笑いと不安を圧し潰すかのよう、シンは低い声で言い放つた。

「終わらせねえ。俺を誰だと思つている？」

蒼穹の幽鬼^{カルマ}は、再びプロトタイプの端末と向き合つた。

6年前に『ゼロ』を作った時と同じように。

「帰つてこい、セイ、コウ。迷子係が迷子になつてどうする。お前たちは迷子になるには早えんだよ……」

* * * * *

ジニアは一人、アルトバルランテの通路を駆けていた。
体力はすでに限界を超えていた。

ふらり、と華奢な肢体が傾いで、壁にもたれかかるように座り込んでしまった。

この通路は、先程、迷子係と共に駆け抜けた場所だ。今も多くの警備員が床を埋めて折り重なっている。誰のものとも知れぬ血が床に零れていた。

自分の息が荒いのが感じられた。

シンが充電した、と言った傘の柄をぎゅっと握りしめる。

「人間様は……何欲しい……」

喉の奥から、かすかに歌が漏れる。

この歌が思わず口をつくのはなぜだろう。

ジニアは少しづつ、心の奥底を探っていく。

「文明開化の鐘の音……天の神様、仏様」

それでも、この歌で思い出すのは優しい声。

きつと父親の声。

覚えているのはそれだけで、サイバーショック情報危機^{サイバーショック}当時、まだ幼かつたジニアの中に他の思い出はなかった。

しかし、サイバーショック情報危機の事を思い出すと、酷く怖い。

「何が欲しい、何が欲しい……」

覚えていない過去で、すべてを失つたから。

ジニアは、今も失う事を恐れていた。

だから、失う前にすべてを破壊してきた。立ちふさがる敵も、不^デ協和音^{イツソ}も、記憶も思い出も……殺戮を厭う感情さえも。

「……獲つてしまえど夢現」

本当は相棒のダリアがいなくなつて、酷く傷ついていた。麻痺した心についたその傷は、少しづつ血を流していた。

だから、次を失う事を酷く恐れていた。

自分でさえ分からぬ、心の奥底で

「叶う事さえ適わない」

叶わない。

適わない。

敵わない。

「…………… だめ」

まだ、負けるわけにはいかない。

あの人は、話したい事がある、と言つたから。

「………… 戻らなくちゃ」

少しづつ変化が訪れる。

創りモノが創りモノである事を自覚した時、確かに何かが変わった。留まらず、前へ進む力を手に入れた。文明が誕生してからずつとそうなってきたように。ジニアは、もと来た道を引き返していた。

* * * * *

ユニゾン・システムとは違う感覚で虚構^{タチエット}と現実がリンクした。

頭の中身をすべてさらけ出されたような感覚と突然小さな部屋に押し込められたような感覚が一度に襲つてきて、目眩がした。

が、それも一瞬で。

気がつけば二人は漆黒の虚構^{タチエット}に放り出されていた。

慣れた疑似重力に、コウは頭を押さえながら起き上がる。

すぐ隣に倒れているセイの無事を確認してから、コウは落ち着いて自分の状況を確認する。

「今のは、プロトタイプでボクとセイが情報化されたと見ていいんでしょうか。現実世界に生体は……残つてないんでしょうね」

まず、スコープを構築し、周囲の解析を行う。

が、すぐにコウは愕然となつた。

「これは……聖譚曲^{オラトリオ}？」

田の前に立ち塞がっていたのは、さきほどまで現実世界に存在した巨大な情報化装置の姿だった。天を衝く円錐形の黒々としたボディ。

ところが、様子がかなりおかしい。

装置の周囲を囲むようにして緑色のモノが生い茂っている。

よくよくみればそれは薦のよくなもので、今も上に向かって伸び続いているようだ。最下部はほぼ薦に覆われ、緑に変色していた。

「セイ！」「ウ！」

情報空間なのに突然名前を呼ばれてびくつとする。が、その相手を見て納得した。

息せき切つて駆けてきた金髪の女性に、薦に覆われた聖譚曲オラトリオを指しながら問う。

「ミリアナ。これはいつたい……？」

「さつきセキユリティを破る時にシンが構築した増殖プログラムらしいわ。今は、聖譚曲オラトリオを守る最高の防御壁と化しているけれど」つまり、あの増殖プログラムを何とかしない限り、聖譚曲オラトリオを破壊する事が出来ないというわけだ。

これで失敗すればこれまでの事が水の泡になりかねない。動搖を悟られないよう、出来る限り冷淡な声を出す。

「……なぜシンのプログラムが、ということはさておき、ボクはどうしたらいいですか？」

「あなた、情報戦と解析のどちらが得意かしら」

ミリアナの質問は唐突だ。

「どちらかというとボクは解析の方が専門です」

答えると、ミリアナはちつと舌打ちして腰に手をあてた。

「いい、じゃあこの増殖プログラムを解く手立てを考えなさい。あたしはその間にこれを使った奴を倒してくるから」

「分かりました」

「頼んだわよ！」

ミリアナはそう言って去つていった。

仕方がない、ここまで来たらやるしかないだろ。」

「コウは周囲に光文字のパネルを巡らせ、目の前の増殖プログラムを解析した。

さすがはシンの組んだプログラムだ。即席で作ったとは思えないほど骨格がしつかりしている。ちょっとやそっとでは崩せそうにない。

「周囲の小さい情報を取り込んで成長するようですね……なんて非常識なプログラムですか？」

皮肉にもミリアナと同じ台詞を吐き、コウはさらに解析を進める。「絶対量の上限はないようですが、一度に取り込める情報には限りがあるようですね。と、言つ事は大量の情報を一気に流し込めば活動は少なからず停止させられるでしょう」

「そこへ自己破壊プログラムを打ち込めば仕留められるはずだ。聖譚曲を放り込んで共倒れをお願いしたいところですが、そいつまくはいかないでしょうね」

大量の情報を流しこむ。

さらに自己破壊プログラムを打ち込む。

もう時間はない。すでにかなりロスしている。このまま長引けば聖譚曲を破壊できないうえに全員が脱出の機械を失つ事になってしまつ。

焦るな、焦るな。

「大量の情報……大量の……」

その時、コウの脳裏にふつと浮かんだ。

大量の情報。

それならある、ここに、ある。

生体情報だ。

複雑な元素配列とエネルギー値を持つ人体は相当な情報量だ。

ああ、そうか。

創られたモノにはそれに相応しい末路が用意されているのか。

「少しばわれるかと思つたんですが」

未だ眠り続けるセイの腰から血のついた銃を引き抜く。

「借りますよ、セイ」

情報空間内において、弾切れと言う事はあり得ない。

自己破壊プログラムをセットし、コウは馴れない手で銃を構えた

が、どうもしつくりこない。構えもどこか不自然だ。

それでもコウは唇に微笑みを浮かべると、聖譚曲に向かつて歩き出した。

しかし、決意を胸に聖譚曲オラトリオへと向かつコウの腕を、後ろから掴む手があつた。

血に染まつたその手は青白く、とても力強いとは言えないが、強い意志に満ちていた。

「ウは冷たい声で言い放つ。

「放してください、セイ」

「……いやだ」

苦しそうな息で、それでも行かせまいと掴んでいる手の力は本物だつた。

とても動けるよつた状態でないのは分かつてゐる。もしかすると、すぐに戻つても間に合わないかもしれないくらいに。だからこそ、急がなくてはいけなかつた。

「分かるでしょう、もう時間がないのです」

微かに震える声。

それは消滅の恐怖を知つた人間のモノだつた。

「……」

返答はない。

相手は手負いなのだから、と無理に振りほどこうとした瞬間。突然、セイが触れた部分が酷く熱くなつた。

「熱つ……！」

振りほどけない。

そう思つて見ると、なんとセイの手がコウの腕の中に溶け込んでいた。

「セイ、勝手に防御を解きましたね？！」

常に生体情報を包んでいる防御がいつの間にか二人とも取り払われている。

思わず声を荒げたコウは、自らの声に揺さぶられ、頭痛を誘発する。全身を貫く感覚に抗えず、思わず呻いた。

セイの手がめり込んだ腕は燃えるように熱く、痺れるほどの共鳴を伝えている。

「頼むコウ、俺を忘れないでくれ」

手から腕へ、腕から胸へ、セイの情報がコウの中に流れ込んでくる。

熱い。全身が、熱い。

それより何より、理屈でない衝動がコウの中を駆け巡つていた。二人の境界は曖昧になり、触れたところから溶けあつて沈んでいく。

「……ああっ！」

声を挙げればその分だけ背筋を貫くような衝動が駆け抜けるだけだ。

「俺は消えるけど、俺を忘れないで欲しい。俺は創りモノだけど、確かに存在したつて覚えていてくれ。コウは消えるな。だつてお前は『人間』なんだから」

ゼロとイチの集合体は、崩れるように重なり合つて、混ざり合つて、蕩けていく。

「コウの意識とセイの意識が、一人の持つ記憶が浮遊して、一つに

なる。

「やめ……セイ……！ キリ……は……！」

その意識からセイの考えを読み取ったコウは、必死に止めようとするのだが、その意志よりも強い快楽の波に押し流されて、動く事が出来ない。

止められない。

コウの代わりに消滅しようとしているセイの意志は絶対だった。そこに、恐怖はない。

あるのはコウを消させないという強い思いだけ。

「これは俺のだから返せよ。使ったかつたら練習しろよ、コウ。」

ゆつくりと混ざり合つたモノが別れていく。

永久とも思えた交わりが終わる。

初めて経験したルバートにそのまま倒れたコウ。

セイはいつものようににっこりと笑つて左手で銃を構えた。まるでそれが自分の一部であるかのよう。

「さよなら」

ぐるりと背を向けて、オラトリオ聖譚曲オラトリオに向かつて行くセイ。

その背は決意に満ちていた。

ルバートの余波で動く事の出来ないコウは、ただそれを見送ることしかできない。

声を出すだけで焼け付くような熱さが全身を駆け抜ける。それでも。

「セイ……！」

精いっぱいに叫んだ声が情報空間内に響き渡り、セイは一瞬だけ

振り返つて微笑み。

そして。

聖譚曲の中へと、消えていった。

同時に聖譚曲を包んでいた薦が霧散し、後に残つていた黒々とした本体も、まるで天へと召されていくようになくなく消え去つていった。

すべて「ゼロ」と「イチ」に還元され、すべては幻だったかのようだ。

後に残つたのは、静寂だけが支配する虚構だけ。

セイと名付けられた生命体がいた証は、それらと共にすべて消え去つてしまつた。

情報空間で崩れ落ちたコウは、その瞬間、シンによつてプロトタイプで現実世界へと引っ張り戻された。
どうり、と地面上に投げ出されたが、抵抗する気も起きずそのまま転がる。

肩や足がかなり痛んだが、どうでもよかつた。

「起きる、コウ！ プロトタイプを破壊して脱出するがー！」
シンの声でのろのろ、と起き上がる。
力が入らない。

これまでにない喪失感が全身を覆つてゐる。
感情と共に思考も停止してしまつたようだ。

「コウ！ 目を覚ませ！」

「でも、セイガ」

「いいからお前はポイントAでジニアと合流しろ」

「一人で行けといふんですか？」

「しつかりしるコウ！」

必死でコウの肩をゆするシンの頭上から、か細い声が降ってきた。

「…………どいて」

その言葉通りにコウの手を引いて飛び退ると、ふわりとスカートの少女が降ってきた。

閉じた傘をプロトタイプに向け、どん、と突くと、一瞬にしてプロトタイプは灰燼と化した。

「ジニア、先に行けと言ったはずだが？」

「…………心配で……戻ってきた」

ジニアはつかつかとコウの田の前に立ち、すっとその小さな手を差し出した。

「コウの真紅の瞳からは幾筋もの涙が流れていた。

「…………約束、破らないで。私はまだ貴方の話を聞いていない」

少女の声は静かに響いた。

少なくともたつた今相方を失くしたばかりの少年の心のどこかには触れることに成功した。

恐る恐る少年は少女の小さな手を取り、足を前に進める事が出来た。

22 : 遺された者たちの遺された道

西暦2201年 6月8日

シンはある人物に会つたために極東地域を離れ、地球の正反対側、アフリカ南端のある地域へとやつてきている。

このあたりは情報危機^{サイバーショック}の被害が小さかつた事もあり、復興が非常に早い。公共交通機関も発達しており、治安も極東地域とは比べ物にならないほどいい。

シンはその街を高い位置から見下ろした。

何重にも交差する空中路が縦横無尽に走り回り、折れそうに細長い建物が見渡す限り続いている。真下を見下ろせばきちんと整備された緑化地域も存在し、よく見れば豆粒以下の人間たちも認識できる。

太陽の光が溢れる街を見下ろしながら、シンは煙草に火をつけた。あの襲撃から10日、シンは報告の為に世界政府を訪れていたのだ。

シンがいる部屋は地上約500メートル、足音を消してしまうほどに柔らかい絨毯が敷き詰められ、この地方の伝統技法で織られたカバーの掛けられた柔らかそうなソファ、それに有機硝子のテーブル。

煙草を吸い終わつてしまふもしないうちに、一人の男性が部屋に入ってきた。

「ドクター・オルディナンテ、お久しぶりです」

タチエット 深々と礼をしたのは世界政府でたつた8人しかいない幹部の一人、虚構問題を一手に引き受けた特殊機関の長、クレバ＝セイゲンジ。

スースは特注サイズであるう恰幅の良さと裏腹に理知に富んだ深い瞳が印象深い壯年男性で、世界政府には珍しいモンゴロイド系である。典型的な紡錘形をした体を揺らしながらシンに握手を求める。

細身で長身のシンと並ぶとその体型の差が目立つ。

「お久しぶりです、長官。お元気そうでなりより」

「ドクターこそ、幾つになつてもお元気そうで……噂は、すでに世界中に広まつていますよ」

瞳に鋭い光を灯し、長官はシンの蒼い瞳を見た。

「アルトパルランテの本社が何者かに襲撃された。テロか、情報危機で大きな被害を被つた人々の報復か とね」

「いやはや、お恥ずかしい限りです」

シンは頭をかいた。

「今日はその報告に上がりました」

「……まあいいでしよう、お掛けください」

長官に促されソファに身を沈めたシンは、アルトパルランテに侵入、聖譚曲を破壊するまでの流れを事細かに説明した。

そして、最後に原子具現化の研究をアルトでなく世界政府の傘下に入れて欲しい、という言葉で締めくくつた。

「政府は既に動いています。ドクターから連絡をいただき、すぐに極東支部を動かしました。アルト内にも捜査の手が入っています。アルトパルランテ本社の社長クライ＝オメガ＝アルト＝アルトパルランテは重度の精神障害を起こし入院、その秘書だったビアンカ＝アルト＝クラスターは自殺、ジュラ＝アルト＝リアドビスは遺体で発見されています。また、その直前に主要研究員のミリアナ＝アルト＝ヴェルジネが失踪しており、原子具現化人体生成システム、通称聖譚曲に關わる主要研究員は4名とも事実上死んだも同然です」

「それはよかつた」

「よいかどうかは分かりませんが、これで一段落です。聖譚曲に關わっていたトップメンバーが離散したことで向こう10年の心配はないでしょ。あと10年あれば世界はかなり立ち直り、虚構に關しても閉鎖が解ける見通しも立つています。その頃になれば、『原子具現化』に關して世界中が考えていく余裕も持てるはずです」

長官は自信満々に展望を語つた。

それが実現するかどうかは分からぬが、少なくともこの長官はやるといった事に対しても最大限努力をする人だ。シンにはそれが分かつていた。

「俺達のような研究者が世の中を引っかき回すのはよくないんですよ。昔から言うでしょ？ 世界を作るのは理系、それを世界を動かすのは文系ってね。科学者が世界に干渉していい事が起きた試しがない。最後に文系のフィルターを入れないと」

「世界を作るのは理系……ですか。言い得て妙ですね」

「科学者は何かと自分の願望に走りがちだ。もしくは、研究以外の事が見えなくなることが多い。それにストップをかける仕事があるて然りだと俺は思いますよ。あいつだって

言いかけて、シンは言葉を呑みこんだ。

ここで出すべき話題ではない。

「あいつだって、何ですか、と聞きたいところですがやめておきましょう」

それを察したのか、長官もそれ以上追及しなかった。

「さて、ドクター。この後の『ご予定は？』

「子供達を家に待たせてあるんですね、すぐ地球の反対側までにとんぼ返りですよ」

「そうですか」

にこりと笑つた長官は親の顔をしていた。

彼も子を持つ親の一人だ。

会釈して退出したシンはふう、とため息をつき、煙草に火をつけた。

部屋の外のSPにじりりと睨まれるが気にならない。

「さて、帰るかな」

伸びをしたシンは、世界政府を後にした。

地球半周の距離を越えて、シンはまるばるソルディーノに帰還した。

いつもなら迎えてくれた大声がないのは少し寂しいか。
黒髪黒眼の少年を思い出し、自嘲気味に笑う。
ところが。

「お帰りなさい、『シン兄』」

部屋の椅子に座つたところを、後ろから声をかけられて驚いた。
何しろ、それは黒髪の少年以外使う事のない名で、かつソルディーノへ戻ってきたシンに「おかれり」を言う人間も黒髪の少年だけ
だったから。

はつと振り返ると、そこに立っていたのは黒髪の少年の相方だつた。

「あ、ああ……」

「ようやくこちらを向いて返事をしてくれるようになりますね」
にこり、と笑うコウに違和感を覚える。

その違和感の正体に気付いて、思わずシンは絶句した
「コウが？」 笑う？

吸おうと咥えた煙草が床に落ちた。

「明日は休みなので、ジニアと少し出掛けます」

「お、おう、気を付けて行つて来い」

「は」

ほんの少し雄弁で、ほんの少し笑うようになつたコウに、シンは戸惑っていた。

敬語は相変わらずだが、あれではまるで

「コンタミネーション、よ。情報を混ぜ合わせても拒絶反応を起さず、破壊もされず、ただ『混ざり合つ』現象。相手の情報を受け取つて自分のものとし、自分の情報を相手に渡して共有するの。珍しいわね。コンタミネーションが起こる相手と出会つ確率は約100億分の1。あの子たちの出生を考えると、ほとんど奇跡みたいな

数字ね

「ミリアナ、いたのか」

「ん、さつきから」

「奇跡ね……奇跡つつーなら、不完全なプロトタイプでコウ一人だけでも現実世界に戻せたのだって奇跡だろ?」

「違いないわ」

モニターには金髪の女性が映っていた。

今日は薄汚れた白衣ではなく金髪に映える黒のワンピースを纏つており、眼鏡も外していた。

「コウの言葉から推察するに、おそらく最後にセイは『ルバート』したんだと思うわ。『俺を忘れないでくれ』って言つたらしいわよ

「……」

「素敵よね、自分の事を忘れないように、記憶も感情もすべてを共有して、一つにする。相手の事を忘れないように、相手の情報をすべて受け取る。あたしたちの『ゼロ』は、なかなかロマンチックな子に育つたんじゃない?」

「何がロマンチックだ。あのバカ……！」

シンは煙草の煙を吐いて氣を落つけた。

「……いや、バカは俺だ。聖譚曲オラトリオを認めないと言いながらセイを育て、コウやジニアを創り、今でも希望を込めて迷子トリルを保護している。いつだつて矛盾ばかりだ」

自嘲の意をこめて煙と共に吐いた弱音は、部屋の空気に紛れて消えていった。

「大丈夫よ、あたしはそんな風に悩むあなただから 助けを求めたのよ？」

ミリアナはぼつり、と呟いて、返答を得る前にぱっと顔を上げた。
「じゃあ、あたしも行くわ。迷子トリルでもない、だからと黙つて不協和音ディックでもない半端者として存在し続けるわけにはいかないもの」

モニター越しに蒼穹と翠玉が交差した。

「……そうか」

「あたしの生体はもうない。あつたとしてもあたしは聖譚曲を消すためだけに創られたゼロとイチのバックアップ。いずれにしても行き場なんてないわ」

「お前が望むなら、ソルティーノで働くか?」

「いいえ、遠慮するわ。消えるタイミングを失っちゃいそうだものふるふる、と首を横に振ったミリアナは、にこりと笑った。

「でもあなたは……あの赤田の子みたいに、あたしの事を受け入れてくれたりはしないわよね」

「ああ」

「そう……そうよね、あなたはいつもそう」

悲しそうに微笑んだミリアナの瞳が潤んでいた。

シンはそれを見ても表情を変えず、淡々と言った。

「情報として残さなくとも、俺がお前といたという事実は変わらない。人は影響し影響されるために人と関わっていく。そして、関わる事で自己を形成していくもんだ。だから、お前が消えても、お前の存在は俺の中に、残つてるよ」

それを聞いて、ミリアナはもう一度笑つた。

「……ありがとう」

シンはくるりとモニターに背を向ける。

ミリアナの唇は「サヨナラ」と動き、それつきり、モニターは沈黙した。

静かな部屋に、煙だけが伸びる。

いつものシンの部屋だ。

「あいつだって最初は、『迷子を虚構から救いたい』っていう純粹な目的から研究を始めたんだぜ？」

彼の母親は情報危機以前に事故で情報空間に取り残された迷子だ

（サイバーショック）

トリー

トリー

タチヒツ

オラトリオ

つた。今は圧縮をかけてアルトのサーバーの中心で眠らせてあるが。息子は母を情報体から現実世界の生体に戻す為、原子具現化の研究を始めた。

最初はただ、それだけの事。

文明を進める活力となるのは、いつだつて個人の切なる願いだ。もちろん、ダイナマイトを発明したアルフレッド・ノーベルも、重労働を強いられる炭鉱の労働者たちを助けるために研究を始めたのだ。

「これで俺は、最後の一人、か」

プロトタイプを作つた時は4人だつた。いつの間にか一人減り、二人減り、聖譚曲オラトリオが完成し破壊された後、残つたのはシン一人だつた。

「……一人つて、案外寂しいもんだな」

誰にも聞かせない弱音を吐いて、シンは煙草をスニーカーで踏み潰し、新しい煙草を咥えた。

が、「非常識!」という台詞を思い出し、火をつけようとした手を止める。

「……少し、本数減らすか」

ミリアナが聞けばそういう問題じやない、と盛大に怒られそうな台詞を堂々と吐いて、シンは煙草の入つた箱をぽい、と「ミミ箱へと放つた。

放物線を描いたそれは、がさつという小さな音と共に視界から消え去つた。

「だからこれは最後の一本てわけだ」

最後に咥えた煙草に火をつけ、シンはもう一度煙を吐いた。

ある晴れた休日、コウはジニアを連れて外に出た。ジニアの服は相変わらず、シック調のワンピースで、雨も降つてないのに傘をさしていた。

「コウもいつも通り、動く度に鎖の音（スパイク・バンブル）がする服を身に付けていた。両手首にワイヤーを仕込んだ棘腕輪を装着しているが、さらに上腕にもかすかに血のこびり付いた鎖が巻きつけてあった。

快晴の空には温かい風が吹いていて、すでにやつてきていた初夏を主張している。

コウが音もなく通りを歩き、ジニアがそれから2歩遅れて続く。そんな風にして、二人は黙々と歩いていった。

到着したのは街はずれにある廃墟。

入口の扉さえ壊れているその建物は、簡単に屋上までに入る事が出来た。

「ここからはアルトの本社がよく見えるんです、」

「…………本当」

それほど高い建物ではないが、外れにあるため周囲に高すぎる建物がなく、屋上から街が一望できた。

何より、目の前にアルトの本社ビルが他の建物から飛びぬけて立つている。

「…………話って、何？」

ジニアは首を傾げてコウの真紅の瞳を見上げた。

その紫水晶にこじりと微笑んで、コウはジニアと共に床に直接腰を降ろした。

「そうですね、何から話しましようか」

目を伏せたコウの横顔をじっと見て、ジニアはぼつりと呟いた。

「不思議…………貴方と一人でいるのこ、まるであの人と3人でいるみたい」

「そうですか、それは非常に嬉しいですね」

表情が豊かになつたコウを不思議に思いながらも、ジニアは違和感を覚えたりしなかつた。むしろ、この方が彼本来の姿である気がする。

「これから話そつとは、セイとボクとジニアとダリアの話です……聞きますか？」

「こくりと頷くジニア。

「それでは、最初にお願いがあります。話を最後まで聞いてもボクの事を嫌がつたりしませんか？」

その間に、ほんの少し首を傾げたジニアは小さな小さな声で返答した。

「…………たぶん、嫌がらない。私は貴方の事を知りたいと思つている。それに」

「紫水晶が光を反射して綺羅らかな光を放つ。

「私は貴方の事嫌いじゃない」

「そう……ありがと」

もう一度微笑んだコウの向こうに、黒髪の少年が見えた気がした。

最後までお読みいただき、ありがとうございました！

天富華円さまが「ウのイラストを描いてくださいました」

› . 1 1 3 9 6 4 — 1 9 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9774e/>

閉ざされた虚構の不協和音

2011年6月19日20時04分発行